

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第29号 (通巻第57号)

体育心理学専門領域

2017年7月発行

一般社団法人 日本体育学会体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、一般社団法人日本体育学会 体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
(1) 研究会の開催
(2) 会報の発行
(3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
(4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
(1) 会長 1名
(2) 理事 12名
(3) 監事 2名
- 第6条 役員を選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
(1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
(2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
(3) 理事長は、理事の単位無記名投票による最多得票者とする。
(4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
(1) 役員を選出
(2) 事業報告および収支決算
(3) 事業計画および収支予算
(4) 会則の改正
(5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。
- 附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
3. この会則は、平成21年8月27日から施行する。
4. 平成24年4月1日より、日本体育学会が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称し、本会則の名称を「体育心理学専門領域会則」と改称する。
5. 本会の事務局所在地および事務局担当は以下の通りとする。
事務局所在地 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科 工藤和俊研究室
事務局担当 工藤和俊

体育心理学専門領域の役員

任 期：平成29年4月1日～平成31年3月31日

会 長：阿江美恵子

理事長：工藤和俊

理 事：学会大会委員会 ○佐々木万丈、菅生貴之、山本裕二

企画委員会 ○北村勝朗、磯貝浩久、東山明子

広報委員会 ○兄井 彰、荒井弘和、荒木香織

庶務・会計委員会 國部雅大（庶務担当）、奥村基生（会計担当）

○委員長

監 事：木島章文、田中美吏

幹 事：鈴木啓史

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第29号 (通巻第57号)

体育心理学専門領域

2017年7月発行

巻頭言

体育心理学専門領域「会報」(第29号)の刊行によせて

体育心理学専門領域会長 阿江美恵子

2017年4月より事務局が広島大学関矢寛史先生から東京大学工藤和俊先生へ移転しました。いろいろご苦労をお掛けすると思いますがどうかよろしくお願い致します。

さて、私事ですが2期4年間の日本体育学会副会長の任期を2017年6月で終えました(中途半端な時期は一般社団法人になったことによります)。多くの会員は体育学会理事会が何をしているかわからないと思いますので、この機会に少し紹介します。理事は専門領域、地域の代議員の中から互選で選ばれます。大きな仕事は毎年開かれる学会大会の企画と機関誌(体育学研究と国際誌 IJSHS)の編集です。その他に協定を結んだ外国(ドイツ、台湾、韓国、インド)との交流、学習指導要領への意見具申、体育・スポーツの学術発展に資する活動などが仕事です。オリンピック・パラリンピック開催国で開かれるスポーツ科学会議は2020年開催に向けて準備を進めていますので、専門領域も会議を担うこととなります。

専門領域の活動は体育学会全体の活動と連動していますので、学会大会での発表企画が主な仕事です。体育学会は会員数が多く、研究領域が15という複合領域ですので、核になる身体教育が消えてしまうとバラバラになる危険性があります。体育学研究は経費削減のため年々厚くなっていますが、他領域論文でも目的を読むと勉強になりますから、お勧めです。関連して、査読への謝礼は今期から廃止されました。楽しみにされている方ゴメンナサイ。

学問としてスポーツ科学を確立するという体育界の悲願は、筑波大学体育科学研究科(博士課程)の設置(1976年)で達成されました。すでに40年以上経過し、体育・スポーツ系の学部・大学院も増加し学問領域として確立したと考えてよいと思います。研究領域の細分化が進むことは学問としては深化ですが、日本の学問全体が細分化され、若い研究

者のポストを狭める原因になっていると思います。私は大学で教える先生方に問題意識を持っていただき、研究領域の自由度を高めて頂くことも必要ではないかと考えています。

体育・スポーツ科学は複合領域ですから、実践と理論研究を両輪として進むべきだと思います。専門コースでなくても研究対象のスポーツ行動を追いかけることができます。体育・スポーツの存在意義は最高のパフォーマンスの発揮だけでなく、身体教育であることを強調したいと思います。

体育・スポーツ科学全体の発展を考える研究や人材が、本研究領域から出てくることを強く期待しています。

体育心理学専門領域会報 第29号
目次

巻頭言	i
目次	ii
I. 日本体育学会第67回大会関連	
1. プレセミナー	
題名：不動心と瀧修行について学ぶ	
実施報告：杉山佳生（九州大学）	1
参加記：東浦つかさ（広島大学大学院）	2
2. キーノートレクチャー1	
題名：体育授業の心理学—動機づけ雰囲気に着目して—	
司会：内田若希（九州大学）	3
演者：中須賀巧（兵庫教育大学）	4
傍聴記：佐々木史之（環太平洋大学短期大学部）	5
3. キーノートレクチャー2	
題名：運動有能感を育む指導法：体育授業からメンタルサポートまで	
司会：土屋裕睦（大阪体育大学）	6
演者：岡澤祥訓（大阪体育大学）	7
傍聴記：伊藤友記（九州共立大学）	9
4. シンポジウム	
題名：感情から紐解く体育・スポーツ科学のこれから	
司会：北村勝朗（東北大学）	10
コーディネーター：手塚洋介（大阪体育大学）	11
演者：鈴木直人（同志社大学）	12
感情の機能—心理・生理・行動的側面からの多角的検討—	
演者：関矢寛史（広島大学）	13
感情と認知と身体運動の関係	
演者：高井秀明（日本体育大学）	15
アスリートの感情制御に関する実験的検証と実践的検討	
傍聴記：門利知美（川崎医療福祉大学）	16

5. 口頭発表 (座長報告)	
座長：木島章文 (山梨大学)	17
座長：森 司朗 (鹿屋体育大学)	18
座長：渋谷崇行 (桐蔭横浜大学)	19
座長：中山雅雄 (筑波大学)	20
座長：齊藤 茂 (松本大学)	21
座長：島本好平 (明星大学)	22
6. ランチョンセミナー	
題名：大学院生が思い描く体育・スポーツ心理学の未来	
司会：福井邦宗 (国立スポーツ科学センター)	23
演者：来間千晶 (広島大学大学院)	24
公立中学校を対象としたメンタルトレーニングの実践報告	
演者：片上絵梨子 (大阪体育大学大学院)	25
大学生運動部を対象にした新入生サポートプログラム	
演者：雨宮 怜 (筑波大学大学院)	26
健康と実力発揮のためのマインドフルネスを活用した心理サポート	
演者：佐久間智央 (九州工業大学大学院)	27
IT を活用したメンタルサポート	
傍聴記：國部雅大 (筑波大学)	28
7. ポスター発表記	
発表者1：石倉忠夫 (同志社大学)	29
発表者2：石原端子 (沖縄大学)	30
8. 大会参加記	
大会参加記：武田守弘 (福山平成大学)	31
II. 研究会の活動報告	
スポーツ社会心理学研究会：杉山佳生 (九州大学)	32
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会：高妻容一 (東海大学)	33
運動学習研究会：山本真史 (日本福祉大学)	34
臨床スポーツ心理学研究会：中込四郎 (国士舘大学)	35
スポーツ動機づけ研究会：武田直之 (名古屋経営短期大学)	36
III. 研究室紹介	
研究室紹介：工藤和俊 (東京大学)	37

IV. 学位論文紹介	
松山博明（大阪成蹊大学）	40
田中輝海（高千穂大学）	42
須崎康臣（九州大学）	44
片上絵梨子（大阪体育大学）	46
太田啓示（日本学術振興会特別研究員（PD）、東京農工大学）	48
雨宮 怜（筑波大学）	50
秋山大輔（日本経済大学）	52
佐久間智央（日本大学）	54
神力亮太（九州工業大学）	56
V. 海外情報	
中本浩揮（鹿屋体育大学）	58
VI. 日本体育学会第68回大会関連	
日本体育学会第68回大会案内	60
VII. 事務局報告	
平成28年度日本体育学会体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録	62
平成28年度日本体育学会体育心理学専門領域 新旧理事の会 議事録	64
平成28年度日本体育学会体育心理学専門領域 総会議事録	65
資料1 平成28年度決算報告書	67
資料2 平成29年度補正予算案	68

編集後記

I. 日本体育学会 第67回大会関連

実施報告

杉山佳生（九州大学）

体育心理学専門領域のプレセミナーは、企画委員会が立案することになっているのですが、4年間務めた企画委員の最後の年ということで、何か面白いことはできないだろうかと考えていたところ、体育学会大会の主管校である大阪体育大学の土屋裕睦先生と菅生貴之先生から、「不動明王ハイキングは、いかが？」というご提案があり、渡りに船とばかりに、その案に飛びつくこととなりました（もちろん、実際は、いたって冷静に、粛々と、理事会審議等の手続きを踏んでいます）。

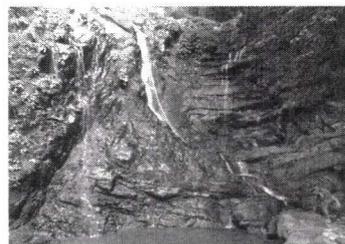
その提案は、「大阪体育大学から車で15分ほどのところに、犬鳴山（いぬなきさん）という山があり、そこに、不動明王像を拝みながら歩くハイキングコースがあり、また、修行が行われる瀧も見られるので、そこへ行くのはどうか」というものでした。犬鳴山が温泉郷であるということも、もちろん誘因ではあったのですが、個人的には、それ以上に、「不動」という言葉と、修行が行われているということに、強く惹かれました。プレセミナーのテーマも、委員長権限を利用した独断で、「不動心と瀧修行について学ぶ」に決めました。

具体的な内容については、ハイキングだけでは物足りない（プレセミナーとして成り立たない？）ということで、土屋先生、菅生先生のご尽力により、修行体験等のイベントを主催している犬鳴山七宝瀧寺（しっぽうりゅうじ）の東條仁哲（とうじょうにんてつ）管長猥下に、ご講話をいただくことになりました。この東條管長猥下、大変偉い方であり（「管長猥下」という敬称は、一つの宗派の最高責任者に用いるとのこと）、滅多にお話を伺うことはできないと土屋先生から言い聞かされていたので、かなり緊張して臨んだのですが、豈図らんや、全く以て気さくな方で、思わず、笑みがこぼれてしまいました。お話の内容も、人間味に溢れた、悪く言えば俗っぽい、私を含む関西人が好みそうなものでした

（詳細は、参加報告等をご参照下さい）。「七宝瀧寺の本尊が不動明王なので、不動心をテーマにしよう」という私の安直な発想で決められたテーマ（演題）で、管長猥下にとっては、たいそうご迷惑なことであつたかもしれませんが、そのような様子は全く見せず、不動心についてのお話を、ご講話の中に、しっかりと組み込んでいただきました。この場を借りて、お詫びと御礼を申し上げたいと存じます。

講話の後は、「身代わり不動明王像」と「行者の瀧」がある七宝瀧寺まで、片道1.5kmほどのハイキングを行いました。その後、温泉、情報交換会と続き、22名の参加者の知的好奇心を満たし、心身を癒すひとときとなったのではないかと思います。

最後になりますが、東條管長猥下からのお誘いで。七宝瀧寺では、グループでの修行体験（瀧行だけでなく、一連の修行を体験）の予約を受け付けているので、いつでもお声かけ下さいとのことでした。是非、ゼミや心理的トレーニング実習の一環として、ご活用してみてください。



修行が行われる「行者の瀧」。この日の水の勢いは弱め？



プレセミナー参加記

東浦つかさ（広島大学大学院総合科学研究科）

第67回日本体育学会が大阪体育大学で開催されました。23日には犬鳴山でプレセミナーがあり、22名の先生方が参加されました。

到着してすぐに、東條管長猯下に「不動心と滝行」という題目でお話をいただきました。犬鳴山は、斉明天皇の七年（661年）修験道の開祖である役小角が28歳の時に開基されました。霊山の中でも国内最古とされ、山内には七の滝があります。「犬鳴山」という山号についてですが、私の実家は犬鳴山から40分くらいの山を越えたところにあります。小さい頃から犬鳴山にある犬鳴トンネルといえば、お化けがでることで有名でした。なぜ犬鳴なんていう名前なのか、と不思議に思っていました。宇多天皇の頃、紀伊の猟師が犬を連れ一匹の鹿を追っていました。猟師の傍の木に大蛇がいて猟師を狙っていましたが、猟師はそれに気づかず弓をつがえ、鹿に狙いを定めて射ようとしたとき、犬が急に吠えてしまい、おどろいた鹿は逃げてしまいました。獲物を失った猟師は怒って吠え続ける犬の首をはねてしまいました。はねられた犬の首は大蛇目掛けて踊り上がり大蛇にかみつき猟師を助けたそうです。犬が吠えたのは猟師を助けるためでした。この心を知った猟師は己を悔い死んだ愛犬を供養しました。この話を聞いた宇多天皇が「報恩の義犬よ」と賞し、「犬鳴山」という山号を与えたと伝えられているそうです。

これまでに、犬鳴山にある修行場にはサッカー日本代表の長友佑都選手をはじめ、多くのアスリートが修行に来ているそうです。修行といえば、思いつくのが滝行や火渡りではないでしょうか。火渡りをする時、焦って早く歩こうとすれば、指が炭を巻き込んでしまい必ずやけどをするそうです。ある競技団体が火渡りに参加し、選手はやけどをせず渡りきることが出来ましたが、コーチだけがやけどをしてしまったというエピソードがあるそうです。怖い、熱そう、やけどをしたらどうしよう、という不安が

炭の上を歩くときに現れてしまい、焦って歩くことでやけどをする。自分は大丈夫と自信を持ち、心を乱すことなくやり遂げる、それはスポーツにおいても必要なことであると思います。しかしながら、スポーツにおいては、ただ心を乱すことなく行うことよりも、揺れ動く感情を自分の行動へと繋ぐということも必要となると思います。先日、メジャー3000本安打を達成したイチロー選手は記者会見の際に、「これまで感情を無にしてやってきたが...嬉しかったらそれなりの感情を、悔しかったから悔しいという感情を少しだけ見せれるようにしたい」と話していました。感情は適応的にも不適応的にもアスリートに影響を及ぼします。その影響を、自分の行動へとエネルギーに変えることで、さらなる努力をし、自信をつけることが出来るのではないかと私は感じました。

ハイキングは往復1時間30分ほどでした。本堂までの道のりは、思っていたよりも厳しく、熱さと乱打つに敷き詰められた石畳で、何度も足を取られそうになりました。本堂の奥にある行者の滝に着いた時、暑かった道中が嘘のように涼しかったのをよく覚えています。ハイキングが終わった後の、温泉や懐石料理もとても素晴らしく、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。

最後になりましたが、プレセミナー開催にあたり、お世話になりました関係者の皆様に感謝申し上げます。

司会報告

内田若希（九州大学）

本年度のキーノートレクチャー①では、中須賀巧先生（兵庫教育大学）を演者にお迎えし、「体育授業の心理学—動機づけ雰囲気に着目して—」というテーマでご講演いただきました。中須賀先生は、体育学研究をはじめとする多くの学術誌に関連論文を發表されており、動機づけ研究の若手の最先鋒といっても過言ではないでしょう。

はじめに、本レクチャーにおける主要な概念である達成目標理論と動機づけ雰囲気について説明がなされました。達成目標には、練習や努力を重視し、自己の技能の向上や学習過程の努力それ自体を目標とする熟達目標と、能力を重視し、他者よりも良い成績をあげて自分の能力を示すことを目標とする成績目標が含まれます。この2つの達成目標のうちどちらを採択するのかは、個人要因である目標志向性に影響されると従来の研究ではされてきました。しかし、教育現場における実際の学習場面は、生徒と教師で構成されるダイナミックな相互作用の場であり、集団における動機づけ雰囲気の検討の必要性があるとのことでした。この動機づけ雰囲気には、努力に価値が置かれ、練習や技能習得のプロセスを重視する熟達雰囲気と、能力に価値が置かれ、他者比較を通しての達成を重視する成績雰囲気の2つが存在します。

海外の研究では、成績雰囲気は否定的な動機づけ関連要因と、熟達雰囲気は肯定的な動機づけ関連要因と関係性が認められることが明らかにされてきました。しかし、国内の研究においては、成績雰囲気が有能感など肯定的な要因と関連していることを踏まえ、文化差やカリキュラムの違いなどに鑑みながら、中須賀先生は研究を進めてこられました。教育効果をもたらす授業雰囲気については教育現場の教員も模索しているものであり、中須賀先生の一連の研究成果は、どのような授業雰囲気を設定することが有効か、生徒にどのような目標を持たせることが

効果的かといった視点を切り口に、より良い体育のあり方を模索した貴重な取り組みであるといえるでしょう。

また、従来の研究では、おもに成績雰囲気ではなく熟達雰囲気が重視されてきましたが、中須賀先生は成績雰囲気の肯定的な効果についても言及されました。教師が成績雰囲気を作り出す場合、生徒の運動に対する否定的な考えを高める可能性がある一方で、生徒自らが作り出す成績雰囲気は自己成長の手段となり得るものであり、生徒が自発的に競争をすることも大切であるとのこと指摘は、非常に価値のある知見であったと思います。

中須賀先生のご講演は、中学校の体育授業を中心とした研究成果に基づいていましたが、小学校や高校、大学などでの体育授業や運動部、スポーツチームなどのフィールドにおいても有用な内容であったと思います。加えて、運動・スポーツ心理学や体育心理学領域においての近年の重要なトピックである、体育・スポーツ嫌い、道徳性（暴力や倫理に関する様々な問題）、運動継続、および自己成長などにアプローチする示唆に富んだレクチャーであったのではないのでしょうか。なお、本レクチャーで扱われた研究成果は、体育学研究や日本教科教育学会誌にて公表されておりますので、よろしければあわせてご参照ください。

最後になりますが、演者の中須賀先生、ならびに会場にお越しくくださった皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。

演者報告「体育授業の心理学 - 動機づけ雰囲気に着目して -」

中須賀巧（兵庫教育大学）

「体育授業の心理学 - 動機づけ雰囲気に着目して -」という表題で体育心理学専門領域のキーノートを担当させていただきました。依頼をいただいた際、嬉しいという思いと同時に、はじめてのことで若干の不安を抱きながらも、研究してきたことを信じて取り組むことができました。

これまでの体育授業場面における児童・生徒の動機づけ研究は個人の持つ目標という視点から進められることが多かったのですが、演題にもある動機づけ雰囲気は、重要な他者（教師及びクラスメイト）がつくる環境の構造（西田・小縣,2008）と定義されており、周囲が持つ目標を児童・生徒がどのように認知しているのかという授業雰囲気を捉える新たな視点を提供することができる概念として注目されています。

本キーノートレクチャーでは、基礎的な概念定義や国内外の研究動向を解説し、さらに自身の研究成果に基づきながら体育授業実践に向けてどのように動機づけ雰囲気研究の知見を用いることができるのかなどについて以下の5つの観点に絞って発表を行いました。

まず「達成目標理論と動機づけ雰囲気」では、動機づけ雰囲気という概念のもとになる達成目標理論の説明から始まり、動機づけ雰囲気の構造や理論的な枠組みなどを解説し、そして体育授業研究において、なぜ動機づけ雰囲気に着目する必要があるのか、その意義について説明しました。

続いて「学校教育場面における動機づけ雰囲気研究」では、まず体育授業以外の学業場面における動機づけ雰囲気研究においてクラスの雰囲気認知が成績や学習行動と密接に関連していることについて解説しました。次に国外と国内の体育授業における動機づけ雰囲気研究を尺度開発、調査研究、実践研究ごとに紹介し、熟達雰囲気優位の国外研究と熟達雰囲気および一部成績雰囲気の優位を示唆する国内研究といった研究成果の相違に触れました。

次に「体育学習の課題と動機づけ雰囲気」では、子どもを取り巻く問題（体力低下や運動実施頻度の二極化、社会性や規範意識の鈍麻など）に触れながら、健やかな心身の育成や生きる力の獲得など様々な教育的効果を促す授業雰囲気の創造に対して動機づけ雰囲気研究がどのように関わることができるのかを説明しました。

そして、「体育学習における動機づけ雰囲気もたらす教育効果」では、体育授業における動機づけ雰囲気と児童・生徒に身につけさせたい様々な要因（例えば、好意的態度や道徳性、結果予期、生きる力など）との関連を検討した私自身の研究成果について紹介し、その成果に基づきながら、より良い体育授業を目指した授業づくりや授業設定の順序など学校現場への情報還元を意識した解説を行いました。

最後に、「今後の体育授業における動機づけ雰囲気研究に必要な視点」として、縦断データによる因果関係の検討や実践（介入）研究への挑戦など私自身が考える体育授業における動機づけ雰囲気研究の方向性を提示することに時間を割くことができました。

最後になりましたが、当日司会をいただいた内田若希先生、貴重なプレゼンテーションの機会をいただいた関係者各位、会場となった大阪体育大学の先生方とスタッフの皆様、そしてご清聴いただいたフロアの皆様に心から感謝申し上げます。



傍聴記

佐々木史之（環太平洋大学短期大学部）

『体育授業の心理学—動機づけ雰囲気に着目して—』

兵庫教育大学 中須賀巧先生

聴衆は200名ほど集まり、大盛況であった。はじめに、達成目標理論と動機づけ雰囲気についての話があった。練習や努力を重視し、自己の技能を高めることや、学習過程の努力それ自体を目標とする熟達目標と、能力を重視し、他者よりもよい成績をあげて自分の能力を示すことを目標とする成績目標に触れ、どちらを採択するのか目標志向性に影響されるとのことである。目標志向性とは、体育やスポーツのような場面での目標の持ち方には個人差があるという個人要因を示す疑念で、技術向上や能力を伸ばすために努力し、学習の過程を重視する課題志向性と、他者比較を通して高い評価を得ることを目指し、優劣や成績を重視する自我志向性がある。いずれも認知された授業環境の影響を受けて変化するので、環境要因が大事になってくるといふ。

そこであげられるのが動機づけ雰囲気である。動機づけ雰囲気とは、教師やクラスメイトが作る環境構造のことである。努力に価値が置かれ、練習や技能習得のプロセスが重要視される熟達雰囲気と、能力に価値が置かれ、他者比較を通しての達成が重視される成績雰囲気がある。どちらを重視するかも大切であるが、授業の進行状況によって変えることも重要であると述べられた。

動機づけ雰囲気に着目する意義としては、児童・生徒が教師やクラスメイトによってつくられる授業雰囲気をどのように認知しているかを検討できることや、集団への働きかけを可能にし、動機づけ研究に新たな方向性を提供できる等をあげられた。また、国内外の学校教育現場における動機づけ雰囲気研究についての紹介もあり、熟達雰囲気の授業を推奨することを示唆したモデルや、性差の違い、介入群の成果等を示された。そして、クラスの雰囲気認知は

児童・生徒の成績や行動など学習場面の要因と密接に関連していることを述べられた。

次に、指導要領改訂の背景にある体育学習の課題と動機づけ雰囲気について触れられた。子どもたちを取り巻く問題から、体育授業に求める学習内容として、運動技能向上としくみの理解、学習意欲の喚起、健やかな心身の育成、生きる力の獲得、生涯にわたって豊かなスポーツライフの実現をあげ、教育効果を促す授業雰囲気の構築が必要であるとのことである。そして、体育学習における動機づけ雰囲気がもたらす教育効果として、体育に対する好意的態度、日常的な運動実施の認知、道徳性、生徒の競争心、結果予期、生きる力について、成績雰囲気、熟達雰囲気との関係性を述べられた。また、熟達雰囲気を認知させるような授業展開が必要なことも指摘された。

最後に、今後の体育学習における動機づけ雰囲気研究に必要な視点として、種目や学年別への着目、縦断研究、実践研究への挑戦、多目標視点の採用等に言及された。

簡潔にまとめられたわかりやすいスライドで話が進められ、あっという間に時間が過ぎてしまった。用語の説明等が多く、理解するのが難しかったが、大変勉強になる内容で、自分自身の授業展開を反省させられる有意義なキーノートレクチャーとなった。

司会報告

土屋裕睦（大阪体育大学）

体育心理専門領域では、例年2題のキーノートレクチャーを開催することが恒例となっている。体育心理専門領域のキーノートは、これまで他の専門領域に所属する会員の参加も多く、体育心理学が、体育科教育や体育方法といった他領域の会員にも関心を持っていただいていることが分かる。特に体育・スポーツの実践現場で役立つヒントが、体育心理の研究には多く含まれているからであろう。

さて、本年の登壇者は大阪体育大学の岡澤祥訓（よしのり）先生である。先生は昭和49年に奈良教育大学をご卒業後、東京教育大学の修士課程を修了し、中京女子大学を経て、長く奈良教育大学に勤務された。新しく教育学部を開設するにあたって本学にお迎えし、これまでのご経験やお力をお借りしているところである。体育科教育に関する優れた研究業績の他、スポーツメンタルトレーニングの領域でも第一人者であり、プロスポーツ選手、オリンピックのメダリスト等、多数の指導歴がある。日本スポーツ心理学会理事、資格認定委員長も歴任され、この分野の開拓者のお一人である。

レクチャーの導入では、体育授業の現場研究から、示唆に富むお話を頂いた。「下手な子が一生懸命参加する授業は、上手な子にとっても楽しい授業」との信念のもと、ドカンバレーボール（パスをうまくあげられなくても触れたらOK）やセストボール（ドリブルを禁止したバスケットボール）など、さまざまな教材開発や工夫に関わられたご経験を披露していただいた。

先生が着目しているのは「運動有能感」。運動有能感を高めることができれば、児童生徒は内発的に動機づけられ、自ら積極的に取り組むことができるだろう。そのお考えの下、教師行動に関する一連の研究が紹介され、「できた瞬間にほめることができる授業」の大切さを説かれた。特に、体育授業の中で、教師の賞賛の回数が多いほど、児童生徒の運動有能感も向上することを示す研究データが紹介されていた。

そして真骨頂、スポーツメンタルトレーニング（SMT）の話題へ。SMTの目的を「自立した選手の育成」と定め、ここでも運動有能感の育成が鍵になることを、さまざまな事例を通して紹介いただいた。たとえば打率不振にあえぐプロ野球選手が岡澤先生のもとに来談した時のお話。「技術・体力は急にならへん、後はメンタルの問題や、思い切って振れ！」と伝えると、なんと結果はホームラン。

そんな単純な話があるものか、と訝しく思われる方もいるだろう。少し個人的な経験を付け加えておきたい。岡澤先生とお話をすると、なんだかやる気が湧くのである。有能感が増すととても良い。この経験は私だけでないようで、多くの仲間が同じ感想を持っている。おそらくこの岡澤マジックには、言葉だけでなく、それを醸し出す雰囲気、スタンスのようなものも関係しているように思う。

最後に、苦悩するオリンピックへの岡澤先生の珠玉の言葉。「あなたを助けることはできないけど、あなたの横にいることはできます。頑張ってください。あなたならできると思っています」。こういうスタンスが、岡澤先生が人を勇気づけ、自信（有能感）を育て、自立へ向かわせる力なのである。専門領域を超えて、多くの体育学に関わる会員が集い、エンパワメントされたキーノート・レクチャーであった。



演者報告「運動有能感を高める指導法：体育授業からメンタルサポートまで」

岡澤祥訓（大阪体育大学）

1. はじめに

3月末で29年間勤務した奈良教育大学を定年退職し、4月から大阪体育大学教育学部の特任教授として勤務しております。人生のまとめとしてキーノートのチャンスをいただき感謝しております。

アイゼンクのパーソナリティ研究から競技選手のメンタルサポート研究、教授技術研究から運動有能感研究と40年間、大学教員として研究活動を継続してまいりました。その中でも20数年行ってきた運動有能感を高める指導法に関して話させていただきます。

2. なぜ運動有能感なのか

体育授業では生涯体育・スポーツの実践者の育成我必要であり、競技スポーツでは、やらされるのではなく自ら進んでトレーニングや練習に参加できる選手の育成我必要です。すなわち運動に内発的に動機づけられた児童・生徒・選手を育成する事が必要です。

一般的に教師や監督は「やる気」を高めるために賞罰を中心にした外発的動機づけを用います。教師や監督が児童・生徒や選手の動機づけを高める方法は、外部からエネルギーを高めることになり、方法論的には全て外発的動機づけになります。

内発的動機づけで運動する児童生徒や選手を育成するためには、自ら進んで運動に参加できるように指導する必要があります。そのために体育授業では運動の楽しさ体験を重視しています。しかし、この楽しさを「いやな事をやらない、できないことはやらない」という楽な事であるとして指導する傾向があると思います。このような楽しさで運動の内発的動機づけが高まるとは考えられません。「できない技ができるようになる。記録が伸びる、それを支える、支えられる楽しさ」が内発的動機づけを高める楽しさであると思います。そのために、できな

い事にチャレンジする事が必要になると思います。デンは「人間は『有能さと自己決定』を感知したいという欲求に動機づけられて行動するものであり、それを内発的に動機づけられた行動である」と主張しています。しかし、我々が指導する児童生徒や選手は運動が上手な人ばかりではありません。運動が上手にできる自信がある人は内発的動機づけで運動に参加している可能性は高いと考えられるので、教師や監督は運動に自信が持てない人を内発的動機づけで参加できるように指導する事が特に重要になると思います。

運動に自信が持てない児童生徒や選手を内発的動機づけで運動に参加できるように指導する方法を検討するために、我々は運動の有能感の周辺も含めた運動有能感の構造に検討を加え運動有能感尺度を作成しました。この尺度は、運動が上手にできるという自信である「身体的有能さの認知」、今はできないが努力すればできるようになるという自信である「統制感」、指導者や仲間から受け入れられるという自信である「受容感」から構成されています。我々はこの運動有能感尺度を用いて、運動嫌いと運動有能感、運動の愛好度と運動有能感との関係に検討を加え「身体的有能さの認知」だけでなく、「統制感」、「受容感」とも有意な関係があることを明らかにしました。このことは、運動が苦手な児童生徒や選手の「受容感」や「統制感」を高めることによっても、運動に内発的動機づけで参加するようになる可能性があることを示していると考えられます。

3. 運動有能感を高める工夫

我々は、体育授業において運動に自信が持てない児童・生徒の、運動に対する自信としての運動有能感の三つの側面を高めるために、教材・教師行動・評価の三点から工夫を行い、その有効性に検討を加えてきました。

評価に関しては、相対評価から、個人の伸びを評価する個人内評価に変える事によって、努力すればできるようになるという「統制感」が高まります。この伸びた事を一緒に喜んでくれる仲間がいるという「受容感」を高めるために、いくつかの教材の工夫をしてきました。個人スポーツの記録の伸びをグループ間で競争するという「個人スポーツの集団ゲーム化」の工夫や、球技では運動が苦手な児童生徒も参加してみようと思えるように、「どかんバレーボール」や「三球制ソフト」のようなルールを変更する方法が有効である事を実証してきました。

教師行動の工夫としては、「誉める」は運動有能感を高める事になり、内発的動機づけを高めるが、「怒る」は外発的動機づけを高めるだけであり、前者の「誉める」教師行動が有効であるも実証しました。

競技スポーツのメンタルサポートにおいては、運動有能感を高める事は「プラス思考」でプレーできる可能性が高いのですが、叱ってやらせると運動有能感が低下して「マイナス思考」でプレーするようになる可能性が高くなります。それゆえ、我々は競技選手の運動有能感を高めるサポートを心がけています。

「体育心理学キーノートレクチャー傍聴記 一勇気づけの天才」

伊藤友記（九州共立大学スポーツ学部）

日本体育学会第67回大会（於：大阪体育大学）の体育心理学キーノートレクチャーで、岡澤先生のお話をお聴きした。演題は「運動有能感を育む指導法—体育授業からメンタルサポートまで—」。

先生のお話はこれまでも何度かお聴きする機会があった。その多くが先生の現場での実践に関わるお話であったが、今回のお話はそれらの実践が借り物の理論や単なる経験論によるものではなく、綿密なご自身の研究データを基にしたものでもあることを、改めて実感させられる内容であった。それらの要約内容をお伝えするのが寄稿する私の役割であるのかもしれないが、紙面に限りもあるので読者の方々にはネットで「岡澤祥訓_有能感」などの単語で検索をかけていただき、先生の数々の論文をご参照いただきたいと思う。

ここでは私なりに、レクチャーのサブタイトルにあった「メンタルサポート」における先生の印象を述べてみたい。先生の選手との関わり方は、何だかカウンセラーともメンタルトレーナーとも違う、そんな印象を勝手ながら抱いている。他人行儀でも押しつけがましくもなく、とにかくとことん付き合う、そんな感じ。選手が自ら答えを見つけ出すまで黙って頷いているだけでなく、かといってガンガンアドバイスするわけでもない。でも迫力をもって選手に問いかける、「あなたはどうしたいん？どうなりなりたいん？」。そこで選手が考え抜いて出した答えには、「うん、それでええやん！」と背中を押す感じ・・・、とでも言おうか。もちろん、決して誘導尋問ではない。ある種の迫力を持った先生からの問いかけが、選手の決意ともとれる迫力ある回答となって表れる。

選手はなりたい自分を具体的に思い描き、そのために取り組むべき目の前の、足元の現実目標を立てる。それを繰り返し、現実の目標を達成する度に夢が自分の手元に近付いてきて、自身の有能感を高め

ていく、その手助けをしてくれる存在。「完璧を目指すな、だいたい出来たら大丈夫」と選手に語ることもあると言う。けれどもそれは、無責任に突き放して言う言葉ではない。先生は「だいたいの加減をつかむまで横にいます」とおっしゃった。そして「やれることやってきたらええやん」、そんな言葉で送り出すことも。

カウンセラーでもメンタルトレーナーでもない、選手にとっては唯一無二、「岡澤先生」なのだろうと思う。学会の帰り道、中込先生がおっしゃられた。「岡澤君（が）いると、現場は安心するんだよな」。話を聞いてもらうだけで、傍にいてだけで、あるいはそこにいなくても、「岡澤」という人間に関わってもらっただけで、現場の選手や指導者は「安心」を手に入れることができる。その秘訣はなんだろう・・・。私自身、岡澤先生とお話させていただく度に感じる安心感、それはどこから来るのだろう。時折、何だか自分に自信がなくなって、落ち込み気味になって、元気がなくなったときに、ふと会いたくなる。自分の弱さ、だらしなさも全部ぶちまけても見捨てずに受け止めてくれる、「それでもええやん。そこから頑張ればええやん」と言ってくれそうな先生。そう、岡澤先生は「勇気づけの天才」なのだ。

最後に、この日いただいた先生の名刺の裏書きには「さすらいのメンタルトレーナー」とあった。長年勤続された奈良教育大学をご退職された先生の何とも洒落のきいた名刺ではないか。これからもずっと、さすらいながら日本の体育・スポーツ（心理学）界に勇気を与え続けていただきたいと切に願う。

司会報告

北村勝朗（東北大学）

平成28年8月に大阪体育大学を会場として開催された日本体育学会第67回大会の体育心理学専門領域企画シンポジウムは、「感情から紐解く体育・スポーツ科学のこれから」のテーマで行われた。体育・スポーツ・健康にかかわる現象と密接な関係をもつ「感情」をキーワードとし、今後の研究の可能性を視野に入れた話題提供がなされた。大阪体育大学の手塚洋介先生をコーディネーターとし、感情科学に関連する研究を進めておられる3名の研究者から感情を基軸としたご報告をいただき、議論を展開する形で進められた。

まず、感情科学研究領域の第一人者である、同志社大学の鈴木直人先生から、感情の心理・生理・行動の各側面に渡る知見について、様々な研究成果に基づいて説明がなされた。従来、感情経験は理性や認知と対立する、ヒトの心における厄介者、あるいは法則性に従わず、それを攪乱するものであり、科学の対象となりえない存在であった。しかし、最近では、感情と理性あるいは認知は対立するものではなく、協調的に結びつき、様々な場面で人を合理的な行動に導き得る存在であると捉えられるようになってきている。ポジティブな感情の機能としては、思考の可塑性、創造性、柔軟性を高める、対人関係の促進、ネガティブ感情による生理的活性化を早く元に戻す、気分をスイッチするといった点が説明された。逆に、ネガティブ感情の機能については、物事の判断を慎重でシステムティックに行うことで、環境の影響を受けにくく正確な判断を可能にすることや、忍耐力を増加させること、動機づけを高め努力を促すことといった点について、数々の実験結果を基に説明が行われた。更に、パーソナリティとの関連性についても触れられた。

次に、広島大学の関矢寛史先生から、感情と認知と身体運動の関係について、最近の研究成果を踏まえながらご報告いただいた。プレッシャーによる身

体運動の変化や、あがりやを認知面から説明する様々な実験結果に基づき、感情が身体に及ぼす影響、あるいは感情が認知に与える影響とそのメカニズムについて説明がなされた。更に、進化心理学の知見に基づいた研究や教育の方向性についてもご提言いただき、認知が感情に及ぼす影響、あるいは身体が感情に与える影響、認知と身体それぞれの影響等についてご報告いただいた。認知と感情と身体の相互作用を活かした実践とそのための研究という今後の研究の方向性についてもご提言いただいた。

最後に、日本体育大学の高井秀明先生から、感情制御に関する実験的検証と実践的検討についてご報告いただいた。まず感情抑制の3つの方略である、抑制、ディストラクション、および認知的再評価についてご説明いただいた後、リラクゼーションの方略である、呼吸法、自律訓練法、漸進的弛緩法、およびバイオフィードバック法について、実験結果を基にその効果について説明がなされた。その上で、アスリートの感情制御に利用されているリラクゼーションの方略がもたらす心理・生理的効果は実験的に検証されているものの、そうした方略だけではなく、状況や出来事、対人関係などの自らの解釈を変化させる再評価が重要とされている点が説明された。更に、ご自身がアスリートに対して実践されたメンタルトレーニングの事例についても取り上げ、詳細にご報告いただき、実際のスポーツ現場において有用な研究の在り方についてご提言いただいた。特に、今後の感情研究の必要性の中で、研究のための研究から脱却し、現場で活かされる研究の重要性についてご提言いただいた。

朝9時からという時間枠ではあったが、180名を超える方々にご参加いただき、実り多い2時間を過ごすことができた。この場をお借りして感謝申し上げます。

コーディネーター報告「感情から紐解く体育・スポーツ科学のこれから」

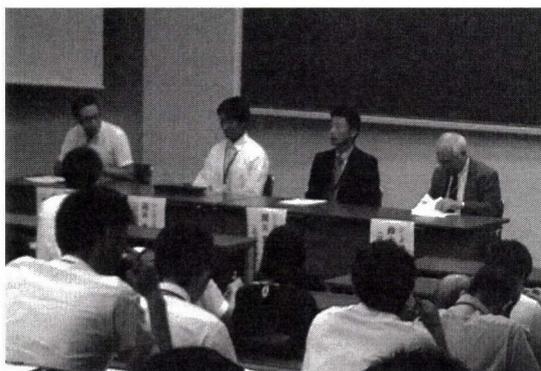
手塚洋介（大阪体育大学）

本シンポジウムは、大会テーマの「スポーツと“ひと・社会”」を再考する機会として、感情に焦点を当てた。感情(emotion)は、外へ(e-)の運動(motion)という語源が示すように、ひとの身体運動に密に関連する要因である。アスリートのパフォーマンスに注目すると、たとえば“あがり”などの感情的要因によってパフォーマンス不全が生じることもあれば、別の感情によって逆の現象も起こりうる。また、そうしたアスリートの感情的側面は、見る側がスポーツに興じるための重要な誘引ともなり、社会的にも機能する。こうして、スポーツにまつわるひとと社会とを考える際に、感情を踏まえた考察は不可欠といえよう。

企画段階では、本邦における感情科学の第一人者である鈴木直人先生（題目「感情の機能—心理・生理・行動的側面からの多角的検討—」）に、感情の心理・生理・行動の各側面に関する諸特徴ならびに体育・スポーツ科学への提言をご講演いただき、今後の発展の足がかりにしたいと考えた。加えて、関矢寛史先生（題目「感情と認知と身体運動の関係」）と高井秀明先生（題目「アスリートの感情制御に関する実験的検証と実践的検討」）には、両名がこれまでに組み込まれてきた基礎および実践に関する諸研究を、感情を軸にご講演いただきつつ、体育・スポーツ科学領域における感情研究の可能性を議論していただくこととした。当日のご講演の詳細は各先生のご報告をご参照いただきたいが、いずれの先生も精緻なデータをもとにご講演くださり、題目にあるよう体育・スポーツ科学（本企画の波及性を鑑みあえて体育心理学とはしなかった）における感情研究の有用性・必要性を、参加者にもご理解いただけたのではないかと感じている。

一点、鈴木先生が全体討論でコメントされた感情と情動とを区分する必要性、言い換えれば感情という用語の多義性をどう扱うべきかについて、体育・

スポーツ科学の立場についての私見を述べたい。感情研究が多様化し学際化も進む中、感情を一義的に扱うことの難しさに多くの研究者が直面している。『感情心理学研究』の創刊号にて松山（1993、感情心理学研究、1、1-2.）が論じたよう、本邦では感情と情動、もつといえは情緒や気分などをも含めて感情と表現することがあり、感情に関する現象を研究上明確にしないことも多い。しかし、感情研究の厳密な定義によれば、上記の諸現象は強度や時間窓などが異なる。あがりを例にみれば、試合直前または最中に生じるあがりが一過性の情動と定義できるのに対し、あがりやすさの一指標とされる特性不安は気分（あるいはより安定的なパーソナリティ特性）に区分できるよう。両者は、関連性はあるものの異なる現象であり、こうした差異の理解があがりの全体像を理解するには重要となろう。加えて、あがりに関する心理サポート時など、選手が抱える問題の本質をとらえる際にも強く関わるはずである。最近是国内外問わず、感情や情動などの用語の区分を再考する動きがあるが、体育・スポーツ科学においては少なくとも、研究者が実践の視座を備えつつ、どのような特徴をもった感情現象に焦点を当てているかを理解することが求められる。基礎研究を踏まえつつ、当該領域での問題の理解や解決に向けて、本シンポジウムがひとつの契機になれば幸いである。



演者報告「感情の機能 ―心理・生理・行動的側面からの多角的検討―」

鈴木直人（同志社大学心理学部）

我々は日常、色々な出来事に対して喜んだり、悲しんだりしながら生活している。しかしながら、最も人間らしい部分である感情という現象はまだよく分かっていない。

プラトンの昔から人間は、理性と情熱という二頭立ての馬車に喩えられ、感情は、理性や認知と対立し、理性を攪乱する厄介者、科学の対象となりえないものとされてきた。しかし、現代では、感情は理性や認知と協調的に結びつき、人々の適応を支えるもの (ex. Bruner, 1986) と考えられるようになった。

感情が強くなれば行動も激しくなるが、行動の適切性に関しては、Yerkes-Dodson の法則に従う。感情は特にこの適切な範囲が狭いと思われる。感情と生理学的反応の関係も研究されるようになった。例えばスポーツ競技で問題となる“上がり”について、スピーチ場面を用いた結果では、スピーチ場면을繰り返すことで主観的な上り感や心拍数は減少するのに対し、血圧はあまり変化しないことが見だされている (敦賀・鈴木, 2007)。この結果は、上がり場面を何度経験しても、心臓血管系の血管型反応は解消されない危険性があることを示すものかもしれない。

こうした“厄介者”の感情の生起が、生存や繁殖に係る機能や人間関係を円滑にする社会的な機能を持つことは古くから指摘されているが、最近、感情が行動に対し様々な影響を及ぼすことが明らかになってきた。

これまでポジティブ感情がなぜ存在するのかに関して、うまく説明できる説は存在しなかった。2000年以降、ポジティブ心理学の隆盛とともにポジティブ感情の機能に焦点を当てた研究が行われてきた。その結果、ポジティブ感情は物事の捉え方を柔軟し、創造性などを高めると考えられるようになってきた。即ち、ポジティブな感情は眼前の問題解決に

役立つというよりは、将来役に立つような情報を集めやすくするという機能を持つ。また、ポジティブ感情はネガティブ感情の生起などによって高まった生理的反応を素早く元に戻す元通り効果 (undoing effect) を持つ。試合中、笑顔でプレイするとリラックスしたプレイができるという facial feedback 仮説などもこの効果によるものかもしれない。著者はこれらの機能にもう一つ、気分を変えるスイッチングの効果があると考えている。

一方、怒りの感情は攻撃行動の発現にとって必要な感情であるというように、個々のネガティブ感情の役割は進化論的な解釈がある程度可能である。こうした意味からネガティブ感情は、目前の問題解決に必要な情報を集め、それに対処するよう準備させる機能を持つと考えられる。また、特に悲しみのようなネガティブ感情は物事に対する処理を慎重かつシステムティックに行わせることで環境の影響を受けにくく、正確な判断を可能にし、記憶をよくし、また動機づけを高め、努力を促すといった役割があることが報告されている。

最後にダーツ競技のパフォーマンスを高めるために行ったイメージ筆記の効果について報告する。実験参加者を認知的方略によって防衛的悲観主義者と方略的楽観主義者に分け、ダーツ練習時に抱いた感情をイメージ筆記させたところ、防衛的悲観主義者の成績のみ向上し、方略的楽観主義ではいかなる筆記も効果が見られなかった。この結果は、試合前、練習時のトレーニングでパーソナリティによる違いを考慮する必要性を示唆するものである。

演者報告「感情と認知と身体運動の関係」

関矢寛史（広島大学）

この度は本シンポジウムのコーディネータである大阪体育大学の手塚洋介先生よりご提案いただき、感情研究のエキスパートである同志社大学の鈴木直人先生とトップアスリートへの心理サポートの経験が豊富な日本体育大学の高井秀明先生とともに演者を務めさせていただくことができました。また、東北大学の北村勝朗先生には司会者としてシンポジウムをスムーズに進行していただき、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

心理学は人間の心を扱う学問ですが、心と身体の関係は古くから重要なテーマとして扱われてきました。西洋では、デカルトの心身二元論のように心と身体を分けた上で、それらの相互作用を考えてきました。一方、東洋では、心身一如と言われるように心と身体を分けられないものとして考えてきました。いずれにしろ心を扱う心理学において、身体を完全に切り離して考えるはいけないうことになりません。生理心理学においては主に生理反応を測定して心身相関が研究されてきました。身体には生理反応に加えて身体運動があります。体育心理学やスポーツ心理学は、運動制御・学習研究を含み、身体運動と心と身体との関係を研究しやすい領域ですが、これまでどちらかといえば認知と身体運動の関係が多く研究されてきたと思われます。心のもう1つの側面である感情と身体運動については、研究しなければならないことが山積みであると感じます。

そこで本発表では、心を感情と認知に分け、身体運動と生理反応は身体として一括りにして、感情と認知と身体運動が互いにどのように影響し合っているのかについて、先行研究を紹介しました。まず感情が身体に及ぼす影響として、プレッシャーが身体運動と生理状態に及ぼす影響を調べた実験研究や質的研究を紹介しました。これらの研究では、プレッシャー下では主動筋と拮抗筋の共収縮が起こることや、運動の振幅や速度が低下することが明らか

になっています。次に感情が認知に及ぼす影響として、脅威刺激への注意バイアスについて視覚刺激や聴覚刺激を使った実験を紹介しました。また、プレッシャー下で起こる注意の処理資源不足や過剰な意識的処理を紹介しました。さらに、人間は利益より損失に注意が向くという損失回避性を示した意思決定のプロスペクト理論を運動課題で検証した実験を紹介しました。そして、感情が身体と認知に及ぼすこれらの影響を進化心理学的視点から解説しました。

次に認知が感情に及ぼす影響として、不安は運動パフォーマンスにとって有益であると解釈した場合にパフォーマンスが向上するという研究を紹介し、進化心理学の知見に基づくマインドセットによってプレッシャーを味方にするができることと述べました。また、身体から感情への影響として、表情や姿勢の変化が感情の変化を導くことを示した身体心理学の研究やパワーポージングの研究を紹介しました。そして、高齢者ステレオタイプを認知すると動きが遅くなるフロリダ効果（観念運動効果）のように認知の変化が身体運動を変える現象を紹介しました。さらに、遅い動きが高齢者ステレオタイプを活性化させる逆フロリダ効果や、論説を首を縦に振りながら聴くと横に振りながら聴くときより賛成し易かったという実験結果のように動きの変化が認知を変えるという現象も紹介しました。

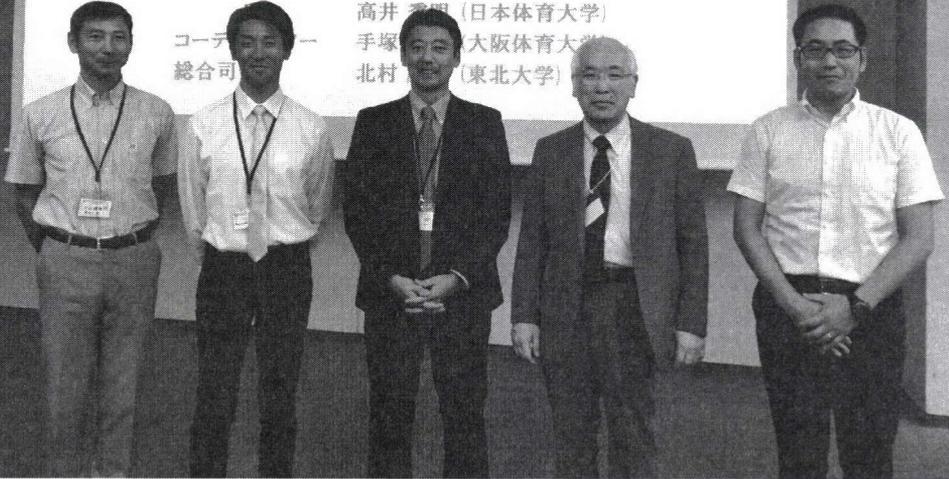
最後に、これら認知と感情と身体との相互作用のさらなる研究の必要性と、身体から入る心のコントロールの重要性や進化心理学の知見に基づくマインドセット教育の必要性を提言して発表を終えました。コーディネーター、司会、シンポジストの先生方、ならびに会場にお越しくくださった皆様、ありがとうございました。

日本体育学会第67回大会 大阪体育大学
The 67th Conference of Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences

スポーツと“ひと・社会”―融合と進歩の先へ―

体育心理学専門領域企画シンポジウム
感情から紐解く体育・スポーツ科学のこれから

シンポジスト 鈴木 直人 (同志社大学)
関矢 寛史 (広島大学)
高井 秀明 (日本体育大学)
コーディネーター 手塚 伸一 (大阪体育大学)
総合司会 北村 隆 (東北大学)



演者報告「アスリートの感情制御に関する実験的検証と実践的検討」

高井秀明（日本体育大学）

本シンポジウムでは、アスリートに対する感情制御方略の応用を目的とした実験的検証と実践的検討に関する事例について紹介し、話題提供することとした。

状況や場面、環境が時々刻々と変化する競技スポーツにおいて、アスリートには常に自分自身を律することが求められる。その方法としては、自分の思考や行動を監視し、それらを好ましい方向に導く活動である自己統制（self control）がある。その中には、自分の感情を対象とした感情制御（emotion regulation）があり、その代表的な方略として「抑制」「ディストラクション」「認知的再評価（以下、再評価）」があげられる。

ここでいうところの「抑制」とは、感情が生じてそれを意識した後で、それを表出しないよう制御する行為である。また、「ディストラクション」とは、感情から無関係な物事に注意をそらす行為である。そして、「再評価」とは、不快感情をもたらしたネガティブな事象について思考して新たな意味を見出し、よりポジティブな解釈を加えようとする行為である。

今回は、感情制御方略である「抑制」のリラクゼーションの技法を対象とし、その中の呼吸法、自律訓練法、漸進的弛緩法、バイオフィードバック法に話題提供者がアレンジを加えてアスリートに提供したスポーツメンタルトレーニングの活用事例について報告した。

呼吸法では「試合中、心臓がバクバクして、それが気になってシューティングに集中できません」と訴えた、アーチェリーの女子選手を対象とし、吸気時には心電図 R-R 間隔が短縮し、呼気時には心電図 R-R 間隔が延長するという呼吸性洞性不整脈の説明を加え、呼吸法の習得を試みた。

自律訓練法では「良いレースのイメージを描こうとするのですが、イメージに入り込むことができ

ず、プツプツとイメージがきれいです」と訴えた、スケートの男子選手を対象とし、自律訓練法の標準練習の習得を試みた。それにより得られる変性意識状態は、視覚的イメージの誘発に導きやすいといわれている。この状態を活用し、良いレースのイメージの高度化を図った。

漸進的弛緩法では「試合の開始直後は、脚のフワフワがとまりません」と訴えた、サッカーの男子選手を対象とし、ウォーミングアップの前とクールダウンの後には、筋運動感知情報の主観的評価と客観的評価をすり合わせる目的で漸進的弛緩法を実践した。さらには、状況に適した筋緊張に誘導するため、ランダムに筋緊張の強度を変えて漸進的弛緩法を実施した。

バイオフィードバック法では「大切な試合になると、自分のプレイにまったく集中できません」と訴えた、アーチェリーの男子選手を対象とし、心拍の即時聴覚バイオフィードバック機器を練習と試合の両場面で利用して心拍が変動する刺激を同定した。これにより、感情の捉え方や意思決定などに影響を及ぼす内受容感覚の調整を試みた。

本シンポジウムでは、感情制御方略である「抑制」のリラクゼーションの技法をとりあげたが、「抑制」は強すぎても弱すぎても適切な感情のコンピテンスに繋がらず、様々な問題を引き起こす可能性もある。したがって、状況や刺激、自らの心理状態に対する解釈を変化させ、感情の強度や種類を変化させる「再評価」（Gross, 1998）を活用したうえで、個々に応じてアレンジするリラクゼーションの技法を実践する必要があるだろう。

傍聴記

門利知美（川崎医療福祉大学）

日本体育学会第67回大会（大阪体育大学）の第二日目に行われたシンポジウム「感情から紐解く体育・スポーツ科学のこれから」を拝聴致しました。

初めに同志社大学の鈴木直人先生より、「感情の機能—心理・生理・行動的側面からの多角的検討—」と題し“感情”とは一体何なのかということについてご発表がありました。感情の機能には生物学的、社会的、ポジティブ感情、ネガティブ感情機能があることを話されました。ポジティブ感情には気分をスイッチする機能があり、これは「ある状態を切ること」であり、大笑いやあくびなどをするにより次の状態に移ることができるものであることを述べられました。ネガティブ感情については、動機づけを向上させたり忍耐力を増加させる機能があるというお話から、「ネガティブに考えることのすべてが悪いものではない」ということを再認識することができました。

続いて、広島大学の関矢寛史先生より、「感情と認知と身体運動の関係」と題し“感情”、“認知”、“身体”それぞれの相互作用についてのご発表がありました。プレッシャーを受けることにより、人の身体運動はどのように変化するのか。興味深い先行研究をたくさん紹介して頂きました。プレッシャーは、運動中の動きだけではなく運動前の動きも制御してしまうこと、そして、身体的疲労を引き起こしたり、自分の都合の悪い方へ考え方を変化させてしまうという報告から、人の心の不思議さを改めて感じました。また、プレッシャーがかかるような場面において、「今、自分は不安を感じている」ではなく、「今、自分は興奮している」と考えるとパフォーマンスを発揮しやすいという報告を知り、自分自身不安を感じたり、緊張する場面は多々ありますので、そのような場面で「興奮している」という考え方を実践してみたいと思います。

最後に、日本体育大学の高井秀明先生より、「ア

スリートの感情抑制に関する実践的検証と実践的検討」と題しリラクゼーション技法を用いた先行研究や実際に指導された事例を中心としたご発表がありました。今回、お話の焦点を当てられた中の呼吸法、自律訓練法は、自身もメンタルサポートや大学の講義の中で実際によく実施します。どちらにおいてもなかなかコツや感覚を掴めてもらえないのが現状であり、リラクゼーションするために非常に効果があるにもかかわらず、それを相手にうまく伝えることができないことをもどかしく感じていました。しかし、呼吸法においては「バーチャルリアリティ環境」として、プロジェクター等を用いて試合会場に限りなく近い状態（視覚や聴覚など）を再現し、その環境下で呼吸法を行うこと、そして自律訓練法においては、まず腕立て伏せなどをするにより“重感”や“温感”の感覚を体験しておくというお話を聞き、このような方法であると非常に感覚を掴みやすいため、参考にさせて頂きたいと思います。

最後になりましたが、自身の今後の研究活動、スポーツメンタルトレーニング指導士としてのサポート活動、教育活動を行うため、そして、自分自身が成長していくための貴重なヒントを与えてくださった鈴木先生、関矢先生、高井先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

座長報告

木島章文（山梨大学）

26日第1セッションでは経験を積んだ研究者と新進気鋭の研究者が交代で登壇し、各々が濃厚な進捗状況を報告した。

田中美吏氏は長きにわたり知覚運動系に対する心理プレッシャー（圧）の効果を検討している。今回の発表では姿勢制御系に対する効果に限定して論じた。片足立位姿勢の動揺に応じて報酬を減額させ、大学生参加者の姿勢制御系に心理圧を与えた。すると重心動揺の振幅が減少し、足関節を回転させる筋の共収縮が頻繁に確認された。情動変動が姿勢制御にあたえる神経作用に関して仮説が示され、当該テーマに関する発表者の分厚い取り組みが感じられた。実験において参加者が達成すべき課題の目的とは何か、そこで立ち上がる機能が運動・スポーツ事象に有する意味は何かといった質問がフロアからなされた。

大野真澄氏は場所の頭部と眼球それぞれの回転が場所の記憶に与える効果を検討した。参加者正面から15度の範囲内で指示した場所に頭部あるいは眼球を定位させ、その位置を頭部、眼球あるいは双方の回転量で再生させた。基本的には頭部定位を介して記憶させた場合は頭部回転による再生誤差が小さく、眼球定位で記憶させた場合には眼球回転の再生誤差が小さいという結果が得られた。ただし眼球定位で記憶した位置に関しては頭部回転による再生誤差も比較的小さく、眼球回転と頭部回転との情報交換に非対称な交互作用がある可能性が示された。

佐藤佑介氏はご自身の体操経験に基づき、全身動作における眼球定位の機能について研究を続けている。今回の実験では体操経験者と未経験者を参加者とし、立位姿勢から垂直軸周りに身体を捻って跳躍させ、着地までに全身を360度回転させる試技を行わせた。経験者は着地0.1秒前に視線を前方へと定位した。この結果は絶対座標系における自身の位置と自己中心座標系における自身の姿勢とのすりあわ

せが安定した着地姿勢をもたらすことを示しているという。跳びだし動作の制御にも視線が寄与する可能性がフロアより指摘され、実際に経験者においては、跳びだし前に前方へと視線を定位する傾向が顕著であったことが佐藤氏より報告された。

松竹貴大氏はサッカーの3x1あるいは4x2状況における状況判断過程を脳波と足関節回転に伴う筋電図で検討した。全国水準の技能を有するExp群とそれに準ずるSub-Exp群にサッカーのビデオ映像を呈示し、ボールを保持している一者がどこにパスを出すべきかをペダル踏み動作で解答させた。群間で正答率を比較したところ、Exp群の成績はSub-Exp群より高かった。一方で事象関連電位（P300）の立ち上がりで認知判断の早さを比較したところ、正答試技に限定した場合、Exp群の立ち上がりが有意に早かった。ペダル踏みに伴うひふく筋のEMG立ち上がり時刻を群間で比較してもExp群が有意に早かった。ひふく筋のEMGとP300との時間配置から身体反応が認知判断に先行している可能性が示された。フロアからは認知判断に関する群間の能力差について異なる解釈が可能ではないかの疑義が示された。

全ての演題が、限定された筋あるいは四肢のみを動員した系ではなく、体幹を含む全身動作の制御系を扱っていた。高度に開発された器材を用いることで全身動作を詳細に記録することが可能となり、一見、研究で得られた知見がスポーツ事象に接近しているようにも思えた。しかし制御系の複雑さゆえに、多次元の交互作用を含む結果の解釈には慎重を期すべきなのかもしれない。自戒を込め、課題の制約条件や独立変数の設定を一層入念に検討すべきと考えている。

座長報告

森 司朗（鹿屋体育大学）

本セッションでは、四件の発表が行われ、発表毎に質疑応答を含んだ討議が行われた。

第一の発表は、「時間制約下での意思決定 期待利得の変化が意思決定方略に与える影響の検討」という演題で、東京大学総合文化研究科の女川先生によって行われた。発表の内容は、時間経過によって期待利得が変化する状況での意思決定を検討するものであり、スポーツ場面への適応という視点につながるものであった。本研究では期待利得が獲得可能な利得と成功確立によって推定されたベイズ意思決定理論に基づく意思決定モデルに着目し、期待利得が最大となると意思決定方略が最適となると考えられていたが、スポーツ場面では時間制約を受けているため、スポーツにおける意思決定への適応の可能性を考える上にはこの点を考慮する必要があると述べられていた。結果としても、期待利得の時間的変化が意思決定方略に影響を与える可能性が示唆されたことが報告され、現場への応用の可能性が期待された。

第二の発表は、「テニスにおける打球落下位置の分散推定 過小バイアスおよび等方性バイアスの検討」という演題で、東京大学大学院の山本先生によって行われた。発表は、アマチュアテニスプレーヤーを対象に、テニスの打球調節課題をおこない、打球分散の推定の認知バイアスと熟達差を検討するものであった。これまでは、熟達者ほど打球の分散は小さく、種目歴の長い者ほど、打球の分散を適切に推定できる認知的能力を持っていると考えられていたが、認知バイアスも生じている可能性が実験で確認された。その結果、テニス経験の長い熟練者でも事前分布では等方性傾向に推定することが示唆され、熟練者でも認知的バイアスが生じている可能性があることを述べられた。フロアーからの意見を踏まえたとき、実際のテニスの実践の中でも検証されることが期待される。

第三の発表は、「テニス熟練者の打球方向予測における大域的な知覚方略の利用 スローモーション再生呈示による動作認識の検討」という演題で、首都大学東京の福原先生によって行われた。本発表では、熟練者は知覚方略時に注意を向ける運動情報に関して、昨今の局所的な部分の研究ではなく、スローモーション呈示を用いて全身運動を俯瞰的に捉える大域的な部分に着目して研究を進めていた。その結果、熟練者は予測判断に関しては影響を示さなかったが、体幹の動作を的確に見極めることが熟練者の大域的な知覚方略にとって重要であるということが報告された。今回の研究は、内容の新規性と同時にスローモーション再生呈示を用いて知覚方略の特徴を明確にしようとする点で興味もたれる研究であった。

第四目の発表は「打球動作の微細な変化に対する無意識的判断」という演題で近畿大学の田中先生によって行われた。発表の内容としては、熟練者ほど意識に上がらない微細な動作の判別能力が長けているのではないかとという観点から野球における投手の投球動作に関して、投球腕の位置が標準刺激の位置との高低の比較と回答への確信度を調べていた。その結果では、熟練者は判別能力も確信度も高いことが示され、意識に上がらないような微細な動作に関しても判別できていると報告されていた。この研究は、熟練者は意識に上がらないところも判別できているという点で熟練の発達過程を理解する上で重要な指標とみることもできるかと考えられ、今後の展開に期待したい。

座長報告

洪倉崇行（桐蔭横浜大学）

夏の青空と緑のコントラストが印象的な朝の大阪体育大学でした。大会3日目の午前に口頭発表3が行われ、4演題の座長を務めさせていただきました。

最初の演題は、島本好平先生（兵庫教育大学大学院）による「大学生トップアスリートのキャリアステータスとライフスキルとの関連：大学卒業後4年間にわたる縦断調査からの検討」でした。ライフスキルを活用したキャリア形成プログラムの開発を視野に入れ、調査が行われました。優秀競技者の大学卒業後4年間を追跡したところ、高いレベルの競技経験や競技を通じて獲得したライフスキルがキャリア形成に貢献する可能性が示されました。このことから、スムーズなキャリア移行を促すうえで、ライフスキル獲得に向けた支援が必要であることが述べられました。

2つ目の演題は、壺阪圭祐先生（明石市立明石商業高校）による「ライフスキル獲得を促すコーチングスキルパターンによる指導者の類型化」でした。この研究では、壺阪ら（2012）によって見出されたライフスキルの獲得を促す4種のコーチングスキルの観点から、コーチングスキル獲得の類型化が行われました。指導者に備わることが求められる競技横断的な知識・技能として、選手のライフスキル獲得を促すコーチングスキルは注目に値します。このようなコーチングスキルの獲得過程を理解することは、グッドコーチの育成を大きく促進させると思いました。

3つ目の演題は、松山林太郎先生（スポーツライター）による「競技者のライバル観と達成動機との関係」でした。競技者が持つライバル観の因子構造を検討したところ、先行研究にみられたような相手を肯定的に捉えるライバル観だけでなく、「反道徳性」といった相手を否定的に捉えるライバル観が見出されたということが報告されました。興味深

かったのは、競技者の達成動機によって彼らが有するライバル観が異なるということでした。指導に活かせる研究を志向する個人的な関心からは、ライバル観が競技者の心理的変数（たとえば、動機づけなど）に及ぼす影響が検討されることを期待したいと感じました。

最後の演題は、池田理紗先生（山梨大学大学院）による「リーダーの参加が児童の共同行為に与える効果」でした。この研究では、リーダー性とフォロー性の強さによる児童の組み合わせで3人組を作り、その人数配分が共同行為における向社会性にどのような影響を与えるのかということが検討されました。斬新なのはその研究方法でした。3名によって把持された円盤のうえにボールを置き、それを上下させるときに移動したボールの軌跡によってリーダーの影響を捉えようとするものでした。小集団におけるリーダーの影響力をこのような実験的方法を用いて検討できることは驚きでした。同時に多様なアプローチによる研究の重要性も感じました。

このセッションでは現場実践者や大学院生による発表がありました。高校運動部指導者でもある壺阪先生は「日頃の現場指導で疑問に感じていたことを研究・発表して、現場で悩み葛藤を繰り返す指導者の一助になれば」、また、大学院生の池田先生は「本研究を今後発展させていくために、様々な方の知見をお借りしたい」とそれぞれ話してくれました。口頭発表は多くの聴衆を前にして、自分の研究内容を伝えられるというのが特徴です。現場実践に役立てられる知見や自身の研究に対するフィードバックを広く求めるうえで、今回の発表はとても有意義に働いたのではないのでしょうか。

最後に積極的に議論にご参加頂いたフロアの皆様に感謝を申し上げます。

座長報告

中山雅雄（筑波大学）

いずれの発表も研究への意欲を刺激する内容であり、フロアからも積極的な発言があり大変有意義な研究発表であったと思います。

升本先生（兵庫教育大学）の発表は2人がジョイント・アクションを行う時に第三者から妨害を受けると、2人は相補関係を作るかどうか検討したものでした。結果として「妨害の有無に関わらず、2人の力発揮は負の相関関係を示し相補的に力発揮した」、「妨害がない時はより力の絶対誤差と標準偏差が大きかったが、妨害が有るときは負の相関関係が強かった」ことを発表されました。フロアから「2人の関わり方について」質問がなされ、「一方的な制御がなされている」「片方がさぼっている」可能性があるとの応答がなされました。

平川先生（南山大学）発表はデータ全体の時系列に着目して、速度変化に応じた四肢間の協調関係の変化を追うものでした。短い時系列データの安定性を見るために、データ全体の時系列解析法として相互再帰定量化解析を使用したこと、2変数の相対的な関係、周期のずれに着目したことが説明されました。結果として「熟練者の低速では2つの時系列にずれが生じ、熟練者の高速では、2つの時系列が一致した」「実測の安定性の値からモデル化し、実際の競歩との関係性を比較すると世界基準のデータとモデルに相違があり、初級者はモデルにフィットしない」「熟練者と未熟練者のそれぞれのシステムの安定性が異なる」との発表がなされました。フロアからはモデルの安定性や、変数についての質問や提案がなされました。また、初心者と熟練者の違いに関する質問に対して、「初級者は速度が増加すると対応できない」といった応答がなされました。

横山先生（名古屋大学）の発表はサッカーの3対1ボール保持課題で、自己駆動粒子モデルを参考に、個々のプレイヤーを駆動する「見えない力」を運動方程式で記述した数理モデルを立て、4名のプレイ

ヤーとボールの動きをシミュレーションした研究です。3つの力を入れると、実測と類似した結果になり、それぞれの力の1つを抜いて、2つの力のみでシミュレーションをすると、実測の振る舞いとは異なる振る舞いが生じ、特に協調力がないと、実測の初心者様の振る舞いになることが報告されました。フロアからは主にモデルに関する質問がなされました。また、「現実のサッカーでは、3対1の振る舞いと異なる可能性はあるが、ある場面を切り出した時に3対1と同様な振る舞いがあることを説明できると面白いのではないか」との意見が出されました。

山本先生（名古屋大学）の発表はサッカーの攻防を連成振動として表現することを試みたものです。「競合するディフェンスのラインの前後方向の移動位相は同相」「各ラインとボールとは逆相。」「各チームのディフェンスライン間の振る舞いは仮設通り。しかし、ボールの振る舞いはうまくフィットしない。ボールの動きはもっと複雑でカオティックであるため、バネの連成振動モデルのみでは説明ができない。」と報告されました。フロアからはモデル作成へのアイデアについて提案等がなされました。また、振る舞いの変化の説明をシンプルにしすぎると、本質から離れてしまわないかとの質問があり、「シンプルなモデルでの説明で、説明しきれないプレイヤーの意図などが、どの程度入ってくるかがわかると考える。」といった応答がなされました。

座長報告

齊藤 茂 (松本大学)

大会3日目の8月26日、学会の最終日に行われた口頭発表5において、4題の研究発表の座長を担当させていただきましたので、ご報告させていただきます。

1題目は、広島大学大学院の来間千晶先生による「競技中における「気持ちが切れた」および「気持ちが切れなかった」現象に関する質的研究」でした。本発表は、気持ちが「切れた」及び「切れなかった」という現象について、競技者へのインタビュー調査をもとにその構成概念や発言機序、気持ちが切れることの抑制要因等を明らかにしようとした大変ユニークな研究でした。

2題目は、慶應義塾大学非常勤講師の竹村りょうこ先生による「一流テニス競技者の熟達化に関する研究」でした。本発表は、国際大会で活躍した一流女性テニス選手への競技環境調査票とインタビュー調査から彼女ら特有の熟達化過程を明らかにした、一流競技者であった発表者のご経験が生かされた興味深い研究でした。

3題目は、筑波大学大学院の有富公教先生による「スポーツにおけるポジティブシンキングをどう理解すれば良いか？—機能的文脈主義に基づく思考の個人別構造の解釈事例より—」でした。本発表は、スポーツの遂行中に生じる思考について、研究参加者本人の認識に基づいた解釈を求め（発話思考法）、その全体的構造と機能を個人別に検討した、今後さらなる発展や広がり期待される研究でした。

4題目は、九州大学の内田若希先生による「パラアスリートのスポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的課題と支援方略の検討—受傷時期による差異に着目して—」でした。本発表は、エリート・パラアスリート（先天性及びジュニア期に受賞しているアスリート・中途障害のアスリート別）のスポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的課題及びその支援方略について、彼らへのインタビュー調査を

通して明らかにした非常に精力的な研究でした。

本セッションは、開始前から多くの先生方にお集まりいただき、席が足りず立ち見の先生方がいらっしゃりほどの盛況ぶりでした。当初は座長の人望がそうさせているのだと思っておりましたが、4名の先生方の発表を聞かせていただくうちにその理由が別にあったことが自ずと明白になってしまうほど、興味深く、精力的な研究発表ばかりでした。故に、フロアとのディスカッションは白熱し、素人座長ではそれを止めることができず、最終的には会場担当の白井先生（大阪体育大学）から強制終了をされてしまいました。このように、座長としての責任を全く果たすことができずに本セッションは終了を迎えました。この場をお借りして、発表者の先生方はもとより、会場担当の白井先生、フロアにいらっしゃった先生方にお詫び申し上げます。

しかしその反面、フロアにいらっしゃった先生方の多くが、おそらくは「得をした」とお思いになったのではないかと思います。さらには、「もう少しこのまま議論を聞いていたかった」という先生も多かったのではないのでしょうか（私自身も同様の気持ちでした）。こうした副次的な産物に免じて、お許しただければ幸いです。

最後に、ご発表された先生方、会場にお集まりいただき素晴らしい雰囲気をつくっていただいた先生方に感謝申し上げ、甚だ簡単ではありますが座長報告とさせていただきます。ありがとうございました。

座長報告

島本好平（明星大学）

大会最終日の8月26日、質的研究に量的研究、そして、実験研究というバラエティーに富んだ3つの発表から構成されるセッションの座長を担当させていただきました。以下、それぞれの発表について、私自身の研究内容への理解不足の点もあるかもしれませんが、当日の様子も含めながら報告させていただきます。

最初の演題は、「健康運動指導者は『見立てのズレ』にどのように直面するのか—メディカルフィットネスクラブの日常を記述することを通じて—」というタイトルによる、びわこ成蹊スポーツ大学大学院の古田翔一先生、豊田則成先生による発表でした。当日は古田先生に代わり豊田先生が発表されました。ここでは、運動指導現場で実際に展開されている運動指導者と運動実施者との社会的相互作用について、3つのケース（指導者 X- 実施者 A、Y-B、Z-C）をもとに紹介されました。1年以上にわたる調査期間を経て導き出された仮説的知見は、「見立てのズレが生じることで適切な指導を生む」、「葛藤するからこそ指導者としての深みが増す」、「ズレを振り返ることが大切である」というものでした。見立てのズレを「予期せぬ出来事」としてとらえるのではなく、そのようなズレは常に起こりうるものという謙虚な姿勢で日々の指導に専念することが、運動指導に限らず、あらゆる分野の指導者には求められるのではないかと、豊田先生の落ち着いた口調の発表を聴きながら感じました。

続く演題は、「運動部活動におけるチーム／個人の目標に対する意識と生徒の満足感との関係」というタイトルによる、早稲田大学の深見英一郎先生による発表でした。調査対象は中学・高校における500以上の運動部、人数は8,000名以上という大規模な調査研究の結果を報告されました。当日は数多くの調査結果が提示されましたが、個人的には「個人の目標はあるが（約93%）、その達成に向けた計画は曖昧である（約60%）」という割合が最も高い、という点が印象に残りました。本発表のキーワードは生徒たちの「主体性」であり、研究の目的

は「生徒にとって望ましい運動部活動のあり方を明らかにする」というものでした。生徒一人ひとりが自らの目標の達成につながる計画を主体的、かつ具体的に立てられるよう、多くの知識や経験を持つ指導者が、適切な距離感で助言・アドバイスを与えていくことが大切であること、また、そのような計画のもとに着実に進められる運動部活動は、生徒たちの満足感にもきっと良い影響を与えるのではないかと感想を持ちました。

最後の演題は、「アスリートにおける自律訓練法の継続的練習が慢性的ストレスに及ぼす影響—起床時コルチゾール反応（CAR）を指標として—」というタイトルによる、大阪体育大学の菅生貴之先生のグループによる発表でした。心身のリラクゼーション状態を作り上げる暗示技法として我が国で最も頻繁に用いられている自律訓練法に着目し、その2週間の継続的な自宅練習が、慢性的ストレスに及ぼす影響を検証した研究でした。2週間という習得期間は先行研究をもとに決定されたものでしたが、有意なストレス反応の低減は認められませんでした。一方で、同技法をより長期にわたり継続することにより、ストレス反応はさらに抑制される可能性が示されました。被験者となった大学生アスリートは、菅生先生の授業を履修する学生たちとのことでしたが、2週間以上にわたって一定数の被験者を確保することは難しい課題ではないかと感じました。それは調査研究においても、特に縦断調査実施の際の重要な検討課題であると言えます。研究の本筋からは若干横道にズレるかもしれませんが、被験者や調査対象者の確保が特に重要となる演題の発表では、n数の確保に用いた方策について短く紹介をしていただくことは、会場全体としても有益な情報になるのではないかと思います。

当日は座長からの質問の必要性がないほど、質疑応答ではフロアから各発表に対して多くの挙手をいただきました。セッションの運営にご協力をいただき、ありがとうございました。

座長報告

福井邦宗（国立スポーツ科学センター）

学会2日目の8月25日に行われた、ランチョンセミナー⑤「大学院生が思い描く体育・スポーツ心理学の未来」の座長を担当させて頂きました。当日は広い会場ながらも席の2/3が埋まるほど多くの方に参加頂き、他領域から参加された方も見られました。本セミナーの内容として、現在大学院に在籍し学びを深める4名の若手研究者から、所属大学で進めている特色ある活動や自身の研究紹介、自身の思い描く体育・スポーツ心理学の未来等を中心に発表頂きました。

まず、広島大学大学院の来間千晶氏からは「公立中学校を対象としたメンタルトレーニングの実践報告」という題目で、公立中学校から依頼を受け、在校生全員に対して行ったメンタルトレーニングのプログラムを発表頂き、学校教育の一環としてのメンタルトレーニング導入の提案を頂きました。次に、大阪体育大学大学院の片上絵梨子氏からは「大学生運動部を対象にした新入生サポートプログラム」という題目で、大学部活動に所属する新入部員を対象に行ったサポートプログラムの一例と共に、部活動におけるサポーター環境づくりの重要性について発表頂きました。続いて、筑波大学大学院および日本学術振興会特別研究員の雨宮怜氏からは「健康と実力発揮のためのマインドフルネスを活用した心理サポート」という題目で、臨床心理士の立場から、マインドフルネス等を活用した自律訓練法講習会での活動と、アスリートに対して心理サポートを行う際の個と集団の包括的な支援の実践の必要性について発表頂きました。最後に、九州工業大学大学院の佐久間智央氏からは「ITを活用したメンタルサポート」という題目で、アスリートとスタッフ両方向からのニーズを満たすメンタルトレーニングアプリの開発及び現場での導入と改善による、より効率的なメンタルサポートというITを活用した新たなメンタルサポートの形を提案頂きました。

発表時間が1名につき5分と限られた時間の中ではありましたが、4名がそれぞれの立場から行った活動とその意義、そして体育・スポーツ心理学の未来像という自身の志を語って頂き、非常に充実した発表内容であったと感じました。それはその後の質疑応答の際に、プログラム内容の詳細な説明やどのような関わり方をしたのか、今後不可欠となってくる他分野との連携をどのように行っていくか等の質問をフロアの方々から頂き、発表者との活発な議論が行われたことから窺え、参加頂いた方々にとっても興味深い発表内容だったのではないかと思います。これを機に、学会の中で様々な専門性を持つ若手研究者の取り組みや活動、体育・スポーツ心理学の未来について議論を交わし深める場が増え、体育・スポーツ心理学がより良く発展および進歩していくことにつながれば良いと思えたセミナーでありました。よって今後も是非ともこのような趣旨のセミナーを企画・実行し、継続していければなと思います。

母校である大阪体育大学でランチョンセミナーの座長を仰せつかるという大変名誉な機会を頂いたこと、そしてこのような貴重な学びの場を作って頂いた発表者4名の方々、参加頂いたフロアの方々、企画・運営に関わられたスタッフの方々はこの場をお借りして感謝申し上げます。また、拙い進行でご迷惑をおかけ致しましたが、皆様のご協力のおかげで無事に座長を務めあげることが出来たことにも併せてお礼申し上げます。



演者報告「公立中学校を対象としたメンタルトレーニングの実践報告」

来間千晶（広島大学大学院）

今回、『大学院生が思い描く体育・スポーツ心理学の未来』をテーマに、ランチョンセミナーで発表させていただきました。スポーツ心理学領域における大学院生の活動といえ、研究のみならず、実践的な心理サポートも盛んになってきていると認識しています。様々な大学に心理サポートのための組織があり、学生スタッフもその運営や実践に大に関わっていることと思います。私が所属している広島大学でも、2015年よりスポーツ科学センターの事業の一環として心理サポート活動を行なっています。

今回発表したように、広島大学の心理サポートチームでは公立中学校の全校生徒を対象にサポートを行ないました。私自身、中学生を対象にサポートを行なうことは初めてで、様々な配慮が必要な場面が多かったことが印象に残っています。特に、本サポートの序盤では「何をすればいいかわからない」という生徒達の声が多かったことをよく覚えています。たとえば、話の筋がいくら論理的であっても、少しでも難しい言葉が出ると生徒達は話についていけないようでした。また、「自分に合ったセルフ・トークを考えてみましょう」といきなり生徒に自由に考えさせようとしても、思いつかない、友達に披露するのが恥ずかしい、といった様子が見られ、うまくアクティビティが進まないことも多かったです。“中学生”が理解できるサポートの仕方について工夫が足りなかったと痛感しました。サポート活動を行なう際、常に対象者の視点を以て接することの重要性を強く認識しました。発表の末尾では「学校教育の一環としてメンタルトレーニングを実施すること」を提案させていただきましたが、本サポートでは私自身が学んだことの方が多かったような気がします。

また、本サポートを含め、いくつか心理サポートに携わっている際に感じたことは、心理サポートに関する情報をもっと活用できないか、ということ

です。論文や著書、学会での事例検討会や実践報告などで心理サポートの知識は得られますが、実践知や経験値を養うのはやはり現場で活動しないと難しい部分もあると思います。そのような現場でしか得られないものを共有する場がもっとないだろうか、と感じました。特に、学生スタッフならではの視点で発見し、解決したサポート上の問題も多々あると思います。学生だからこそ失敗したこと、学生だからこそ創意工夫できたことなど、心理サポートを行なう学生スタッフが知っておくべき情報もあるのではないのでしょうか。そのような情報交換のネットワークを形成する上で、今回のランチョンセミナーのように学生主体で発表させていただけた機会は非常に有益なものでした。今回は広島大学、大阪体育大学、筑波大学、九州工業大学の4校から情報提供させていただきましたが、今後様々な大学から学生の意見を発信していただき、さらに有益で幅広い情報を得ることができれば、と期待しております。

最後になりましたが、若手研究者に発表の場を与えていただき、誠にありがとうございました。ならびに、貴重な情報提供をしてくださった片上絵梨子様、雨宮怜様、佐久間智央様、司会を務めていただきました福井邦宗様、発表に対してご意見をお寄せくださった皆様に、厚く深く御礼申し上げます。

演者報告「大学生運動部を対象にした新入生サポートプログラム」

片上絵梨子（大阪体育大学大学院）

「若手研究者が描く体育スポーツ心理の未来」と題して、大学院生が各大学において実施している研究・実践活動について発表し、意見交換をする機会を頂きました。私は現在所属している大阪体育大学で実施している新入生を対象とした心理サポートプログラムの概要についてお話させていただきました。

まず初めに、プログラム実施に至った背景について紹介させていただきました。大阪体育大学では毎年、競技の継続の意思を持った新入生が全国各地から入学してくる一方、新しい練習環境に馴染めないことや相互支援的な人間関係が構築できないことがきっかけで慢性的なストレスを抱え、退部・退学してしまう学生がいることが報告されています。このような現状を改善すべく、大阪体育大学のスポーツ心理カウンセリング研究室では、心理サポートプログラムを通じて、新入生の大学でのスポーツ環境への適応を促す取り組みを行っています。

プログラムは、新入生を対象に入学後の半年間、平日のお昼休みを利用して、ランチョンセミナー形式で実施しています。各部活動を大学院生2-3名が担当しており、プログラム内容はスポーツメンタルトレーニング（SMT）の内容を構成的グループエンカウンター（SGE）に準じて展開する約50分のセッションです。SGEとは、本音と本音の交流が持てるようになるための集団体験であり、導入エクササイズから、徐々に自己の内面に触れるエクササイズに進めていき、最後に体験のシェアリングをするという流れで展開されます。各セッションは、前半に担当大学院生がワークシートやエクササイズに関して説明し、後半に新入生がワークの記入やエクササイズを実施、最後に振り返りとシェアリングを行うという流れでした。

次に、プログラム内容について報告させていただきました。新入生が卒業までの4年間にどのような

競技生活を送りたいかというビジョンを持つための‘目標設定’のセッションの様子について、実際使用したワークシートを中心にお話させていただきました。また、SGEのエクササイズの一例として、安全な形で本音と本音の交流をすることをねらいとした‘別れの花束’や、そのセッション中の新入生の様子についても紹介させていただきました。

最後に、本プログラムを受講した新入生より得られた内省報告を紹介させていただきました。各セッションでのエクササイズを通して、「自分についての気づきが深まった」という自己理解だけでなく、「横のつながり、同級生同士の関係性が深まった」という他者理解についての報告も多く見られました。このようなプログラムを通して、新入生同士の相互援助的な関係構築や大学でのスポーツ環境への適応を促すことができると考えております。今後の展開として、心理尺度などを用いて本プログラムの有効性の検証を進めることや、実際にドロップアウトしそうな新入生が見られた場合の対策を考えること（例えば、サポーターとなる上級生への心理教育プログラムなど）、サポーター的な環境づくりのための介入プログラム開発など今後の課題をまとめさせて頂きました。

限られた時間ではありましたが、定員である100名以上の方にご参加いただき、ディスカッションできたことは非常に有意義な時間となりました。末筆になりましたが、本企画の実現のためにご尽力いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

演者報告「健康と実力発揮のためのマインドフルネスを活用した心理サポート」

雨宮 怜 (筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC2)

体育・スポーツ心理学の領域において、アスリートに対する心理サポートは「実力発揮」を意図したメンタルトレーニングと、「心理的健康の維持増進」を目的としたカウンセリングが分けて扱われている (Martens, 1987)。演者は、都内にある精神科クリニックにおいて、臨床心理士として患者様の「健康」面の支援を行う傍ら、筑波大学において学生や実業団アスリートの「実力発揮」を目的とした心理サポートを実践しているが、競争というストレス状況下に常におかれるアスリートには、「実力発揮」と「健康の維持・増進」を統合した心理サポートの必要性を痛切に感じている。またアスリートの多くはチームで活動しており、各選手に個人差が認められるものの、従来型の「個人」へのカウンセリングだけでは支援に繋がりにくいことが予想される。このような状況を打破するためには、「健康」と「実力発揮」の両方を導き、「個人」で練習しながら「集団」で実践可能なマインドフルネス・プログラムが有効であると期待される (e. g., Gardner & Moore, 2004, 2007)。

そのような考えの下、演者はアスリートに対するマインドフルネス・プログラムの導入を視野に入れ、アスリートのマインドフルネス特性と「実力発揮」および「心理的健康」との関係性について調査を行っている。今回のセミナーでは、特性的なマインドフルネスが低いアスリートは、あがりや緊張を導く自己否定的なパフォーマンス評価をすること、マインドフルネス特性が高いことによってバーンアウトの進行が抑制されるという調査結果を報告し、アスリートのマインドフルネス特性を高める試みが「実力発揮」と「心理的健康」の双方にアプローチする方法である可能性を述べた。

演者が所属する筑波大学では、学生アスリートや指導者を対象として、マインドフルネスについての知識や技法の獲得を目的とする自律訓練法講習会を

行っている。プログラムの構造として週1回合計8回(測定を含む)のクローズドエンドの枠組みが採用されており、1回40分枠(お昼休みを利用)の中で、自律訓練法の指導や心理教育、また自律訓練法専門指導士や臨床心理士がファシリテーターとなる小グループでのシェアリングを行っている。その結果、マインドフルネスや困難な状況からの回復力を意味するレジリエンス尺度の得点がプログラム実施前後で変化することが確認された。また質的な結果から「競技中に自分を客観的に見ることが多くなった」や、「突発的な感情が生じたときに、それを『今そういう気持ちだ』と客観的に把握できるようになった」という競技・日常生活場面での変化が参加者から語られたことを報告した。

以上を踏まえ、演者が思い描く体育・スポーツ心理学の未来、特に心理サポートについて述べたい。常にストレス状況に置かれながらもベストパフォーマンスが求められるアスリートへの心理サポートでは、「健康」を維持しながらも「実力発揮」を可能とし、また各「個人」が自分の正解を探しながら「集団」で一つのことを行う、より包括的な効果と構造を有する支援法が今後必要になると考えられる。そのような支援を実現する上で、マインドフルネス・プログラムの実践がその一端を担い、アスリートがより効果的な心理サポートへと繋がりやすくなることを期待している。最後に、本セミナーの演者として、大変貴重な機会をいただきましたこと、大会事務局の皆様へ深く御礼申し上げます。

演者報告「ITを活用したメンタルサポート」

佐久間智央（九州工業大学大学院）

この度、日本体育学会第67回大会のランチョンセミナー「大学院生が思い描く体育・スポーツ心理学の未来」において、私は「ITを活用したメンタルサポート」という題で発表をさせていただきました。スポーツ心理学の専門知識とIT技術の融合をテーマとして、私が研究協力をさせていただいている一般社団法人行動評価システム研究所のメンタルトレーニングアプリ開発の紹介をさせていただきました。

メンタルトレーニング・メンタルサポートの現状と課題として、メンタルトレーニング指導士は、①毎日選手と会うことができないため、選手の心理状態の把握が難しい、②紙でのコンディショニングチェックが大変である、③メンタルコンディションを管理する良い方法がないといった課題が挙げられます。また、選手は、①どのようなトレーニングが自分に必要であるのかわからない、②紙でのコンディショニングチェックは面倒であり、チェックをするのを忘れてしまうといった課題が挙げられます。

これらのような現状・課題を解決する方策として、メンタルトレーニング用のアプリを開発することに取り組みました。メンタルトレーニングアプリを導入することにより、①日々のフィジカル・メンタルコンディションをスマートフォンでチェックすることが可能となる、②選手のメンタルトレーニングの実施状況の管理が容易になる、③トレーニング結果が可視化され、即時フィードバックが可能となるといった利点が挙げられ、より効率的なメンタルトレーニング・メンタルサポートが可能となると考えられます。

メンタルトレーニングアプリの内容としては、自己分析、目標設定、コンディショニングチェック、リラクゼーション・サイキングアップトレーニング、イメージトレーニング、注意集中のトレーニングが

搭載されています。今回の発表では、目標設定とコンディショニングチェックの内容を報告させていただきました。

目標設定では、長期・中期・短期の結果目標および行動目標、日々の目標を詳細に設定することが可能です。また、目標の期日を入力することにより、ホーム画面に期日までの日数が表示され、目標までの期日を常にチェックすることができます。

コンディショニングチェックでは、朝入力と夜入力を設けており、フィジカル・メンタル項目をチェックすることができます。また、自由記述による日記機能も搭載しており、その日の練習メニューや感想等を入力することが可能です。

これらの入力したデータやトレーニングデータは、期間を設定することで、経年変化として、トレーニングの実施状況や、トレーニング結果を確認することができます。

メンタルトレーニングアプリの今後の課題としては、メンタルサポートの現場へ導入し、効果の検証を行うことが挙げられ、検証結果を反映したアプリの改善も課題として挙げられます。

以上のように、スポーツ心理学の専門知識とIT技術の融合の可能性について、メンタルトレーニングアプリを例に、発表させていただきました。今後、スポーツ現場にスポーツ心理学の知見を広めて行く際には、IT技術を活用していくことが有益であると考えます。

最後になりましたが、このような機会を与えていただきました阿江美恵子会長始め学会大会委員会の先生方、司会でお世話になりました福井邦宗先生、同じく演者として登壇された片上さん、雨宮さん、来間さん、そしてご清聴頂いたフロアーの皆様からお礼申し上げます。

傍聴記

國部雅大（筑波大学）

学会2日目の12時15分から45分に開催された、体育心理学専門領域が主催するランチョンセミナー「大学院生が思い描く体育・スポーツ心理学の未来」に聴衆として参加した。専門領域の今後を担う若手研究者の発表を中心としたランチョンセミナー形式は新たな試みであると聞き、興味を持ち参加した。

司会は、福井邦宗氏（国立スポーツ科学センター）が担当し、現在大学院博士課程に在籍している4名の発表者より、所属先で行っている取組や実践内容に関するそれぞれ約5分の話題提供があり、最後にフロアを交えて質疑応答を行うという形式であった。

まず、来間千晶氏（広島大学大学院）の発表では、公立中学校の全校生徒を対象にメンタルトレーニングを行った実践報告が行われた。講義と実践を通して、重要な場面でのメンタルの弱さの克服や、コミュニケーションスキルの向上を目的としたプログラム例が紹介された。学校教育の一環としてメンタルトレーニングを実施する可能性に関する提案をされている点が新しく、非常に興味深い報告であった。学校現場への導入に関しては、手続き的に大変なこともあるかと想像されるので、導入における学校現場とのやりとりについてもさらに聞きたいと思った。

次に、片上絵梨子氏（大阪体育大学大学院）からは、大学新生を対象とした新入部員サポートプログラムについての紹介があった。5つの部活動を対象に、構成的グループエンカウンター（集団での作業）のプログラムを用いることで、新生への環境への適応を促進し、ドロップアウトやバーンアウトを防ぐことを目的にした活動の枠組みは、他大学において導入する上でも、大いに参考になるように思われた。次なる展望として、上級生を対象としたサポーター育成プログラムの開発を見据えておられ、今後のさらなる発展も期待される内容であった。

続いて、雨宮裕氏（筑波大学大学院）から、健康と実力発揮のためのマインドフルネスを活用した心

理サポートというテーマでの発表があった。雨宮氏は、臨床心理士としてクリニックでの活動を行いながら、アスリートの心理的サポートにも取り組んでいる。個人と集団に対し、健康を維持しながらも実力発揮を可能とするための支援として、自己客観視能力であるマインドフルネスを用いた実践報告が、得られた研究データとともに紹介され、今後の継続的な実施や発展が大いに期待される内容であった。

最後に、佐久間智央氏（九州工業大学大学院）から、ITを活用したメンタルサポートについての話題提供があった。佐久間氏は、一般社団法人の行動評価システム研究所においてメンタルトレーニングアプリの開発に携わっており、選手のメンタルコンディショニングの管理やサポートを行う際に、専門家とスポーツ選手とをメンタルトレーニングアプリでつなぐ可能性に関する展望が紹介された。発表を聞き、体育・スポーツ心理学の専門的知識とIT技術の融合は、今後本研究領域が応用面で発展し、他領域と共存する上で重要な役割を担うであろうと感じた。

4名の発表後に、フロアとの意見交換が行われた。特に、他分野との連携のしかたに関する議論においては、各発表者が、実践において他領域との連携や融合を念頭に置き活動している様子が窺い知れた。

今回の企画のような、今後の体育心理学専門領域を担う若手研究者による、研究・実践活動や展望を発表する機会は、非常に有意義であったと感じた。一方で、各発表内容が盛り沢山であった為、じっくりと議論をするために、他の企画とリンクする等、もう少し長い時間設定をしたほうが良いかと思われる。また、今回会場を見渡した所、フロアの年齢層も発表者と同じ若手の方の比率がやや多かったように感じた。幅広い年代からの意見を募り議論するには、指定討論者を設ける方法もよいかもしれない。

4名の発表者をはじめ、企画立案に関わった先生方にお礼申し上げます。お弁当ごちそうさまでした。

演者報告

石倉忠夫（同志社大学）

8月24～26日（水～金）にかけて、大阪体育大学にて日本体育学会第67回大会が開催されました。天候に恵まれたため、大阪湾の向こうには六甲山や淡路島を眺めることができ、非常に清々しく会場を訪れることが出来ました。

さて、私は初日昼前に行われましたポスターセッション2にて「快／不快感情喚起フィードバックメッセージがタイミング学習へ及ぼす影響」という演題で発表させていただきました。この研究は、パソコンのテンキーを使用し、被験者に始めのキーを押してから最後のキーを押すまでの合計時間と、各キーを押す相対的時間間隔を指定し、この目標を達成することを課題としました。合計時間と相対的時間間隔が一定幅以上超えた場合、快感情を喚起するフィードバックメッセージを与える条件（「次がある」「君ならできる」など）、不快感情を喚起するフィードバックメッセージを与える条件（「下手」「やめてしまえ」など）、そしてメッセージを与えない条件を設定しました。なお、各条件にはパフォーマンス結果を提示しました。分析の結果、すべての条件に学習効果が認められましたが、実験2日目に行った転移テスト（合計時間を変更）において不快感情を喚起するフィードバックメッセージが与えられた条件は他の2条件よりも不安定なパフォーマンスを示しました。仮説としては快感情を喚起するメッセージが与えられると被験者はポジティブな感情になり、学習に対して動機づけられるため、タイミング学習が促進されると予想していました。しかし転移テストにおいて不快感情を喚起するメッセージが与えられた条件が不安定なパフォーマンスを示したため、不快メッセージによる影響の方が快メッセージよりも大きく、そして注意の範囲や記憶の検索、パフォーマンスモニタリング機能などの認知処理にネガティブな影響を及ぼしたと考察しました。

私のポスター発表にご興味頂き、ご質問頂いた方

が多かったことに非常にありがたく感じました。例えば、鹿屋体育大学の森司郎先生からは非観性など被験者特性を考慮すると、より詳細に検討できる可能性をご指摘いただきました。また、名古屋大学の山本裕二先生からは、より現実な運動指導場面を想定してという意味では捉えましたが、学習に時間や日数の要する運動課題を選定し、プラトー状態にある状況下で快／不快感情喚起メッセージの影響を検討するというヒントもいただきました。その他多くの大学院生からメッセージの与え方、現実感を増す工夫、メッセージを与える文脈についてのご質問を頂くと同時に、割と他専門分科会に属されている方と議論や情報を交わすことが出来ました。

釈迦に念仏で恐縮ですが、ポスター発表は時間をあまり気にすることなく、様々な意見（情報）交換をすることが可能です。今回の発表で多くの方々からいただいたヒントをネタに、次なる実験に取り組むエネルギーを頂きました。また、偶然ですが感情に関わるテーマで本専門分科会のシンポジウムが開かれました。私にとっててんこ盛りの学会になりました。

最後になりましたが、酷暑のなか学会開催にご尽力いただきました大阪体育大学の先生方や学生の皆様、企画いただいた関係者の方々に御礼を申し上げます。

演者報告

石原端子（沖縄大学）

9回目の発表となった第67回大会では、ポスター発表を行った。演題は「小学生年代のスポーツ指導者の悩みと求めるサポート」、児童期の子どもたちを対象にコーチングをしているコーチの悩みと求めているサポート内容を整理することが目的であった。沖縄県内で小学生を対象にコーチングを行っているコーチ70名に質問紙調査を実施し、そのデータを分析した。その結果、コーチの悩みが9つ（①選手不足、②保護者への対応、③家庭環境を含めた生活面での指導、④学業を両立させるための指導、⑤指導者としての能力、⑥指導体制の充実、⑦古い指導者への対応、⑧心理的スキルトレーニングに関する知識、⑨フィジカルトレーニングに関する知識）、求めるサポートが5つ（①保護者の協力、②練習環境の確保、③他のコーチのサポート、④メンタルの専門家からのサポート、⑤フィジカルの専門家からのサポート）に集約された。

2012年12月に桜宮高校の体罰事件が報道されて以降、文科省を筆頭に、コーチの資質向上に向けた本腰の取り組みが始まった。沖縄でも、昨年夏地方紙に「子どものいま」というテーマで特集が組まれた。そこでは、小学生で燃え尽きる子、威圧的指導に萎縮する子、部活動の活動時間が削減されモチベーションを下げってしまう子など、ジュニア年代のスポーツ指導現場で起きているさまざまな実態が取り上げられた。筆者は、担当するスポーツコーチング論の講義で、履修学生を対象に毎年体罰に関する調査を行っているが、体罰を受けたことがあると回答する学生の比率が年々減少傾向にある。その一方で、不思議なことに体罰を受けたことのない学生のなかに体罰容認派が増えてきた実感を持っている。そういう意味で、体罰の問題は一筋縄ではいかないなあとあらためて根の深さを感じている。学生と話をしていると、とりわけ小学生年代でのコーチングが、その後のスポーツ活動に大きく影響していると

感じる。それがこの調査のきっかけだが、この研究の行き着くところは、コーチングの質の向上であり、そのためのサポート体制の整備に向けたエビデンスの収集である。サポートには、地方の文化・風土を基盤にした個別の在り様があるのではと想像している。大会最終日の一般公開シンポジウム「日本から発信するコーチング・イノベーション」で演者の一人であった島沢優子氏（フリーライター）が、多くの教育現場を取材してきた結果、「最後残るは、小学生年代のコーチですね」と言われたことにいたく共感した。素敵なコーチが溢れる現場になってほしいと願っている。

本調査のデータ分析にはKJ法を用いたが、事例を通じた分析も予定している。そのようなことをフロアの先生と話していたところ、質的研究の分析方法について貴重なアドバイスを頂いた。他分野の先生とも交流することができたが、体育学会のポスター発表会場は、ざっくばらんに異分野交流ができるありがたい機会だと再認識した。また、会場となった大阪体育大学は、院生時代を含め長きにわたり大変お世話になった場所であった。大学の先生方だけでなく職員の方から頂いた「おかえり～」の一言は、何よりも嬉しい言葉であった。ホスピタリティ溢れた学会運営に、もう一度感謝したい。

日本体育学会第67回大会 大会参加記

武田守弘（福山平成大学）

平成28年8月に大阪体育大学を会場として開催された日本体育学会第67回大会に参加しました。体育心理学領域の荒木雅信先生を大会委員長とする今回は、大阪体育大学の教職員、院生・学生等、スタッフの皆様の御協力のもと、非常に心遣いが感じられる素晴らしい大会でありました。スタッフの数が多く対応が非常に丁寧だったり、発表の教室の配置が近く移動が楽であったり、体育大学の充実した施設を見せていただいたりと心から満足させていただきました。ありがとうございました。

思い起こせば私はこれまで何度も日本体育学会には参加しており、広島大学で行われた際には大会スタッフとして関わったこともありました。毎年様々な場所で開催される体育学会は多少の旅行気分が味わえるとともに、様々な領域の先生方とお会いすることもできるため同窓会の様相も呈しており、非常に楽しみな学会であります。しかしながら、今回の67回大会は私個人にとって、特に感慨深いものであったように思います。というのもここ4年間、体育心理学専門領域の事務局を広島大学の関矢先生、川崎医療福祉大学の田島先生とともに担当しており、本大会を最後に次の事務局へ仕事を引き継ぐことになっていたからです。4年前に事務局をお受けしてから、体育学会は仕事の場となりました。64回立命館大学、65回岩手大学、66回国土館大学、67回大阪体育大学と学会大会期間中は毎日参加しました。学会での仕事は、プレセミナーの手伝い、理事会の開催（資料の準備、弁当の手配、庶務係としての報告、議事録の作成）、会報原稿の依頼（演者、司会者、座長、傍聴記など）、謝金のお渡し（領収書確保）などの業務があり、常に慌てていたように感じます。学会時以外では、会報誌の作成（原稿回収、校正、発刊、送付）、選挙の管理（2年に1回、代議員選挙、役員選挙）などが私の主な仕事でした。田島先生は会計係としてお金にまつわる重大で様々

な業務（会計報告、予算案の作成、理事会での交通費の準備、学会での謝金の準備などなど）を担当していただきました。関矢先生は理事長として事務局のすべての取りまとめと、学会本部から要求される様々な業務を担当していただきました。また、会長をはじめとする理事の先生方には、学会大会委員、企画委員、広報委員といった各種委員会や、監事、幹事の委員にてご協力を賜り、何とか4年間の任期を終えようとしております。今回は最後となる学会運営でありこれまでの重責から解放される喜びを少しだけ感じながら、本大会に参加しておりましたことから、この第67回大会は思い出深い忘れられない学会となりました。

今後は東京大学の工藤先生を理事長とし、奥村先生、國部先生にバトンタッチいたします。よろしく願いいたします。引継ぎがきちんとできるまで陰ながらサポートしたいと思います。

次年度からは少し気楽な気持ちで学会に参加し、以前のように大いに楽しみたいと思います。

Ⅱ. 研究会の活動報告

スポーツ社会心理学研究会 活動報告

杉山佳生 (九州大学)

今年度(平成28年度)は、九州スポーツ心理学会第30回大会の前に日本スポーツメンタルトレーニング指導士会主催の全国フォーラムが行われることになり、スポーツ社会心理学研究会のメンバーも多数福岡を訪れるということから、このタイミングで、福岡で例会を行うことにしました。とはいえ、フォーラムと九州スポーツ心理学会の前後や間で十分な時間が取れるわけでもないため、やむなく、2017年3月3日(金)の夜(18時30分~21時頃)に、「ディナーミーティング」として、例会を開催することになりました。

参加者は、共同会長である阿江美恵子先生(東京女子体育大学)、同じく共同会長である伊藤豊彦先生(島根大学)とその奥様、磯貝浩久先生(九州工業大学)、萩原悟一先生(鹿屋体育大学)、瀧豊樹先生(日本経済大学:研究会メンバーではありませんでしたが、今回の参加を機に、メンバーになっていただきました)、はるばる北海道から2年連続参加の安部久貴先生(北海道教育大学岩見沢校)、九州大学の学術協力研究員である阪田俊輔先生、そして、私、杉山とその妻の、計10名となりました。このように、今回は、メンバーの家族2名の参加があり、研究会の主旨に則って、「社会的な交流」を深めることができたのではないかと思います。

さて、肝心の例会の中身ですが、特に研究報告をするということはありませんでしたが、事務局より、「スポーツ社会心理学的読み物」の出版を「検討」しようではないかという提案をさせていただきました(「検討する」は、実現させようという意欲があまりない場合に使う表現だと言われることもあります、そこは、あまり考えないようにして下さい・・・)。具体的には、以下に示すような目次の本を執筆してはどうか、というものでした。

目次案(仮称「スポーツ社会心理学リーディングス」)

1. 競技と指導のスポーツ社会心理学

競技スポーツへのコミットメント/志向性の文化差/言葉かけ/非言語的コミュニケーション/体罰・暴力問題/性差・ジェンダー問題/その他

2. 学校体育とスポーツ社会心理学

学習方略と動機づけ/情動・社会的知能と体育/自己調整学習/授業ストレス/中高でのライフスキル教育/大学でのライフスキル教育/その他

3. 社会支援とスポーツ社会心理学

障害者スポーツにおける支援/途上国でのスポーツ支援/震災被災児童等への支援/噴火被災地在住児童への支援/その他

ここで取り上げようとしているテーマの多くは、本研究会のメンバーが実際に取り組んでいる研究や実践に関わるものなのですが、執筆の「検討」に至った最たる理由は、3の「社会支援」についてまともにおきたいから、ということになります。私は、昨年の日本スポーツ心理学会第43回大会(於北星学園大学)で、研究企画情報委員長として「スポーツ心理学の社会貢献」というシンポジウムを企画したのですが、その際に、スポーツ心理学の成果やノウハウを生かして様々な社会貢献が行われていることを、より詳しく知ることになりました。社会とのつながりを重視する当研究会としても、このようなスポーツ心理学の社会貢献活動を世の中にもっとアピールすべきではないかと考えており、その機会にできればということでもあります。

なお、目次案には、社会貢献以外の領域も含めて、まだまだ「不足・空白箇所」がありますので、本研究会のメンバーであるなしに関わらず、アイデアやご協力をいただけるようでしたら、事務局までご一報いただければ、幸いです。

スポーツ社会心理学研究会事務局

杉山佳生 (九州大学大学院人間環境学研究院)

sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会（ISMTE）と国際応用スポーツ心理学会（AASP）をモデルに、1994年にスタートし、現場での実践を目的とした情報交換会を全国各地で開催している。本研究会は、大阪で開催されていた体育心理学例会の許可を得てスタートし、1980年代から1990年代に2か月ごとに各研究者が研究発表をしていたその間の月に、スポーツ心理学の現場での応用・実践を目的とした例会としてスタートした。最近では、現場の指導者や選手を対象に、スポーツメンタルトレーニング上級指導士・指導士が情報の提供をし、その内容を選手や指導者が現場で実践してもらい、その結果をまた研究会で報告するという理論（研究）と実践（現場）のキャッチボールを目的としている。

2016年度は、東海大学研究会が毎週1回の開催をし、関東地区、愛知県、栃木県の各研究会が毎月1回、中京地区が不定期の講習会を開催した。北海道支部会では、4月に旭川地区、12月に帯広地区で2日間講習会を実施した。残念ながら、本年度も沖縄、福井、秋田、長崎研究会が休止中となっている。

情報収集活動としては、研究会のメンバーがアリゾナのフェニックスで開催された国際応用スポーツ心理学会（AASP）に7名が参加し、世界的な情報の収集をし、その報告を研究会で行った。最近では、パフォーマンス心理学、マインドフルネス、ポジティブ心理学等の話題が多く報告され、シンポジウム、ワークショップ、キーノートレクチャー、ポスターや口頭発表の内容を研究会で報告した。また日本体育学会、日本スポーツ心理学会、全国メンタルトレーニングフォーラム、関東地区メンタルトレーニングフォーラム、学生スポーツメンタルトレーニング研究会、九州スポーツ心理学会などにもメンバーが参加し、そこでの話題などを報告している。

研究会では、このような学会で取り上げられた内容を報告し、その情報を発展させ、現場でどう応用

するかという形式で研究会は開催されている。一方、毎月開催される関東地区や毎週開催の東海大学研究会では、自己紹介を兼ねた情報交換が30分程度行われる。参加者が現場での問題点やメンタルトレーニングの実践例やその効果等を持ち寄り報告やそのディスカッションをしている。また主催者側からの現場報告や話題提供が行われ、同時にいくつかの心理的スキルや実先例に対してディスカッションが行われている。さらに、スポーツメンタルトレーニング上級指導士の資格取得者からの話題提供や現場での実践例が報告されている。加えて、参加者の選手やコーチからの報告や話題提供、映像による試合や練習場面での報告からグループを作りディスカッションなどが盛んに行われている。本年度は、リオオリンピックのコーチを招待しての講習会の実施、メンタルトレーニングを実施しているプロボクシング東洋太平洋チャンピオンの特別講習会、中学や高校の指導者を招待しての講習会等も実施した。研究会後は、懇親会等で参加者同士によるさらなる情報交換が毎回行われている。

本研究会は、現場のコーチや選手の参加が多いため現場での実践、競技力向上を目的とした情報交換（研究と現場・実践のキャッチボール）が盛んに行われている。今後は、より多くのスポーツメンタルトレーニング指導士や研究者たちの参加が望まれる。

運動学習研究会 活動報告

山本真史（日本福祉大学※2017年3月31日まで大阪体育大学に所属）

第25回運動学習研究会は、荒木雅信先生（大阪体育大学）が世話人となり、2016年9月9日（金）から11日（日）にかけて大阪体育大学浪商倶楽部で開催されました。研究会の開催直前の8月下旬には、大阪体育大学で日本体育学会第67回大会が開催されましたので、学会大会に続く、大阪体育大学での研究会開催でした。学会大会が直前にあったにもかかわらず、体育系の大学教員や大学院生を中心として29名が研究会に参加し、演題数も16題と盛況な研究会となりました。

研究会における各発表者の持ち時間は30分または45分で、すべて口頭による発表でした。各発表者には30分以上の持ち時間が設けられるため、参加者は発表に関して生じる疑問や意見を逐次（発表中含む）発表者に伝えることで、熱く深い議論が展開されました。各発表者の持ち時間の終了後も、発表者与其他参加者との間で活発な議論が種々行われ、特に参加者のほとんどが浪商倶楽部に宿泊していたため、日中だけでなく夜も熱い議論が繰り広げられました。

発表の内容は、スポーツを対象とした運動学習や知覚、対人・集団のダイナミクスなどを中心に、基礎的な心理物理学実験や実験機器の開発に関するものもあり多岐にわたっていましたが、いずれの発表もヒト（個体）やその集合体（集団）の運動や認知に関わるものという点で共通していたため、深くかつ建設的な議論の場となりました。

研究会2日目の夜には、ナイトセッションとして、名古屋大学の山本裕二先生がこれまでに行ってきた研究（研究史）について発表をされました。そこでは、山本裕二先生が大学院生であった時の話も展開され、他の参加者も発表スライドに種々登場したことで、当時を懐かしむ声が各所であがりました。

すべての発表が終了した後に、参加者による総

会が開催されました。運動学習研究会では研究会後に報告集が発行されます。そのため各参加者は、いずれかの発表に対して文書でコメントを発表者に伝え、コメントを受けた発表者はそれに返答をします。この文書による質疑応答・意見交換は、各参加者にとって分野の近い発表者の研究内容をより深く理解するための機会となり、また各発表者にとっては研究会の場にとどまらず、各所属先に戻った後にも自身の研究を進展させるための機会になり得ると思います。このような発表者と参加者との多様な意見交換の場が設けられることは、運動学習研究会の特長のひとつであると思われます。

連日熱い発表と議論が繰り返して展開され、大阪体育大学での3日間にわたる研究会はあっという間に閉会しました。2017年度の研究会は、8月に東京学芸大学での開催が予定されています。下記の運動学習研究会のホームページに、研究会に関する情報が随時更新されますのでご参照ください。

運動学習研究会ホームページ

<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/jmls/>



研究会終了後の集合写真

臨床スポーツ心理学研究会 活動報告

中込四郎（国士舘大学）

第3回臨床スポーツ心理学研究会は、昨年に引き続き、岐阜大学サテライトキャンパスを会場にして、平成28年10月9・10日の2日間で行われました。参加者は30名でしたが、北は北海道そして南は沖縄からと、遠方からの会員の参加をいただくことができました。

研修内容は以下の通りでした。

アスリートの心理相談として、2事例の検討が行われました。一つは、江田香織（筑波大学非常勤研究員）氏より、「グループ箱庭体験を通じたチーム再建過程」と題した、グループ箱庭体験を介したチームスポーツへの広義のメンタルトレーニングの事例でした。中込四郎（筑波大学）が指定討論者となり、活発な意見交換が行われました。本実践にあるようなチームメンバーの集団力動に直接働きかけるメンタルトレーニングの試みは極めて少なく、今後のますますの発展が期待されました。

二つ目は、千葉陽子（筑波大学）氏による「怪我を繰り返し不本意な競技生活を送ってきた学生アスリートの事例-卒業期を控え、それまでの競技生活の語り直しを通して-」と題したスポーツカウンセリング事例の報告でした。こちらは、指定討論者を鈴木 壯（岐阜大学）氏にお願いし、事例の理解を深めていきました。クライアントがそれまでの＜不本意な＞競技生活をカウンセラーの前で語り直すことにより、新たな物語を生成し、動き出して行く流れに触れることができました。

さらに、今回の2時間枠でのレクチャーは、杉江征（筑波大学）氏に「自律訓練法の臨床場面への応用、展開」といったテーマに基づき講義をいただきました。ほとんどの会員がメンタルトレーニングの中で自律訓練法を用いた経験があることから、杉江先生には、実施方法よりも本法の歴史や理論的背景、効果機序に重きをおいたお話をうかがうことができました。また、臨床場面での応用展開の仕方について、

先生の具体的な事例に基づき、理解を深めることができました。

それぞれの演題に対するフロアーからの質問や意見、感想をうかがって強く感じたのは、参加者個々の臨床力の高くなったことです。おそらく、事例の発表者にとっても学ぶ良い学びの機会となったのではないかと思います。そして何より、フロアーからの活発な意見が促された背景には、質の高い発表内容であったからだと考えられました。一つの事例であっても、聴く側は、それによって自身の経験と照らし合わせながら様々な思いが喚起されたはずであり、一演題を2時間30分枠で発表&質疑・応答に費やす本研究会の意義をあらためて実感するものでした。

ところで、今回の懇親会では、鈴木&岸先生の計らいで、屋形船を一艘貸切り、長良川の鶴飼見学をすることができました。真つ暗ななかで、松明の明かりを手掛かりに鶴を巧みに扱う鶴匠の姿は圧巻で、多くの会員が初めての経験であったことでしょう。本来ならば、その日の研修会の振り返りやお互いの近況を話題とするはずの懇親会ですが、今回は鶴飼の独特な雰囲気に取り込まれた会となりました。そして本来の部分は、その後の二次会において盛り上がったようでした。

最後に、事務局より、次年度も同時期の開催予定であることが参加者に伝えられ、研究会がお開きとなりました。今後も、年に一度のこのスポーツ臨床の研究会が、踏み台となって、臨床の仲間を増やし、そしてスポーツ臨床のさらなるレベルアップにつながることを願っています。

スポーツ動機づけ研究会 活動報告

武田直之（名古屋経営短期大学）

スポーツ動機づけ研究会は、「会員の研究報告の場を提供すると共に、会員相互の情報交換を図る」ことを目的に毎年開催されています。第14回を数える今回は、2016年6月4日、5日の2日間にわたり、愛知学院大学 名城公園キャンパスのAGALSタワーにて開催され、30名を超える参加者で活発な意見交換が行われました。

発表はロング版とショート版との、2種類の形式が用意され、研究の途上段階にある大学院生でも参加しやすいプログラム構成でした。一方で、討論の時間は発表と同等以上（今回、ショート版は発表15分に対して討論15分、ロング版は発表20分に対して討論30分でした）に確保され、肩ひじを張らないフランクな雰囲気の中で建設的な議論が行われました。

今年度の研究発表は以下の10演題でした。

- ・ ソーシャルサポート受領がスポーツ選手に及ぼす心理的影響（大阪体育大学大学院・片上 絵梨子）
- ・ 集団課題の実行順序が集団的効力感の評価プロセスに及ぼす影響（大阪大学大学院・内田 遼介）
- ・ スポーツにおける責任感測定尺度の予備的検討ーラグビー競技に着目してー（愛知学院大学大学院・富士本 凌）
- ・ 大学アスリートのハーディネスー自尊感情とパフォーマンスとの関連ー（順天堂大学大学院・山口 慎史）
- ・ 日本のサッカー競技者におけるバーンアウトとエンゲージメントの関連（順天堂大学・上村 明）
- ・ 色彩認識と動機づけおよび運動パフォーマンスとの関連についての検討（札幌国際大学・平間 康允）
- ・ 陸上競技における成功・失敗場面での感情がその後の動機づけに及ぼす影響：自己効力感との関連（愛知学院大学大学院・今井 美希）
- ・ タレント発掘プログラム修了生に関する研究（静岡大学・杉山 卓也）

- ・ エキスパートの動機づけー音楽、芸術、科学領域の熟達体験を対象とした質的分析ー（東北大学・北村 勝朗）
- ・ ボール運動の学習意欲を高める学習指導方策：ゲームを挟んだ学習過程、きょうだいチーム制、スポーツ教育モデル（筑波大学・長谷川 悦示）

動機づけ研究は、多くの領域に広がりを見せている背景もあってか、本研究会の発表内容も多種多彩であり、ソーシャルサポート、集合的効力感や道具性、スポーツの社会的責任性、ハーディネス、アスリートのバーンアウトとエンゲージメント、色彩認識と動機づけ雰囲気、先行経験に対する感情と自己効力感、タレント発掘、領域を超えたエキスパートの動機づけ、学習意欲を高める指導方策、など今回の研究会だけでも多くのテーマが提示されました。

また、第1日目の最後に企画された懇親会においても、ほとんどの会員が参加し、議論や情報交換で話の尽きない状態に至るなど、会員同士の交流も活発におこなわれ、盛会のうちに終了いたしました。

本研究会の特徴の一つに、大学院生や学部生といった若手研究者が多く参加している点が挙げられます。研究会への参加経験が少ない方であっても、積極的に発言することが促される雰囲気があり、そのため発表者には自身の提示したテーマが具体的にどういった意味を持つのかを明示することが求められます。それらを改めて参加者で共通了解とすることが、フランクで建設的な議論の土台となっているように感じられます。

さて、2017年度の研究会は8月28-30日の3日間にわたり、愛知学院大学 日進キャンパスで開催される予定です。当研究会は、上記のような多様な内容とともに、従来の口頭発表に加えてポスター発表を行うなど、できるだけ参加いただきやすい方法で行います。ご興味をお持ちの多くの先生方のご参加を心からお待ちしています。

Ⅲ. 研究室紹介

研究室紹介
東京大学大学院情報学環・学際情報学府
大学院総合文化研究科生命環境科学系（兼担） 工藤和俊研究室

工藤和俊（東京大学）

大学概要

東京大学は1877年に創設された国立大学で、学部および大学院を合わせて約28,000名の学生が在籍しています。東京大学では伝統的に、学部教育の基礎として教養（リベラル・アーツ）教育を重視しており、必修授業である「身体運動・健康科学実習」では全学生が「教養としての身体運動」を学ぶこととなります。また、2016年5月に全学的研究拠点としてスポーツ先端科学研究拠点が開設され、学部間連携のもとにスポーツ科学を推進する体制が整いつつあります。研究室のある駒場キャンパスには、春の桜や秋の銀杏など四季折々の木々とともに、江戸時代に設けられた将軍家の鷹狩場跡、旧制第一高等学校の記念碑、1964年東京オリンピック出場の日本選手が秘密特訓をした体育館など、歴史を感じさせる建造物が点在しています。また、キャンパスからの徒歩圏内には駒場公園、日本近代文学館などの文化施設や渋谷の繁華街があるという恵まれた(?)立地にあります。

学部・大学院

現在私自身は、学部の授業として1・2年生を対象とした「身体運動・健康科学実習」、および「身体運動科学講義」、3・4年生を対象とした「スポーツ心理学」「発育心理学」等を担当しています。また2011年度より大学院総合文化研究科にて大学院教育を担当しており、これまでに研究室から8名の修士号取得者および3名の博士号取得者が出ています。博士号取得後の進路は、ポスドク研究員（宮田紘平君：生理学研究所、岡野真裕君：立命館大学）および学振PD（太田啓示君）です。なお、2016年度からは、大学院情報学環からも大学院生の受け入れが可能になりました。いずれの所属であっても、1人の教員が受け入れられる大学院学生数は1学年あたり3名までという制限があるため、大学院では

比較的少人数で指導を受けることになります。2017年度の研究室所属大学院生は、修士課程7名、博士課程11名で、体育・スポーツ関係者のみならず理学療法士、作業療法士、音楽関係者など多様な面々が集まっています（写真）。

研究内容

当研究室ではこれまで、「スポーツ・ダンス・音楽演奏における巧みさと熟達化」をテーマとして研究を進めてきました。「運動スキル」や「運動の学習・熟達化」は伝統的な心理学のテーマですが、近年目覚ましく発展してきた認知科学、神経科学、数理科学等の方法論を積極的に取り入れた研究を進めてきました。特に、力学系アプローチの手法を用いた協調ダイナミクス (coordination dynamics) 研究に関しては、その発展可能性を指摘（工藤、2000）して以来、聴覚 - 運動協調に関する基礎研究（Kudo et al., 2006）を経て、ダンス、ドラム演奏、および対人環境でのリズムアンサンブルの学習における具体的な制約要因の数理的記述に成功しました（Miura et al., 2011; Fujii et al., 2010; Miyata & Kudo, 2014; Okano et al., 2017など）。とりわけ、ストリートダンスにおいて運動のテンポが増大すると意図していない運動が発現してしまうという知見（Miura et al., 2011）は、現代的なリズムのダンスを指導するうえで重要な事柄となることから、高校体育の指導教材にも取り入れられています（高橋他、2013）。さらに近年では、陸上競技短距離走のトップ選手が出場する試合においても力学系モデルで記述可能な「引き込み (entrainment) 現象」が報告されている（Varlet & Richardson, 2015）ことから、さらに多くのスポーツ種目を対象とした研究発展が期待されます。

また、運動の学習は数分から数十年まで多様な時間スケールで起こる現象であり、同時に動作の協

調 (Kudo et al., 2000)、脱力 (Yoshie et al., 2009; Hirano et al., 2013)、意思決定 (Ota et al., 2015, 2016)、さらには社会的要因である相対年齢効果 (工藤, 2013) まで多様な階層が関わる現象であることから、これらの要因を幅広く視野に入れた研究を進めていきたいと考えています。

そのほか研究室の活動として一流アスリートや熟練音楽家の筋活動計測、プロのレーシングドライバーやプロゴルファーの試合時における生体情報計測なども手がけています。大学院生に対しては、修士論文・博士論文のテーマとして基礎的な研究を行うよう指導していますが、共同研究としてこれらの応用研究にも携わり、将来的にはフィールドと実験室を往来しつつ両者の良いところを生かせる研究者になってほしいと願っています。

おわりに

スポーツ・ダンス・音楽演奏のスキルを「人間の身体運動 (human movement)」という共通項から抽出しようという試みは、はじめは手探りの連続でしたが、近年になってトレーニング科学研究賞、東京大学一高賞、笹川科学研究奨励賞、ヤマハスポーツチャレンジ特別チャレンジャー賞、日本音楽知覚認知学会研究選奨、音学シンポジウム優秀発表賞など、徐々に学内外から評価して頂けるようになりました。私自身、今後の研究進展を楽しみにしています。

研究室ホームページ

<http://www.dexterity-lab.c.u-tokyo.ac.jp/>

引用文献

- Fujii, S., Kudo, K., Ohtsuki, T., & Oda, S. (2009) Tapping performance and underlying wrist muscle activity of non-drummers, drummers, and the world's fastest drummer. *Neuroscience Letters*, 459 (2), 69-73.
- Fujii, S., Kudo, K., Ohtsuki, T., & Oda, S. (2010) *Intrinsic constraint of asymmetry acting as a control parameter on rapid, rhythmic bimanual*

coordination: A Study of professional drummers and nondrummers. Journal of Neurophysiology, 104 (4), 2178-2186.

- Hirano, T., Kudo, K., Ohtsuki, T., & Kinoshita, H. (2013) Orofacial muscular activity and related skin movement during the preparatory and sustained phases of tone production on the French horn. *Motor Control*, 17 (3), 256-272.
- Kudo, K., Ito, T., Tsutsui, S., Yamamoto, Y., & Ishikura, T. (2000) Compensatory coordination of release parameters in a throwing task. *Journal of Motor Behavior*, 32 (4), 337-345.
- 工藤和俊 (2004) 運動スキル研究におけるダイナミカルシステムアプローチ. 日本スポーツ心理学会 (編), *スポーツ心理学—その軌跡と展望* (pp. 175-184). 東京: 大修館書店.
- Kudo, K., Park, H., Kay, B. A., & Turvey, M. T. (2006) Environmental coupling modulates the attractors of rhythmic coordination. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 32 (3), 599-609.
- 工藤和俊 (2013) スキルの発達と才能教育. *体育の科学*, 63 (3), 187-190.
- Miura, A., Kudo, K., Ohtsuki, T., & Kanehisa, H. (2011) Coordination modes in sensorimotor synchronization of whole-body movement: A study of street dancers and non-dancers. *Human Movement Science*, 30 (6), 1260-1271.
- Miyata, K., & Kudo, K. (2014) Mutual stabilization of rhythmic vocalization and whole-body movement. *PLoS ONE*, 9 (12), e115495.
- Okano, M., Shinya, M., & Kudo, K. (2017) Paired synchronous rhythmic finger tapping without an external timing cue shows greater speed increases relative to those for solo tapping. *Scientific Reports*, 7, 43987.
- Ota, K., Shinya, M., & Kudo, K. (2015) Motor planning under temporal uncertainty is suboptimal when the gain function is asymmetric. *Frontiers in*

Computational Neuroscience, 9.

Ota, K., Shinya, M., & Kudo, K. (2016) Sub-optimality in motor planning is retained throughout 9 days practice of 2250 trials. *Scientific Reports*, 6, 43987.

高橋建夫・本村清人・寒川恒夫・友添秀則・大築立志 (編著)(2013) 基礎から学ぶスポーツ概論. 東京: 大修館書店.

Varlet, M., & Richardson, M. J. (2015) What would Be Usain Bolt's 100-meter sprint world record

without Tyson Gay? Unintentional interpersonal synchronization between the two sprinters. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 41 (1), 36-41.

Yoshie, M., Kudo, K., Murakoshi, T., & Ohtsuki, T. (2009) Music performance anxiety in skilled pianists: effects of social-evaluative performance situation on subjective, autonomic, and electromyographic reactions. *Experimental Brain Research*, 199 (2), 117-126.



IV. 学位論文紹介

海外派遣サッカー指導者に関する心理学的研究：異文化におけるコーチングの視点から

松山博明（大阪成蹊大学）

学位：博士（スポーツ科学）、授与機関：大阪体育大学

取得日：2016年3月17日、指導教員：土屋裕睦教授

本研究では、海外派遣サッカー指導者の実態を明らかにすることを目的とした。具体的にはコーチング環境の現状を明らかにすることと、同時にそこで指導者が体験する異文化での心理的変容過程を探索することを研究課題とした。

序章では、コーチングを「競技やチームを育成し、目標達成のために最大限にサポートすること」と定義した。指導現場の実態解明のためにトレーニングメニューの分類とコーチング課題を設定した。コーチング課題は、大会前の準備期間中において、選考、トレーニング期間、移動、調整の4項目、試合期間中においては、体力面、技術面、戦術面、心理面の4項目とした。また、2つの研究課題にアプローチするため、本研究では量的および質的研究法を採用することとした。

第2章では海外派遣サッカー指導者の体験をつぶさに記述するため、事例研究を行った。対象は海外派遣サッカー指導者1名であり、ブータンにおける約1年半にわたるコーチング記録をもとに、コーチング環境の実態を明らかにした。その結果、スタッフ数、施設および選手の競技能力などにおいて、日本とは大きく異なることが示唆された。さらに指導者は異文化において、それぞれの時期に様々なストレスを抱えることが明らかとなった。

第3章では、ブータン以外の国のコーチング環境の実態を把握するために、FIFA ランキング上位・中位・下位別に実態の調査を行った。その結果、ブータン同様、アジア貢献事業の対象国のスタッフ数や施設といったコーチング環境は、日本とは大きく異なることが明らかになった。さらに選手の競技能力においては、ランキング下位群は上位群に比べ体力得点と心理得点において劣っていることが明らかになった。他に、技術得点でも「簡単にボールを奪われない」という項目においては上位群と下位群に違いが見られた。

次に第4章では、下位群による初めて海外に派遣されたサッカー指導者3名に対するインタビュー調査から、異文化体験を複線径路・等至性モデル(TEM)によって可視化した。その結果、異文化適応過程は、以下に示すキャリア形成プロセスの4段階サイクルに基づいて捉えることができた。

①決断の時期では、アジア貢献事業の公募の後、いずれの指導者も落選した場合、再就職先を探さなくてはならないストレスや家族への責任感による気持ちから人事選考への不安感を抱いていた。赴任決定後、指導者はJFAでの手続きや現地の情報収集や準備を行っていくうちに、新天地での期待と不安感が高まっていった。

②文化適応と挑戦の時期では、赴任時、いずれの指導者も新天地での期待と不安感があつた。しかし、トレーニングを重ねていくうちに、サッカーのレベルの低さと、選手が規則を守らないという意識の低さから、落胆の気持ちに変わっていった。また、1回目の国際大会出場前、大切な時期にも関わらず、就労ビザ取得の影響による問題から、1か月近く帰国しなければいけない事態にストレスを感じた指導者が存在した。このことから、指導者が、日本では普段から当たり前と考え、実施していたことが、赴任先では全く機能しなくなったことによって、心理的ストレスが大きくなった。

③葛藤と試行錯誤の時期では、1度目の国際大会出場によって、惨敗の結果に終わった指導者は、異国の地でのマスコミや周りからの非難や中傷を受け、大きなストレスを感じた。また、指導者は2度目の国際大会出場前に、国内の移籍問題で思うように選手が獲得できない強化システムによる影響や、国内のリーグ戦中、宗教上の儀式を行うために試合時間が大幅に変更されたこと、またチームの仕事に非協力的なスタッフがいたことによって、大きなストレスを感じた。

④振り返りと新たな目標の時期では、指導者が2回目の国際大会出場し、帰国した後の時期であった。帰国後の指導者は、多くのストレスを抱えたにもかかわらず、海外派遣先での経験をネガティブに捉えていなかった。むしろ、いずれの指導者からもこの経験によって得られた満足感や自信を感じ取ることが出来た。このことから、指導者は、家族や友人などの“深い人間関係”、国際大会などの経験による“新しい価値観”、大きな困難を乗り越える“自己の強さ”を認識し、非常に挑戦的な人生の危機でもがき奮闘した結果起こるポジティブな変化の体験をした。

以上をもとに、第5章では総括を行った。海外派遣サッカー指導者は、日本とは大きく異なるコーチング環境から多くのストレスに直面していた。そのストレスに対して、もがき苦しむ中でレジリエンスを発揮し、乗り越えていることが分かった。本研究ではこれまで明らかにされてこなかった海外派遣サッカー指導者のコーチング環境の実態と、そこでの心理的変容過程が明らかとなった。この知見はアジア貢献事業のみならず、異文化における心理的適応過程の解明にもつながると期待された。

日常場面で経験するポジティブ感情がスポーツにおけるバーンアウト傾向に及ぼす影響

田中輝海 (高千穂大学人間科学部)

学位：博士 (心理学), 授与機関：九州大学

取得日：2016年9月26日, 指導教員：杉山佳生教授

【研究の背景と目的】

「スポーツ活動や競技に対する意欲を失い、文字通り燃えつきたように消耗疲弊した状態」(岸、1994)とされるバーンアウトに関する従来の研究は、発症過程を捉える理論モデルの構築 (Gould et al., 1996a, 1996b, 1997; Schmidt and Stein, 1991; Silva, 1990; Smith, 1986) や、競技ストレスや性格特徴などの発症要因の解明 (遠藤・加戸、2002; 岸ほか、1991; 小橋川ほか、1996; 鈴木・岸、1994) に見られる通り、主にそのネガティブな側面に焦点が当てられてきた。

近年では、ネガティブな側面に着目してきた従来の研究に対して、「人生でよい方向に向かうことについて科学的に研究する学問」(ピーターソン、2010)であるポジティブ心理学の観点から、競技活動への主体的な関わり方などのポジティブな側面とバーンアウトの関係を検討した研究 (Lonsdale et al., 2007a; Lonsdale et al., 2007b; 石村ほか、2013) も見られる。中でも、ポジティブ心理学の中核を成す概念であるポジティブ感情 (Seligman and Csikszentmihalyi, 2000; レビューとして山崎、2006) は、バーンアウトの発症要因の一つであるネガティブ感情 (Cremades and Wiggins, 2008; Lemyre et al., 2006) による影響を低減するとされている (鈴木、2006)。加えて、適正なコーピング方略の選好や内発的動機づけの増強を促進させることが示唆されている (Fredrickson and Joiner, 2002; 磯貝、2012; 岡田、2008; 大塚ほか、2008; 吉田、1996)。そして、コーピング (「ストレス事態に対して何らかの対処を行うこと」; 玉瀬、2004) や、内発的動機づけ (「自律的で、何ら報酬がなくても生じること」; 深山、2013) は、いずれもバーンアウトの発症に対して抑制的に機能するとされる (Hill et al., 2010; HoImberg, 2011; 池本ほか、2013)。このように従来の研究アプローチとは異なる

る観点、すなわち、ポジティブ心理学の観点からバーンアウトの理解を試みることは、新奇性の高い知見の獲得および予防法の開発に繋がることが期待される。しかしながら、ポジティブ感情がバーンアウトに及ぼす影響を実証した研究は見当たらない。

以上のことから、本研究は大学生スポーツ選手を対象に、日常場面で経験するポジティブ感情が、スポーツ領域におけるバーンアウト傾向に及ぼす影響をネガティブ感情および問題焦点型コーピングに着目して明らかにすることを目的とした。

【結果の概要】

1) バーンアウト傾向の悪化に及ぼすポジティブ感情の抑制効果およびネガティブ感情の促進効果を確認するため、ポジティブ感情とネガティブ感情を独立変数、バーンアウト傾向を従属変数とする強制投入法を用いた重回帰分析を行った。その結果、バーンアウト傾向の悪化に対してポジティブ感情は抑制的に作用し、ネガティブ感情は促進的に作用することが示唆された。(第1章研究1)

2) ネガティブ感情による促進効果を抑えるポジティブ感情の緩衝効果を検討するため、ネガティブ感情を独立変数、ポジティブ感情を調整変数、運動選手のバーンアウト尺度により評価したバーンアウト傾向を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果、ネガティブ感情による促進効果を抑えるポジティブ感情の緩衝効果は確認されなかった。(第1章研究2)

3) ポジティブ感情が問題焦点型コーピングを介し、バーンアウト傾向に及ぼす影響について検討するために、ポジティブ感情を独立変数として、問題焦点型コーピングを媒介変数に、バーンアウト傾向を従属変数とする仮説モデルを設定し、そのモデルの妥当性および各要因が及ぼす影響を共分散構造分析により検証した。その結果、仮説モデルの各適合

度指標は採択基準を満たす良好な値であり、モデルの妥当性が確認された。さらに、ポジティブ感情は、バーンアウト傾向の悪化に直接的にも間接的にも影響を及ぼすことが確認された。(第2章研究3)

【まとめ】

本研究を通して、スポーツ領域におけるバーンアウト研究の発展に寄与する一定の示唆が得られた。

まず、ネガティブな側面に焦点を当てられてきた従来のバーンアウト研究とは異なり、ポジティブな側面に焦点を当てることによる現象の解明を試みた点が挙げられる。すなわち、スポーツ選手が日常的に経験するポジティブ感情は、バーンアウト傾向の悪化に対して抑制的な影響を及ぼすことを確認した。このことは、従来のネガティブな側面に着目してきた研究から得られた知見の補完、およびそこでは得ることができなかった知見の獲得に貢献できたと思われる。

さらに、ポジティブ感情の機能に着目したバーンアウトの予防法および対処法の確立に寄与する知見を得られた点が挙げられる。これまでに提示された予防法および対処法は、2次予防および3次予防の側面が強く、ネガティブな要因の対処やネガティブな状態からの脱却を目指すものが中心であった。そのため、心身の健康を増進させることで、バーンアウトの予防を目指す1次予防は見当たらない。しかし、ポジティブ感情は、バーンアウトの1次予防から3次予防として利用できる可能性があり、この先、ポジティブ感情がバーンアウト傾向に及ぼす影響がより詳細に検討されることで、非常に有用な予防法および対処法が確立する可能性が示唆された。(第3章)

【今後の課題】

1) 本研究は、一時点から得られたデータを基に分析されているため、ポジティブ感情とバーンアウト傾向間の因果関係の解明には至っておらず、構築されたポジティブ感情が問題焦点型コーピングを介して、バーンアウト傾向に影響を及ぼすといった因果

モデルを実証することが課題として残される。

2) ポジティブ感情は、問題焦点型コーピング以外にも、バーンアウト傾向の悪化を抑えることが期待される内発的動機づけや良好な対人関係を促進することが示唆されている(フレドリクソン、2010; 吉田、1996)。したがって、今後はこれらの媒介変数を組み込んだ因果モデルの検討を行う必要がある。

3) ポジティブ感情とバーンアウト傾向の関係は、選手の性格特徴や性別などの個人特性により異なることが推察されるため、今後はこれらの要因に着目して検討する必要がある。

大学体育における自己調整学習の機能—適応感に及ぼす影響—

須崎康臣（九州大学基幹教育院）

学位：博士（教育学）、授与機関：九州大学

取得日：2016年12月31日、指導教員：杉山佳生教授

【研究の背景と目的】

自己調整とは「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与している」（Zimmerman, 1986, 1989）ことであり、このような過程を通して行われる学習が自己調整学習である。自己調整学習は、特性的なものではなく文脈依存的なものであり（シャンク、2006）、習得可能なスキルである（ジーマーメン、2007）。そのため、わが国においては、特定の教科（犬塚、2012；岡田、2012；進藤、2012；植阪、2012）における自己調整学習の効果が検討され、有益な知見が提供されている。そして、体育授業に焦点を当てた自己調整学習の研究も行われている。

しかしながら、体育授業、特に大学体育授業を対象とした自己調整学習研究において、自己調整学習の重要な規定要因とされている自己効力感（Zimmerman, 1989）と自己調整学習との関連についての知見は少なく、また、体育授業における自己調整学習の心理社会的な機能についても、十分な検討がなされていないのが現状である。

ところで、大学生には、メンタルヘルスの悪化や、それに伴う休学、留年、退学といった学校生活への不適応問題を抱えている者が多い（内田ほか、2013）。このような状況において、大学生が充実した学校生活を送るための支援が重要である。この支援となるものの1つとして、体育授業が考えられる。体育授業には、授業内での学習活動や教師との関わりだけではなく、仲間との様々な相互作用が含まれている（佐々木、2003）。木内・橋本（2012）は、「体育授業を通じた健康的なライフスタイルの構築は良好な修学状況の基盤として機能し（学問的適応）、体育授業でのスポーツ活動を介した他者との関わりは友人関係の開始や発展（社会的適応）への貢献が期待される」とまとめている。つまり、体育授業は、対人関係を構築しながら、学習に取り組める場であ

ることから、体育授業を通して学校適応を促すことができると考えられる。

以上のことから、本研究では、大学の体育授業における自己調整学習の機能を、体育自己効力感、自己調整学習方略、体育適応感の関係性の検証、および、自己調整学習方略が体育適応感を介して学校適応感に及ぼす影響過程の検証から明らかにすることを目的とした。

【結果の概要】

1) 体育自己効力感、体育授業における自己調整学習方略、体育適応感の関係を、共分散構造分析を用いて検討した。その結果、体育自己効力感は、直接的に、および、自己調整学習方略を介して間接的に、体育適応感を規定しており、その規定力は、間接効果の方が高いことが確かめられた。（第1章研究1、第1章研究2、第1章研究3）

2) 体育授業における自己調整学習が学校適応感に及ぼす影響について検討するために、自己調整学習方略が、体育適応感を介して学校適応感に影響を及ぼすという仮説モデルを設定し、共分散構造分析を用いて、このモデルの検証を行った。その結果、自己調整学習方略は、体育適応感の両下位因子である「体育適応」と「連帯志向」に正の影響を及ぼしており、そのうち、「体育適応」は、学校適応感のすべての下位因子（「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼・受容感」、「劣等感の無さ」）に正の影響を及ぼしていることが確かめられた。いっぽう、「連帯志向」は、「被信頼・受容感」以外の下位因子に対して、正の規定力を有していることが明らかにされた。（第2章研究4）

【まとめ】

本研究を通して、体育授業における自己調整学習の機能と、学校適応感の向上に寄与する体育授業の

有効性について、一定の知見が得られた。

まず、体育自己効力感は、自己調整学習方略を介して、体育適応感に、直接効果よりも高い規定力で、影響を及ぼしていた。体育適応感の向上を促進するためには、体育授業に対する自信を高めることも必要ではあるが、それだけではなく、授業での行動である自己調整学習方略に関する知識を提供し、その使用を促すこともまた、有効である可能性が示唆された。

次に、自己調整学習方略、体育適応感、および、学校適応感との関連についての検討が行われた。その結果、自己調整学習方略が、体育適応感を介して、学校適応感に影響を及ぼしていることが明らかになった。このことは、大学生の学校適応感を高めるためには、体育授業での自己調整学習方略の使用を促し、体育適応感を高めることが重要であることを示唆している。このように、体育授業内での良好な対人関係の構築を目指すだけでなく、授業への積極的な取り組みを促す、すなわち、自己調整的な学習を促進させることが、学校適応感の向上をもたらす可能性が見出された。(第3章)

【今後の課題】

1) 本研究では、学校適応感に影響する要因として、体育授業における学習のあり方に焦点をあてた。しかし、学校への適応には、他の授業や課外活動、学外活動といった多くの要因が影響していると考えられる。今後は、これらも含めて包括的に、自己調整学習と学校適応感との関連を検討することが必要になる。

2) 本研究は、一時点のみの調査による横断的研究であるため、自己調整学習方略の使用が、体育適応感や学校適応感の変容にどのように寄与するかは検討されていない。今後は、縦断的研究を通して、適応感の変容過程について明らかにしていく必要がある。

3) 本研究では、仮説モデルの妥当性を検討するというアプローチで、自己調整学習の機能に関する知見を提示し、これらの活用可能性について言及する

ことはできたが、実際の活用にまでは至らなかった。今後は、介入研究を通して、本研究の知見の実践的有用性を示していく必要がある。

Influence of received social support on athletes' self-confidence and psychological well-being

片上絵梨子 (大阪体育大学)

学位：博士 (スポーツ科学), 授与機関：大阪体育大学

取得日：2017年3月17日, 指導教員：土屋裕陸教授

研究の背景

周囲の他者との良好な対人関係は、個人の身体的・心理的健康の維持・促進に関連する重要な要因の一つである。他者から提供される有形・無形の援助行動は、総称してソーシャルサポートと呼ばれ、個人の well-being に寄与すると認識されてきた。アスリートにとってのソーシャルサポートは、励ましや慰め (emotional support)、評価や承認 (esteem support)、助言や情報 (informational support)、金銭や物品 (tangible support) であると考えられている (Rees and Hardy, 2004)。指導者、チームメイト、友人、家族など重要な他者からのサポートが、ストレス緩和やバーンアウト抑制に役立つことが認められており (土屋、2012)、近年では、アスリートの well-being だけでなく、自信など実力発揮につながる心理的要因にも影響することが示されている (Holt and Hoar, 2006; Rees, 2007)。

Chapter 1 (序論)

これまでのソーシャルサポート研究の多くは、知覚サポート (必要となれば利用可能であるという個人の信念) の測定によって検討され、「自分にはサポートしてくれる人がいる」とアスリート本人が知覚することにより、メンタルヘルスが改善すると考えられてきた。しかしながら、知覚サポートはあくまでアスリート本人の知覚であることから、実際のサポート行動の有無を測定することが、ソーシャルサポートの効果を理解する上で不可欠であるという指摘もある (福岡、2007)。「励ましてくれる人がいる」と本人が知覚することである知覚サポートと「実際に励ましを受けること」である受領サポートを明確に区別し、ソーシャルサポートを理解するべきであるという指摘もある (Holt and Hoar, 2006)。このように、スポーツ場面におけるサポート行動の効果を検証するためには、アスリートの受領サポート (実際に他者によって実行され、受け手が経験した

サポート行動) を測定する必要があると考えられる。近年、このような受領サポートに着目したソーシャルサポート研究の必要性が指摘されているものの、受領サポートがアスリートの心理面に及ぼす影響については十分に検討されていない。ゆえに、実際のスポーツ現場の指導者やアスリートの間で十分に理解されないまま‘サポート’が提供され、その‘サポート’行動がアスリートにとってはサポートとして機能せず、「余計なお世話」として受け取られてしまう事例も報告されている (McKay et al., 2009)。サポート行動に関する理解が十分ではないことは、スポーツにおける対人関係がアスリートの well-being や競技における実力発揮に寄与しないどころか、その阻害要因にさえなり得ると考えられる。そこで本研究では、5つの研究を行い、サポート受領がアスリートの well-being および競技における自信に与える影響について、サポート有効性に影響し得る要因とともに検討明らかにすることを目的とした。

Chapter 2 (研究1)

研究1では、アスリートの受領サポートの実態把握を目的とし、大学生アスリート11名を対象に4週間のスポーツ場面におけるソーシャルサポート調査研究を行った。日誌法を用いて、アスリートのスポーツ場面における他者との対話記録を収集し、他者から受け取ったサポートとその時の心理的反応について内容分析法を用いて探索的に分類した。その結果、先行研究に一致して、アスリートは4種類のサポート行動を受領していることが確認された。また、サポート受領時の心理的反応を分類した結果、ポジティブな感情など well-being に関連する要因のみならず、モチベーションや競技の内省、自信など実力発揮に関連する要因も含まれていた。このことから、ソーシャルサポートを受け取ることは、アスリートの well-being だけでなく、実力発揮にも影響し得ることが確認された。

Chapter 3 (研究2)

研究2では、受領サポートの定量的な検討を行うため、尺度を作成することを目的とした。アスリートのサポート受領頻度を測定する尺度、the Athlete Received Support Questionnaire (the ARSQ; Freeman et al., 2014) の日本語版、the ARSQ-Jを作成し、その信頼性と妥当性を検討した。分析の結果、the ARSQ-Jは、原版 the ARSQ 同様に4因子構造を有するサポート受領の測定が可能な尺度であることが示された。また内的整合性や、関連する尺度との相関が示されたことから、一定の信頼性及び妥当性を有する尺度であることが確認された。

Chapter 4 (研究3)

研究3では、the ARSQ-Jを用いて、受領サポートと well-being の関連を検討した。相関分析の結果、サポートの種類ごとに特徴的な関連が示されたことから、サポートの種類によって異なる機能を持つと考えられる。また、受領サポートを独立変数、well-being を従属変数としてパス解析を行った結果、サポートを受けることがアスリートの well-being に寄与することが示された。

Chapter 5 (研究4)

受領サポートのさらなる効果を検証するため、競技における自信との関連を検討することを目的とした。スポーツ場面におけるソーシャルサポートの有効性は、その提供者や提供文脈(時期)などの要因により影響されることが指摘されている(Rees, 2007)。そこで、まず研究4では、サポート提供者(指導者とチームメイト)の要因を考慮して、サポート受領と競技における自信との関連について検討した。その結果、評価や承認である esteem support は提供者の別なく競技における自信に正の影響を与えることが示された。一方、物質の提供などである tangible support は、チームメイトから提供された場合には正の影響、指導者から提供された場合には負の影響が確認された。このことから、サポートの有効性は提供者により異なると考えられる。

Chapter 6 (研究5)

さらに研究5では、サポート提供文脈(通常期

と試合前期)にも着目し、サポート受領と競技における自信との関連を検討した。その結果、試合前期には助言や情報などの informational support や tangible support がアスリートの競技における自信に正の影響を及ぼすことが示された。研究4と同様に、提供者によりその関連は異なることが示され、試合前の informational support は、指導者から提供された場合には正の影響、チームメイトから提供された場合には負の影響が示された。一方、tangible support はチームメイトから提供された場合には正の影響、指導者から提供された場合には負の影響を及ぼすことが示された。

Chapter 7 (本研究の結論)

本論の目的は、アスリートが受領するソーシャルサポートについて実態調査を行い、サポートを受け取ることがアスリートの心理的側面に及ぼす影響について、サポート有効性に影響し得る要因とともに検討することであった。本研究の結果より、ソーシャルサポートはアスリートの well-being のみならず競技における自信にも影響することが確認された。一方、その関連はサポートの種類、提供者、時期によって異なることが示唆されたことから、ソーシャルサポートは一律にアスリートの心理的側面に正の影響を及ぼすものではなく、その種類や受領される文脈によっては負の影響を及ぼす可能性があるといえる。終わりに

これまで研究を進めるにあたり、研究会等でご指導・ご助言頂きました菅生貴之先生、手塚洋介先生、小菅萌先生をはじめとする先生方、スポーツ現場に携わる貴重な機会をいただきました本学男子体操競技部監督、藤原敏行先生に感謝申し上げます。そして、今年度同じく博士後期課程を修了された清水聖志人さん、陳昱龍さんを中心とする研究室の仲間からの暖かいソーシャルサポート支えられたことをここに述べたいと思います。最後に、副査としてご指導いただきました荒木雅信先生、前島悦子先生、主査として研究・サポート実践の視点から3年間ご指導いただきました土屋裕睦先生に心より御礼申し上げます。

Risk-sensitive decision making in motor tasks with an asymmetric gain function (非対称な利得関数を持つ運動課題におけるリスク感受的な意思決定)

太田啓示 (日本学術振興会特別研究員 (PD)、東京農工大学)

学位: 博士 (学術), 授与機関: 東京大学

取得日: 2017年3月23日, 指導教員: 工藤和俊准教授

多くのスポーツではエースとミスが隣り合わせであるという特徴をもつ。例えば、テニスや卓球などの競技では、ライン際を狙ってボールを打った場合、コート内に入れば得点の可能性は高くなる。しかし、ボールが少しでもラインを超えるとアウトになるため、失点のリスクも高くなる。このような状況におけるボール落下点の最適な狙い所はプレイヤーの落下点分散に依存する。すなわち、相対的にばらつきの小さいプレイヤーであればライン寄りの位置を狙うのが良いが、ばらつきの大きいプレイヤーが同じ位置を狙うと失敗の確率が増大しパフォーマンスが低下してしまう。従って、このような運動課題では、自らの運動遂行時の分散を考慮した上でどの位置を目標として選択するかという意思決定がパフォーマンスにとって重要な意味を持つ。そこで本論文では、このような状況下におけるヒトの運動意思決定特性について検討することを目的とした。

本論文の構成は7章からなる。第1章では、行動経済学における意思決定研究を概観し、意思決定におけるリスク感受性を定量化する数理的モデルについて説明した。

第2章では、利得関数の形状と意思決定方略との関係性を検討した。本章ではタイミング選択課題を用いた。この課題では、光刺激提示後に行うキー押し反応の時間によって、獲得できる利得が決められた。非対称な利得関数条件では、反応時間が参照時間となる2300msに近づくほど利得が高くなるが、参照時間を越えると0点(失敗)となった。参照時間のちょうどに反応できた時、最大利得(100点)が得られた。実験参加者は、100試行の総得点をできる限り高めるためにいつ反応するかという意思決定が求められた。このとき、ベイズ決定理論を用いて個人内における反応時間の分散から個人ごとの最適な平均反応時間を算出した。さらに、個人ごとに

実際に観察された平均反応時間と比較することで、リスク感受性を定量化した。このリスク感受性は、1) リスクを取り過ぎて失敗が多くなるリスク志向、2) リスクを避けすぎて期待利得が低下するリスク回避、3) 期待利得が最大化できるリスク中立に分類される。実験の結果、参加者の平均反応時間は最適平均反応時間よりも参照時間の近くに位置し、大半の参加者においてリスク志向的となることが明らかとなった。

第3章では、この傾向がタイミング選択課題に特異的か否かを検討した。その結果、ゴルフパッティング課題においても同様の傾向を確認できたことから、非対称な利得関数の下では、時間的か空間的かという運動課題の種類に関わらず、ヒトの運動意思決定はリスク中立からの解離を示すことが明らかとなった。

第4章では、繰り返しの練習によりリスク中立的方略が獲得されるのかを検討した。実験参加者は第1章で用いたタイミング選択課題を9日間、計2250試行実施した。実験の結果、1日目から4日目にかけて、反応時間の分散は徐々に低下し、それに伴い総得点も向上した。しかしながら、1日目にリスク志向的もしくはリスク回避的となった参加者は9日目にも同じリスク感受性を示し、この傾向は個人内では頑健で9日間の練習では改善されにくい性質を持つことが明らかとなった。すなわち、反応の分散が減少するという点での学習は認められたが、適切に狙えるようになるという点での学習は必ずしも参加者全員に認められないことが明らかとなった。

自身の分散に適した狙い場所の学習が困難な理由として、毎回の運動結果を基に、自分自身の運動遂行時の分散を正確に把握することが難しいためという仮説が考えられる。そこで第5章では、自身の運

動分散に関する情報が与えられることにより、リスク感受性が変化するかを検討した。本章では、非対称な利得関数を伴う腕の伸展課題を用い、各ブロックの終了毎にそのブロック内全試行分の到達点を提示した。実験の結果、到達点分布のフィードバックがない実験条件群では、リスク感受性が維持され、第4章と同様の結果となった。一方で、到達点分布のフィードバックがある条件群においても、少数の参加者を除きリスク感受性は維持されることが明らかとなった。この結果は、自分自身の運動分散を正確に推定するための記憶容量の限界よりも、適切な狙い場所を算出するための計算容量の限界が、狙い場所の学習を妨げる要因となっていることを示唆している。

第6章では、リスク感受性に関与する脳領域を検討した。神経経済学における先行研究では、右側の背外側部前頭前皮質が衝動的行動を抑制することが報告されている。そこで、本章では脳機能を非侵襲的に修飾する経頭外直流刺激を用いて、リスク感受性を修飾されるか否かを検討した。1) 右側の背外側部前頭前皮質の興奮性が增強される刺激条件(右側に陽極・左側に陰極刺激)と2) 偽の刺激を受ける条件を設け、同一の参加者が1週毎に2つの刺激条件にてタイミング選択課題を実施した。実験の結果、偽の刺激条件では、刺激によってリスク感受性は変化しなかったが、右側前頭前皮質の興奮性が增強される条件では、刺激前に比べ刺激中にリスク感受性は低下し、平均的な反応時間も参照時間より早くなる傾向が確認できた。この結果は直流刺激により狙い場所の設定をリスクを避ける方向へと移行させたことを意味し、背外側部前頭前皮質が運動意思決定におけるリスク感受性に関与する可能性を示唆している。

第7章では、以上5つの実験結果をもとに総合論議を行った。本論文は、非対称な利得関数を伴う運動課題において、ヒトはリスク感受性に関わる認知バイアスを有し、そのバイアスを変化させるためには繰り返しの練習や運動遂行時の分散に関するフィードバックだけでは不十分であることを示すと

同時に、前頭前野背外側部の興奮性水準を修飾することでリスク感受性を変化させることが可能であることを示した。これらの研究結果は、適切な運動目標をいかに設定するかという要因が運動スキル学習の大きな制約となっていることを明らかにしたものである。今後はこの制約を克服する方法を検討することによりスポーツ・運動の学習時の指導方法の開発に貢献できると期待できる。

なお、本論文の研究成果の一部は以下の学術雑誌に掲載されている。

Ota, K., Shinya, M., & Kudo, K. (2015) . Motor planning under temporal uncertainty is suboptimal when the gain function is asymmetric. *Frontiers in Computational Neuroscience*, 9: 88.

Ota, K., Shinya, M., & Kudo, K. (2016) . Suboptimality in motor planning is retained throughout 9 days practice of 2250 trials. *Scientific Reports*. 6: 37181.

太田啓示・森岡祐平・進矢正宏・工藤和俊. (2017). リスク下におけるゴルフパッティング距離調整. *東京体育学研究*, 8, 5-12.

スポーツ競技者の心理的健康と実力発揮におけるマインドフルネスの役割

雨宮 怜 (筑波大学体育系)

学位：博士 (体育科学)、授与機関：筑波大学

取得日：2017年3月24日、指導教員：坂入洋右教授

スポーツ競技者の心理的健康の問題は、パフォーマンス低下や競技からのドロップアウト、また最悪の場合には自殺をも導くことが報告されている。そのため、スポーツ競技者の心理的問題に対して、効果的な心理サポートの実践が求められるが、心理サポートの効果と現場のニーズとのズレや、スポーツ界と心理サポートの構造の不一致が、スポーツ競技者の心理サポートへの繋がりにくさを生み出す障壁となっている。このような課題を解決するためには、スポーツ界が求めるパフォーマンス面への効果を実現しながら、心理的問題の予防や改善を可能とする、新しい心理サポート法の開発・実践が喫緊の課題となっている。

そこで本論文では、健康と実力発揮の両方を可能とすることが期待される、マインドフルネス (今の体験に気づき、価値判断せずに観察し、注意を向ける心理的スキル：自己客観視スキル) のプログラムを実践するための、基礎的な知見を構築することを目的とした。

本論文は9章から構成されており、第1章では、現在のスポーツ競技者に対する心理サポート法の効果および課題に加えて、競技スポーツという文化や環境と関連して生じる心理的健康の問題である、バーンアウトやアレキシサイミア傾向に注目し、健康と実力発揮の両方を実現する支援として、マインドフルネスのプログラムについて概説した。第2章では、本研究の目的および構成について整理を行った。第3章から第5章までは、本研究で扱うバーンアウト、アレキシサイミア傾向およびマインドフルネスを測定することが可能な心理指標の開発を行った。次に第6章から第8章において、スポーツ競技者のマインドフルネスと心理的健康および実力発揮との関係性について、横断的、縦断的調査を用いて量的な変数間のモデルを検討し、その量的な結果を基に質的研究を行うことによって、量的・質的な観

点からスポーツ競技者のマインドフルネスの役割について検討を行った。第9章において、本論文の総括および今後の示唆と課題について説明を行った。以下に、各章の研究課題における要約を示す。

第3章 (研究1) では、スポーツ競技者版バーンアウト尺度 (Burnout Scale for University Athlete : 以下、BOSA と記述) の開発を目的とし、尺度の因子構造および内的整合性と構成概念妥当性について検討を行った。分析の結果、4下位尺度で構成され、信頼性と妥当性を有するBOSAが開発された。

第4章 (研究2) として、スポーツ競技者のバーンアウトを引き起こす要因として予想されるアレキシサイミア傾向を測定するための心理指標の開発 (Sport Alexithymia Scale : 以下、SAS と記述) および、バーンアウトとの関連性について検討を行った。分析の結果、3下位尺度から構成され、信頼性と妥当性を有するSASが開発され、スポーツ競技者のアレキシサイミア傾向がバーンアウトを予測することが確認された。

第5章 (研究3) では、スポーツ競技者版マインドフルネス傾向尺度 (Athlete Mindfulness Questionnaire : 以下、AMQ と記述) の開発を目的として、横断的、また縦断的な調査研究を行った。分析の結果、4下位尺度で構成され、信頼性と妥当性を有するAMQが開発され、尺度の信頼性および妥当性が確認された。

第6章 (研究4) では、スポーツ競技者のマインドフルネスとアレキシサイミア傾向およびバーンアウトの関連性について、横断的に検討することを目的とした。構造方程式モデリングによる3変数間の関連性について検討した結果、モデルの有用性が確認された。またスポーツ競技者のマインドフルネスが直接的にアレキシサイミア傾向とバーンアウトに対して負の関連性を示したとともに、アレキシサイミア傾向を介してバーンアウトに負の関連性を示

すという間接効果も確認された。

第7章(研究5)では、スポーツ競技者のマインドフルネスとパフォーマンスとの関係性について検討するために、自己および他者評価という主観的・客観的な観点からの測定による、パフォーマンス低下とパフォーマンス・エフィカシー(以下、パフォーマンスEFと記述)という二つの指標をもとに、横断的・縦断的に検討を行った。分析の結果、パフォーマンス低下については、マインドフルネスが高い方が低い対象者と比較して、自己評価では横断的、また2ヶ月後と4ヶ月後において、パフォーマンス低下が少ないことが示された。さらに、マインドフルネスが高いスポーツ競技者では、各調査時点において自己評価と他者評価の得点間には有意な差が見られないものの、マインドフルネスが低いスポーツ競技者においては、各調査時点において、他者評価の得点が自己評価よりも有意に低いことが確認された。また、心理的パフォーマンスEFについても、自己と他者評価にかかわらずマインドフルネスが高いことによって、横断・縦断的に心理的パフォーマンスEFの得点も高いことが確認された。そのため、スポーツ競技者のマインドフルネスの高さが、他者から見たように自身のパフォーマンスを評価することを可能とし、将来のパフォーマンス低下の抑制や、パフォーマンスEFの促進に寄与することが明らかとなった。

第8章(研究6)では、スポーツ競技者のマインドフルネスが将来のメンタルヘルスとパフォーマンスに対して、どのように機能するのかという点について、縦断的な量的調査による変数間のモデルの検討および、モデルの質的な解釈を行った。分析の結果、スポーツ競技者のマインドフルネスが直接的に2ヶ月後のアレキシサイミア傾向や4ヶ月後のバーンアウト、個人の評価による主観的な心理的パフォーマンスEFと有意な関連性を示すことが明らかとなった。また、2ヶ月後のアレキシサイミア傾向を介して間接的に4ヶ月後のバーンアウトと負の関連性を示すことが確認された。しかしながら、4ヶ月後の他者評価による心理的パフォーマンスEF

は、マインドフルネスが直接的な関連性を示さず、4ヶ月後のバーンアウトを介して間接的に関連することが明らかとなった。また、量的研究によって示された変数間の関係性について、統合研究法を用いて、半構造化面接法による質的な解釈を試みた。その、マインドフルネスが高いスポーツ競技者は、自身の感情や身体感覚を認識することでモチベーションの認識や状態を省みた対処行動に繋げること、パフォーマンスに価値判断せずに目の前の課題に集中することが明らかとなった。

以上、本論文において、スポーツ競技者のマインドフルネスにおけるアレキシサイミア傾向およびバーンアウトという心理的健康の問題と、パフォーマンスとの関連性について検討した。まず本研究の結果から、信頼性と妥当性を有するスポーツ競技者のバーンアウト尺度(第3章)、アレキシサイミア傾向尺度(第4章)およびマインドフルネス尺度(第5章)が開発された。その尺度を基に変数間の関連性について検討した結果、マインドフルネスが、将来のメンタルヘルスの問題の抑制や、自己・他者評価によるパフォーマンスを予測することが明らかとなった(第6章—第8章)。そのため本研究の結果から、スポーツ競技者のマインドフルネスが心理的健康の問題の予防や改善に加えて、実力発揮を導くことが推測された。今後、実験的な研究や介入研究を実施し、スポーツ競技者へのマインドフルネス・プログラムの効果について、検討が求められる。

剣道の面技における目付けの解明 — 剣道最高段位者と大学生競技者による検証 —

秋山大輔（日本経済大学）

学位：博士（学術）、授与機関：九州工業大学

取得日：2017年3月24日、指導教員：磯貝浩久准教授

本論文は、剣道の実際の打突動作において、相手のどこを見ているのかという注視点の位置から検討した視線配置と、相手に対して奥行きを持って見ているのかという注視点距離から検討した目付け方略を明らかにし、剣道の打突動作の中で最も重要な打突である面技打突時の目付けを解明することを目的とした。また、本研究から得られた知見を基に剣道における体系的な目付け指導法のための基礎データ構築を目指した。

第1章では、剣道における視覚に関する研究のレビューおよび剣道の技能や目付けの教えを概括し、関係するスポーツの先行研究をレビューしながら本研究の位置付けを示した。特に、剣道において古くから伝わる目付けに関する教えを文献から整理し、現代剣道の指導法を踏まえ問題の所在を論じた。また、人間の眼球運動、スポーツにおける視覚研究を展望し、中心視のみならず周辺視の役割が大きく、その機能特性に着目した研究の必要性が求められているため、剣道の打突動作の目付けを定量的に評価することの意義を示した。

第2章では、大学生剣道競技者の面技において、注視点のどこにあるのかという視線配置の特徴を検討した。眼球運動測定実験を実施し、目付けに関する教えに基づいて、相手身体を三領域に区分して注視割合を算出した。三領域の注視領域割合を比較した結果、しかけ面と出ばな面では相違した視線配置がなされていることが示唆された。しかけ面において、中部への視線配置割合が高くなった要因は、相手との間合いの意識から竹刀を注視した結果と考えられたが、出ばな面においては中部の視線配置割合は低くなった。この変化に関し、大学生競技者は、相手の動きに対応しなければならない出ばな面において、竹刀を注視しては動作の遅れが生じることを認識しており、中部に視線を配置するこ

とよりも上部に視線を配置し、その視線を視支点として活用し、周辺視から相手の動きに関する情報を得ることが効率的だと考えていることが推察された。しかし、両実験課題での相違した結果から、不安定な再現性の低い視線配置が行われていることが示唆された。

第3章では、最高段位者の面技において、注視点のどこにあるのかという視線配置の特徴を検討した。第2章と同様に三領域の注視領域割合を比較した結果、しかけ面と出ばな面の両課題において同じ視線配置がなされていることが示唆された。視線は全て上部の領域に配置され、中部及び下部には一切視線が配置されることは無かった。常に上部に視線を配置し、その視線を視支点として活用していることが示唆され、安定した再現性の高い視線配置が行われていることが明らかとなった。また、大学生競技者と比較した結果、特にしかけ面の注視領域割合に有意差が認められ、最高段位者と大学生競技者の視線配置の違いが顕著に認められた。最高段位者は実験課題の種類に限らず同様の視線配置を行っていることが明らかとなり、常に一定の視線配置をすることが重要であると意識していると推察される。また、インタビュー調査の回答からもそのような回答が得られた。インタビュー調査の回答においては、最高段位者は周辺視から相手の足部（右足のつま先）の情報を得るように注意していることから、最高段位者は大学生競技者より広い有効視野で相手の情報を得ている可能性が示唆された。

第4章では、大学生競技者の面技において、注視点の奥行きである注視点距離を明らかにし、有効打突判定結果から注視点距離が有効打突に及ぼす影響を検討した。しかけ面と出ばな面の両課題の有効打突判定の結果、しかけ面においては全て有効打突となったが、出ばな面においては有効打突と認められ

ない打突があった。出ばな面の成功率により、高成功群と低成功群の2群で比較した結果、高成功群は低成功群より注視点距離が長く、周辺視を活用した効果的な目付けを行っていることが示唆され、注視点距離が出ばな技の有効打突の成功率に影響を及ぼすことが示唆された。つまり、注視点距離が長く、奥行きを持たせることでより相手の情報を獲得するために周辺視を活用していると推察された。

第5章では、最高段位者の面技において、注視点の奥行きである注視点距離を明らかにし、有効打突判定結果から注視点距離が有効打突に及ぼす影響を検討した。その結果、しかけ面と出ばな面の全ての打突が有効打突と判定された。また、しかけ面と出ばな面の両課題において差のない注視点距離の結果が得られ、およそ5m程度、相手より遠くを見ていることが示唆された。この結果においては、インタビュー回答結果にもあるように、遙か遠くを見ている訳ではないといった回答や少しぼんやり見るといった回答にあるように自分の感覚と一致する結果が得られた。最高段位者の熟練度を考慮すると注視点距離の5mという距離は一つの基礎データとして考えることができ、目付けの指導法における基準値となりうる可能性が示唆された。

これまでの剣道の歴史の中で多くの教えが存在し、指導現場において用いられ、技能向上の道標として伝わってきた。剣道では目付けが重要とされ、目付けに関する教えは現代剣道に生かされているが、感覚的な表現が多く、抽象的な語彙は理解しづらいものであった。本研究では注視点の位置と距離から剣道熟練者の視覚スキルを定量化し、可視化することを試み、指導に生かすための知見を得ることを目指した。特に、希少な被験者である最高段位者を採用できたことにより、剣士が目指すべき達人スキルを得ることができたと考えられる。以上から、剣道における代表的な視覚情報獲得方略である「遠山の目付け」の存在が明らかとなり、有用性が示唆された。これは、剣道実践者の稽古や試合および指導の現場において活用されることが期待できる。

ソフトテニスにおける自信に関する研究 —スポーツコンフィデンス、自己効力感および他者効力感に着目して—

佐久間智央（日本大学）

学位：博士（学術）、授与機関：九州工業大学

取得日：2017年3月24日、指導教員：磯貝浩久准教授

1. 本研究の概要

本研究では、日本国内のソフトテニス選手を対象に、スポーツコンフィデンスとその情報源との関係性、スポーツコンフィデンスと自己効力感および他者効力感の関係性、自己効力感および他者効力感とパフォーマンスとの関係性を検討し、それぞれの関係性を考慮しながら、ソフトテニスにおける自信とパフォーマンス発揮との関係性を検討することを目的とした。また、これらの関係性の検討に伴い、それらの要因を測定する評価方法を確立することも目的とした。

第2章では、ソフトテニス選手426名を対象に、ソフトテニス選手の自信を評価するソフトテニス版スポーツコンフィデンス尺度（Sport Confidence Inventory of Soft Tennis 以下SCI-ST尺度）を作成し、その構成要素を検討することであった。また、開発したSCI-ST尺度を用いて、ソフトテニス選手の自信と性差、競技レベル差、競技経験年数との関係性を検討した。

第3章では、高校生ソフトテニス選手を対象として、スポーツコンフィデンスの情報源を測定するためのソフトテニス版スポーツコンフィデンスの情報源尺度を作成し、ソフトテニスにおけるスポーツコンフィデンスにその情報源がどのように影響を及ぼすかについて検討することを目的とした。

第4章では、高校生ソフトテニス選手280名を対象に、まず、ソフトテニスの各スキル自己効力感および他者効力感尺度、心理的パフォーマンス他者効力感尺度を作成した。そして、作成した3つの尺度と心理的パフォーマンス自己効力感尺度を含めた4つの特徴および関係性を検討した。

第5章では、ソフトテニス版スポーツコンフィデンス尺度、ソフトテニスのスキルに対する自己効力感尺度および他者効力感尺度、心理的パフォーマンス

に対する他者効力感尺度、そして、心理的パフォーマンス自己効力感尺度を用いて、パーソナル特性的な自信であるスポーツコンフィデンスと、その場の状況に影響を受けやすい状態的な自信である自己効力感および他者効力感との関係性を検討することを目的とした。

2. 本研究からの示唆と展望

本研究は、ソフトテニスにおける自信の獲得からパフォーマンス発揮までのプロセスを明らかにした。日本において、特性的な自信であると考えられるスポーツコンフィデンスと状態的な自信であると考えられる自己効力感の両者を扱った研究が今まで行われなかったことから、スポーツの自信に関する研究を進めるための有益な知見となりうる。ソフトテニスにおける特性的な自信であるスポーツコンフィデンスの構成要素を明らかにしたことにより、試合や練習でのパフォーマンスの結果に左右されにくい自信を検討することができたと考える。また、そのスポーツコンフィデンスに影響を与える情報源は、性差、競技レベル、チーム内でのポジション（レギュラー／非レギュラー）によって、異なることが明らかとなったことから、ソフトテニス選手のスポーツコンフィデンスを高めるためには、性別、競技レベル、そしてチーム内でのポジション（レギュラー／非レギュラー）といった属性を考慮し、情報源を与えるといった指導者の工夫が必要であるといえよう。例えば、性別の視点からより効率的にスポーツコンフィデンスを高めるためには、男子選手・女子選手ともに、環境や身体の心地よさを感じさせることや、課題達成の成功体験を与えることが有効であると考えられる。男子選手の場合は、単に成功体験をさせるだけでなく、練習や試合においてライバルを設定し、競わせることも有効であると考えられ

る。競技レベルの視点からより効率的にスポーツコンフィデンスを高めるためには、地区大会レベルの選手の場合は、指導者が積極的に指導やアドバイスを行うことや、課題の達成といった成功体験を多く経験することが有効であると考えられる。また、県大会レベル、地方・全国大会レベルの選手の場合は、環境や身体の心地よさを感じさせることや、課題達成の成功体験を与えること、そして、練習や試合においてライバルを設定し、競わせることによる成功体験を積ませることも有効であると考えられる。チーム内のポジションの視点からより効率的にスポーツコンフィデンスを高めるためには、レギュラー選手の場合は、練習や試合においてライバルを設定し、成功体験を積ませることや、環境や身体の心地よさを感じさせること、そして課題達成の成功体験を与えることが有効であると考えられる。一方、非レギュラー選手の場合は、指導者が積極的に指導やアドバイスを行うことや、課題の達成といった成功体験を多く経験することが有効であると考えられる。

そして、本研究では、他者効力感についても検討を行った。これまで、パフォーマンス発揮に影響を与える要因としては、自分がどの程度できるかという自己効力感に着目されてきたが、特定のパートナーと行うスポーツにおいて、自分のパートナーがどの程度やってくれるかといった他者効力感が勝敗に影響を与えていることが明らかとなったことから、自分に対する信念に加え、パートナーに対する信念も重要であるということが示唆された。したがって、今後の指導現場への示唆として、自分に対する効力感を持たせる指導に加え、パートナーに対する効力感も高める指導が求められるであろう。例えば、ペアで行う課題を設定し、ペアでの成功体験を多く積ませる指導や、試合において、ペア2人の力でポイントを決められた、勝つことができたというフィードバックを積極的に与えることが有効であると考えられる。また、今回作成した尺度を用いることで、パートナーに対する効力感を把握することが可能となるため、ペアの向上・改善や、より良いペ

アリングの検討する際の有効なツールとなるであろう。

本研究において、ソフトテニスにおける自信とパフォーマンス発揮との関係性を明らかにしたことにより、今後のスポーツにおける自信に関する研究を行う上で、新たな知見が示されたと考えられる。

しかしながら、スポーツコンフィデンスや自己効力感および他者効力感を高く持つことによるマイナスな要因も考慮する必要がある。例えば、選手が自分の能力に見合わないスポーツコンフィデンスや自己効力感を高く持ちすぎることである。ビーリー(2009)は、自信過剰について、選手の実際の能力と能力における信念が一致していない状態のことでありと指摘している。したがって、選手に正しい自信を持たせるためには、自分の実際の能力を正しく認識させることが重要となるであろう。また、他者効力感においても高く持ちすぎることにより、パートナーへの依存性が強まり、プレーが消極的になり、自分のパフォーマンスを発揮できなくなる可能性も考えられる。したがって、ペアとしてのパフォーマンスを発揮するための自己効力感と他者効力感のバランスについても検討していくことが重要であろう。

運動部活動における状況適応型リーダーシップの研究－SL理論の視座を援用して－

神力亮太（九州工業大学生命体工学研究科博士研究員）

学位：博士（学術）、授与機関：九州工業大学

取得日：平成29年3月24日、指導教員：磯貝浩久准教授

論文概要

本研究は、SL理論（Situational Leadership Theory）の視座を援用して運動部活動における指導者の効果的なリーダーシップについて検討している。SL理論は、1977年にP. HerseyとK. H. Blanchardによって提唱されたフォロワーのレディネスに応じたリーダーシップ行動が適切であるという理論である。運動部活動は、重要な存在である指導者（杉山、2008；角谷・無藤、2001）の指導の下、生徒への様々な意義や効果をもたらすとされている（文部科学省、2013）。しかし、指導者には暴力やハラスメント（熊安、2014；国際オリンピック委員会、2007）、時間や指導力の不足（文部科学省、1996；日本体育協会、2014）、多様性への対応（仲澤、2011）などの問題が指摘されている。そこで、本研究ではあらゆる分野で注目されているリーダーシップ理論の一つである状況適応型アプローチの一つであるSL理論（Situational Leadership理論）に着目した。SL理論は、1977年にP. HerseyとK. H. Blanchardによって提唱されたフォロワーのレディネスに応じたリーダーシップ行動が適切であるという理論である。レディネスとは特定の課題に対する「意欲」と「能力」の程度であり、それぞれの高低から4つのレディネスレベルに分類される。SL理論に着目した根拠としては、リーダーシップの理論モデルとして、レディネスレベルの向上に伴って、フォロワーの自主性の成長を念頭に置いていることが挙げられる。その点が運動部活動の意義と合致していることから、SL理論の視座を援用したリーダーシップについて検討する。また、指導者が影響を与えるべき要因としては「選手に認知されたコーチング効果（Perceived Coaching Effectiveness：PCE）」（Kavussanu et al., 2008）の4つの側面（モチベーションPCE、戦術PCE、テクニックPCE、人間形成PCE）とした。すなわち、本研究では、選手のレディ

ネスに応じて、選手に認知されたコーチング効果の各側面への効果的なリーダーシップ行動を明らかにすることを目的とした。本論文は全5章から構成される。

第1章は序論であり、運動部活動の意義とその指導者の重要性や問題点についてまとめ、運動部活動における指導者のリーダーシップの重要性を示した。また、リーダーシップ研究の概観をした後、運動部活動とSL理論の関連を示し、指導者が影響を与えるべき側面について検討した。また、本研究では、SL理論におけるレディネスの課題を「サッカーの運動部活動」とすることを述べた。さらに、我が国における代表的な行動アプローチの一つであるPM理論と本研究で着眼したSL理論の類似性について示した後、本研究の意義や目的について整理した。

第2章では、選手の特徴（チーム内の地位、学年、所属リーグ）に応じて効果的なリーダーシップ行動が異なるかを検討した。そのため、「選手に認知されたコーチング効果」を評価する指標の信頼性および妥当性を確認し、スポーツ場面におけるリーダーシップ行動を評価する指標（スポーツ版PM評定尺度）を作成した。また、「選手に認知されたコーチング効果」の各側面とリーダーシップ行動との関連を検討した結果、いかなる選手の特徴においても指示的行動と協働的行動を実施するリーダーシップが効果的であることがわかった。すなわち、選手の特徴では状況適応的なリーダーシップ行動とはならなかった。

第3章では、SL理論におけるレディネスを評価する指標について検討した。「意欲」の指標は「運動部活動に対する生徒の内発的動機づけ」（松井、2014）を使用し、「能力」の指標は「サッカー能力測定尺度」を新たに作成した。大学のサッカー運動部活動生を対象として、これらの評価指標からクラスター分析を行うことでレディネスを分類し、ス

スポーツ場面におけるレディネスについて確認した。

第4章では、「選手に認知されたコーチング効果」の各側面に対して、レディネスに応じて効果的なリーダーシップが異なるかを検討した。中学から大学のサッカー運動部活動生を対象として、第3章と同様の手続きによってレディネスを分類し、レディネスレベルごとにリーダーシップ行動を説明変数、「選手に認知されたコーチング効果」の各側面を従属変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、戦略PCEやテクニクPCEでは、ほとんどのレディネスレベルにおいて指示的なリーダーシップ行動が影響し、モチベーションPCEや人間形成PCEでは、レディネスレベルの向上に伴って、指示的なリーダーシップ行動から協力的なリーダーシップ行動へと影響するリーダーシップ行動が変容していた。すなわち、戦略やテクニクという競技力に関わる側面には指示的なリーダーシップ行動が効果的であり、モチベーションや人間形成という汎用性のある側面には選手のレディネスに応じたリーダーシップ行動が効果的であることが明らかとなった。

第5章は総括であり、本研究で得られた結果（コーチング効果の評価指標の確認、スポーツ版PM評定尺度の作成、サッカー能力測定尺度の作成、レディネスの評価と分類、レディネスレベルに応じたコーチング効果とリーダーシップ行動との関連）について整理し、総合的な考察、本研究からの示唆と今後の課題について述べた。

V. 海外情報

海外情報

中本浩揮（鹿屋体育大学）

現在、所属大学から1年間（2016年10月－2017年9月）の長期研修の機会をいただき、オランダのアムステルダム自由大学（Vrije Universiteit Amsterdam）に訪問研究員として滞在している。大学がある場所はアムステルダムではあるが、周囲にはテレビでよく見るレンガ造りの建物や運河はほとんど見当たらない。ただ、自転車で10分ほどいけばいわゆるヨーロッパ感満載のすばらしい景色が広がる。大学創立は17世紀と聞いたが、現在の大学の建物はすべて近代的で、比較的狭いキャンパスに10程度の学部が存在し、25000人もが所属している。

オランダでは、大学進学率が極めて低く（ほとんどが職業訓練学校に進学）、そのためか大学生のレベルは非常に高い。大学院にはオランダ以外の国の学生も多数在籍しており（学部も含めて10%程度）、授業は英語で行われる。個人的におもしろかったのは、Excelが全く使えない代わりに、Matlabのプログラミングを完璧に使いこなす奇妙な院生達である。私が所属しているBehavioural and Movement Sciencesの教員は、NatureやScienceに論文掲載歴のある研究者、年数十本の論文を書きあげる研究者が多数在籍しており非常にレベルが高いが、それでも土日（金曜も含む）に仕事したり、18時以降に仕事している人はほとんどいない（家で隠れて一生懸命やっていると信じて）。

身分不相応なこの大学を選んだ理由は、David L Mann氏の下で勉強してみたいと思ったことがきっかけである。Mann氏は主に打球運動の視知覚を研究対象とし、熟練者の視線行動や予測メカニズムに関する研究を行っている。また熟達化やタレント発掘に関する実践研究も行っている。もともと彼の論文がおもしろいと思っていたことが大きいですが、以前、論文投稿した際、とても波長の合うレビューコメントを貰ったことが決め手となり（最終的にはリジェクトされたが）、数年前から打診し、今回の研修を

機に受け入れてもらうことができた。

所属している学科は、最先端の装置が揃った最先端の研究環境というわけではない。その代わりに、テクニシャンが7名いて、教員や院生の要望にあわせイメージ通りの大掛かりな実験装置を作ってくれる。日本では実験に合う装置を思い描いても業者にとんでもない金額を要求されてあきらめることがあるし、それが制約でイメージが乏しくなることがある。それが無いこの環境は研究者にとって大きなアドバンテージだと感じた。実際、実験参加者として様々な実験を体験させてもらっているが、仮説にあわせて見事にカスタマイズされたユニークな装置で実験している。

今回の長期研修では、知覚をメインにした運動学習や制御の基礎研究を学ぶことに加え、応用研究（現場への還元）を学ぶことも大きな目的であった。所属学科の中にはいくつかの研究グループがあり、私は応用研究が最も盛んな運動学習とパフォーマンスグループに参加している。ミーティングは隔週で行われ、基礎研究の目線でみれば成立しないと感じる実験デザインの成果が数多く報告される。ただ100%現場優先の中で研究デザインするので、出てくる知見は、積み上げられた基礎研究が本当に現場で応用できるのかという「答え」のような印象を受ける。例えば、運動学習・制御研究では、インターナルフォーカスは悪、エクスターナルフォーカスは善という「定説」がある。しかし、院生の報告では、野球の投手の指導に3ヶ月適用したところ、むしろインターナルフォーカスの方が有効であった。この結果は、基礎研究の積み上げによって「定説」が見つかった時ほどのインパクトはないが、現場にとっては「答え」である。もちろん、この一つの証拠をもってして定説が間違いであったことを示しているなどと言う気は毛頭無いが、現場に入り込んで行う応用研究の重要性を強く感じた。また、基礎研究グループと応用研究グループが一緒に仕事をしている

ため、お互いが監視役になり、飛躍した主張になりにくいのも良い環境だと感じた。

オランダの大学で特徴的なのは、博士課程の学生は全て給与を貰いながら教員の研究プロジェクトに雇用されている点である。教員は企業やスポーツクラブ・連盟などから研究依頼を受け、その研究費で博士学生を雇用する。そのため、研究費が無ければ博士学生を採ることはできない。例えば、Mann氏は、国際パラリンピック連盟のクラス分けに関する研究開発センター（IPC Classification Research and Development Centres）から研究委託を受け、視覚障がい者アスリートのクラス分けテストの開発を行っている。雇用している博士学生の研究は、世界中の視覚障がい者アスリートを対象に、クラス分けの意識調査からテスト方法の開発までを行うことになっている。こういった現場の問題解決と直結した研究は学生のモチベーションも高く保たれる上に、専門家としての意識も高まるように感じる。また、教員側も一貫したテーマで研究を深化できる。

この仕組みの更なる利点は、就職とも直結し得る点である。最近卒業した博士学生は、サッカーの名門アヤックスで選手の能力評価やトレーニング方法の開発をテーマに博士号を取得し、そのままアヤックスでコーチとして就職した。オランダでは博士学生を採るのは難しいが、採れる状況は学生の就職もある程度約束できる状況であるので、とても良いシステムだと感じる。また、これにより大学とプロスポーツチームとのコネクションも強くなり、トップ選手を実験参加者として研究できる。実際、半年間で修士学生のプロジェクトをいくつか見学したが、プロ野球選手、F1レーサー、プロサッカー選手、オリンピックが実験参加者である。その代わり、いわゆる部活は大学に無いため、それはそれで不便である。

本当にすばらしい環境にこれたものだと感じて半年が経った。が、こと自分の研究のことになると全く自慢できる成果は無い状況である。そもそも留学したいと思った一つの邪な考えは、憧れの国内研究者の方々がすべからく留学していたので、留学すれ

ば同じぐらいの力が身につくと思っていたからである。湧き上がるようにアイデアも生まれ、山ほど論文も書けるとも思っていた。ただ、半年かけてそれが錯覚であることがよくわかった。多くの方の協力の下に1年間もの機会をいただいているので、多くのことを持ち帰れるように残りの時間をすごしたい。

VI. 日本体育学会第68回大会関連

日本体育学会第68回大会案内

I. プレセミナー（企画委員会）

下記の要領で、体育心理学専門領域プレセミナーを開催いたします。皆様、お誘い合わせのうえ、奮ってご参加いただければと存じます。

- ・日程：平成29年9月7日（木）
- ・集合場所：東静岡駅南口 12:30集合（タクシーに分乗して移動します）
- ・会場：大谷ゴルフ場
〒422-8017静岡県駿河区大谷5905-1 (054) 237-2717 <http://ooya-golf.com/>
- ・テーマ：「ゴルフのメンタルを経験して指導に活かす！」
- ・講師：菅生貴之（大阪体育大学）
平木貴子（日本大学）
- ・募集定員：20名（先着順）
- ・申込締切：8月28日（月）
- ・参加費：3,000円（プレー料金：18ホール）
- ・申込方法：同封してある別紙資料を参照してください。

II. 学会大会（学会大会委員会）

- ・日程：平成29年9月8日（金）～10日（日）
- ・会場：（9/8）静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」、
（9/9～9/10）静岡大学静岡キャンパス
- ・学会大会スケジュール（体育心理学専門領域）：
 - 9/9 9:30-11:30 ポスター発表
 - 12:00-13:00 理事会
 - 13:30-14:30 キーノートレクチャー1
 - 14:40-16:30 口頭発表1～4
 - 9/10 9:00-11:00 シンポジウム
 - 11:00-12:00 総会
 - 13:10-14:10 キーノートレクチャー2
 - 14:20-15:40 口頭発表5

<シンポジウム>

テーマ：「アスリート・ファーストがもたらした光と影」

司会：土屋裕睦（大阪体育大学）

演者：渋谷崇行（桐蔭横浜大学）「これからの時代に求められる青少年スポーツ指導者」

演者：煙山千尋（岐阜聖徳学園大学）「女性アスリートに潜む健康問題」

演者：荒木香織（園田学園女子大学）「真のアスリート・ファーストコーチングをめざして」

<キーノートレクチャー1>

演者：木島章文（山梨大学）

演題：協応秩序の切替えにみられる体育 - 徳育融合のかたち

司会：山本裕二（名古屋大学）

<キーノートレクチャー2>

演者：鈴木 壯（中部学院大学）

演題：身体の動きの語りところ

司会：武田大輔（東海大学）

VII. 事務局報告

平成28年度体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日時：平成28年8月24日（水）12:30～13:10

場所：大阪体育大学 D号館 202

出席者：阿江美恵子（会長）、関矢寛史（理事長）

土屋裕睦、北村勝朗、内田若希、工藤和俊（学会大会委員）

杉山佳生、兄井彰、西田保（企画委員）

森 司朗、山本裕二（広報委員）

武田守弘、田島 誠（庶務・会計委員）

木島章文（監事）

中本浩揮（幹事）

欠席者：荒木雅信（広報委員）（理事：委任状）

田村 進（監事）

挨拶（阿江会長）

<報告事項>

1. 前回理事会（平成28年度第1回理事会）議事録確認（事務局）

前回行われた理事会の議事録が確認された。

2. 会員の異動、会費納入状況、平成28年度会計中間報告（庶務・会計委員会）

田島理事より、昨年度664名から669名へと5名増加していることが報告された。

3. 会報28号（通巻56号）について（広報委員会、庶務・会計委員会）

武田理事より、会報28号が発刊され発送されたことが報告された。

4. 第67回大会について（学会大会委員会、企画委員会）

杉山理事より、プレセミナーが終了したことが報告された。北村理事より、シンポジウムおよびキーノート2題、口頭発表23題およびポスター発表86題についての確認があった。また、ポスター発表に関して、非会員で発表資格のない学部学生が申し込みをしていたということで2題の取り消しが発表された。

5. 第68回大会について（学会大会委員会、企画委員会）

次年度、静岡大学で9/8-10の日程で開催されることが報告された。

6. その他

<審議事項>

1. 平成28年度補正予算案

田島理事より、平成28年度の補正予算案が提示され承認された。プレセミナーの学生支援や、ランチョンセミナー代に関して増額、HPの管理・充実のための費用に減額を行った。

2. 平成29年度事業案

関矢理事長より、平成29年度事業案が再度提案され承認された。内容は1. 日本体育学会第68回大会の体育心理学専門領域の企画・運営、2. 日本体育学会第68回大会時のプレ/ポストセミナーの企画・運営、3. 体育心理学専門領域会報第29号の発行、4. 理事会（4月、8月を9月に修正（体育学会の時期に合わせて））、5. 総会（8月を9月に修正（体育学会の時期に合わせて））であった。

3. 平成29年度予算案

田島理事より、平成29年度の予算案が提示され承認された。

4. 平成29～30年度役員選挙結果

武田理事より、平成29・30年度専門領域選出代議員および役員（会長・理事）選挙を実施し、平成28年5月14日に開票作業を事務局3名で行ったことが報告された。結果については関矢理事長より、以下のように報告された。

専門領域選出代議員については結果一覧を本部に送信し、その結果、工藤和俊氏、兄井彰氏、内田若希氏に決定された。

役員（会長・理事）選挙については、会長選挙については阿江美恵子氏が11票で1位となったため、会長を依頼した。理事選挙については上位の北村勝朗氏、磯貝浩久氏、山本裕二氏、菅生貴之氏、工藤和俊氏、佐々木万丈氏、中込四郎氏、兄井彰氏、荒木香織氏、荒井弘和氏の10名に依頼したが、中込四郎氏が辞退されたため、次点の東山明子氏を繰り上げ当選とすることとした。

以上の結果および経過が理事会で承認された。

5. 平成29～30年度役員

上記の理事に加えて、事務局選出理事として、國部雅大氏と奥村基生氏、監事として木島章文氏と田中美吏氏を役員に加えることが承認された。

6. 会則改正

関矢理事長より、会則改正の提案があり、一般社団法人日本体育学会という文言を削除することが承認された。

なお、役員選出方法に関しては継続審議とした。

7. 平成28年度総会議事次第

関矢理事長より、平成28年度の総会の議事についての提案があり承認された。

8. その他

体育心理学専門領域 新旧理事の会 議事録

記録者：武田守弘

日時：平成28年8月24日（水）13:10～13:40

場所：大阪体育大学 D号館 202

挨拶（阿江会長）

<審議事項>

1. 理事長選挙

平成29・30年度の体育心理学専門領域役員による次期理事長選挙が行われた。結果から、次期理事長には工藤和俊氏が当選した。

2. 次期役員の委員会構成について

工藤次期理事長が中心となり、平成29・30年度の委員会構成が次のように決定した。

平成29・30年度 体育心理学専門領域役員

会長 阿江美恵子

理事長 工藤和俊

理事

学会大会委員会（発表割振、座長依頼、シンポジウム、キーノートレクチャー等）

山本裕二、佐々木万丈、菅生貴之

企画委員会（学会大会プレセミナー、特別セミナー等）

北村勝朗、磯貝浩久、東山明子

広報委員会（会報、ホームページ）

兄井 彰、荒井弘和、荒木香織

庶務・会計委員会（事務局）

工藤和俊、國部雅大、奥村基生

監事

木島章文、田中美吏

2016年度（平成28年度）体育心理学専門領域総会 議事録

2016年（平成28年）8月25日

会場：大阪体育大学 D201 11:00～12:00

I. 開会の辞

II. 会長挨拶

III. 議長選出

菅生貴之先生（大阪体育大学）が議長の指名を受け、議長を務めた。

IV. 報告事項

1. 平成28年度事業について

(1) 理事会（事務局）

第1回理事会を平成28年4月1日（金）15:00～17:00に名古屋大学ES総合館1階ES会議室にて開催した。また、第2回理事会を平成28年8月24日（水）12:30～13:10に大阪体育大学D202にて開催し、新旧理事の会を同日の13:10～13:40に開催した。

(2) 体育心理学専門領域会報第28号を2016年7月20日付で発行した。（庶務・広報委員会）

(3) 日本体育学会第67回大会における専門領域の活動（学会大会委員会）

大阪体育大学にて一般発表（口頭発表23、ポスター発表86の計109）、キーノートレクチャー2つ、シンポジウム1つを開催する。また、プレセミナー1つを開催した。

(4) 会員異動（庶務・会計委員会）

平成28年3月の会員数：669名

平成27年3月の会員数：664名

2. 平成27・28年度の体育学研究の編集委員追加について

体育学研究の体育心理学専門領域への投稿数の増加に伴い、新たに2名の編集委員の推薦を求められ、正木宏明先生（早稲田大学）、藪内 豊先生（北星学園大学）の2名を平成27・28年度の体育学研究編集委員として追加推薦した。

3. 平成28年度の学会賞選考委員の推薦

平成28年度の学会賞選考委員として西田保先生（愛知学院大学）を推薦した。

4. 日本体育学会第68回大会

日時：平成29年9月8日（金）～10日（日）

場所：静岡大学

5. 代議員選挙の結果

武田理事より、平成29・30年度専門領域選出代議員および役員（会長・理事）選挙を実施し、平成28年5月14日に開票作業を事務局3名で行ったことが報告された。結果については関矢理事長より、以下のように報告された。

専門領域選出代議員については結果一覧を本部に送信し、その結果、工藤和俊氏、兄井彰氏、内田若希氏に決定された。以上の結果および経過が理事会で承認されたことを報告した。

6. 体育心理学専門領域役員選挙の結果

役員（会長・理事）選挙については、会長選挙については阿江美恵子氏が11票で1位となったため、会長を依頼した。理事選挙については上位の北村勝朗氏、磯貝浩久氏、山本裕二氏、菅生貴之氏、工藤和俊氏、佐々木万丈氏、中込四郎氏、兄井彰氏、荒木香織氏、荒井弘和氏の10名に依頼したが、中込四郎氏が辞退されたため、次点の東山明子氏を繰り上げ当選とすることとした。以上の結果および経過が理事会で承認されたことを報告した。

V. 審議事項

1. 平成27年度決算（庶務・会計委員会）

田島理事より、平成27年度の決算案が提示され承認された。

2. 平成28年度補正予算（庶務・会計委員会）

田島理事より、平成28年度の補正予算案が提示され承認された。プレセミナーの学生支援や、ランチョンセミナー代に関して増額、HPの管理・充実のための費用に減額を行った。

3. 平成29・30年度役員

新旧理事会において、平成29・30年度の委員会構成が次のように提案され、総会で了承された。

会長：阿江美恵子

理事長：工藤和俊

理事：学会大会委員会（発表割振、座長依頼、シンポジウム、キーノートレクチャー等）

山本裕二、佐々木万丈、菅生貴之

企画委員会（学会大会プレセミナー、特別セミナー等）

北村勝朗、磯貝浩久、東山明子

広報委員会（会報、ホームページ）

兄井彰、荒井弘和、荒木香織

庶務・会計委員会（事務局）

工藤和俊、國部雅大、奥村基生

監事

木島章文、田中美吏

4. 平成29年度事業計画（事務局）

（1）日本体育学会第68回大会における企画運営

（2）体育心理学専門領域会報第29号の発行

（3）第1回理事会、第2回理事会

5. 平成29年度予算（庶務・会計委員会）

田島理事より、平成29年度の予算案が提示され承認された。

VI. 議長退席

VII. 閉会の辞

平成28年度決算報告

資料 1

平成28年度決算報告(自 平成28年4月 至 平成29年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		1,568,500	1,564,333	4,167
前期繰越収支差額		739,244	744,237	△ 4,993
収入合計(B)		2,307,744	2,308,570	△ 826
支出の部				
当期支出合計(C)		1,496,000	1,276,211	219,789
次期繰越収支差額(B)-(C)		811,744	1,032,359	△ 220,615
支出合計		2,307,744	2,308,570	△ 826

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・前年度繰越金		739,244	744,237	△ 4,993	
・年会費		1,338,000	1,336,000	2,000	2千円×668名(3月16日現在)
・郵便貯金(利息)		100	0	100	
・体育学会専門領域補助金		147,000	144,933	2,067	
・平成29・30年度代議員選挙発送費		83,400	83,400	0	
○収入合計(B)		2,307,744	2,308,570	△ 826	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	501,000	437,104	63,896	第28号発行および第29号作成
	印刷費	240,000	264,480	△ 24,480	第28号
	会報送料	56,000	57,624	△ 1,624	第28号
	原稿料	165,000	115,000	50,000	9名(第28号)+14名(第29号)
	会報送付用封筒代	20,000	0	20,000	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	0	20,000	
・学会大会関連経費	小計	220,000	285,226	△ 65,226	第67回大会
	司会・演者への謝礼	100,000	175,000	△ 75,000	
	会員外交通費補助	30,000	16,816	13,184	
	プレセミナー学生支援	30,000	24,000	6,000	
	ランチョンセミナー弁当・茶代	60,000	47,050	12,950	
	学会案内送料	0	15,360	△ 15,360	
	謝礼(学会案内発行作業補助)	0	7,000	△ 7,000	
	・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0
・役員選挙実施費	郵送費、色紙代、文具等	100,000	120,320	△ 20,320	
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当代等	50,000	19,142	30,858	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	250,000	214,419	35,581	旅費交通費・弁当代等
・広報費	HPの管理・充実のための費用	170,000	0	170,000	
・通信費	会員・理事連絡費	5,000	0	5,000	
・当期支出合計(C)		1,496,000	1,276,211	219,789	
・予備費(B)-(C)		811,744	1,032,359	△ 220,615	
○支出合計		2,307,744	2,308,570	△ 826	

△は超過

平成28年度特別会計決算報告(自 平成28年4月 至 平成29年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)	平成28年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
郵便貯金(利息)		0	2	△ 2
前期繰越収支差額		400,000	400,000	0
収入合計(B)		600,000	600,002	△ 2
支出の部				
当期支出合計(C)		0	0	0
次期繰越収支差額(B)-(C)		600,000	600,002	△ 2
支出合計		600,000	600,002	△ 2

*会員数昨年度669名から668名へと1名減(平成29年3月16日現在)

平成29年 4月 1日

この決算書は適正であることを認めます。

監事

田村 進
木島 章文

平成29年度補正予算案

資料 2

平成29年度補正予算案(自平成29年4月 至平成30年3月)

○収入の部

款	項目	前年度予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		739,244	811,744	△ 72,500	
・年会費		1,338,000	1,338,000	0	2千円×669名
・郵便貯金(利息)		100	100	0	
・体育学会専門領域補助金		147,000	147,000	0	
・平成29・30年度代議員選挙発送費		83,400	0	83,400	
・当期収入合計(A)		1,568,500	1,485,100	83,400	
○収入合計(B)		2,307,744	2,296,844	10,900	

○支出の部

款	項目	前年度予算	予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	501,000	501,000	0	第29号発行および第30号作成
	印刷費	240,000	240,000	0	
	会報送料	56,000	56,000	0	
	原稿料	165,000	165,000	0	
	会報送付用封筒代	20,000	20,000	0	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
・学会大会関連経費	小計	220,000	190,000	30,000	第68回大会
	司会・演者謝礼	100,000	100,000	0	
	会員外交通費補助	30,000	30,000	0	非会員・専門領域非会員対象
	プレセミナー学生支援	30,000	0	30,000	
	ランチョンセミナー代	60,000	60,000	0	昼食代(弁当・お茶)
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	郵送費, 色紙代, 文具等	100,000	0	100,000	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	50,000	0	
・会議費	理事会, 委員会開催費用	250,000	250,000	0	旅費交通費・弁当代等
・広報費	HPの管理・充実のための費用	170,000	470,000	△ 300,000	
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	5,000	0	
・返還金	年会費の返還金	0	0	0	
・当期支出合計(C)		1,496,000	1,666,000	△ 170,000	
・予備費(B)-(C)		811,744	630,844	180,900	
○支出合計		2,307,744	2,296,844	10,900	

△は超過

平成29年度特別会計予算案(自平成29年4月 至平成30年3月)

○収入の部

款	年度	前年度予算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		400,000	600,100	△ 200,100	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		100	100	0	
・当期収入合計(A)		600,100	800,200	△ 200,100	
○収入合計(B)		600,100	800,200	△ 200,100	

○支出の部

款	年度	前年度予算	予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)-(C)		600,100	800,200	△ 200,100	
○支出合計		600,100	800,200	△ 200,100	

△は超過

編集後記

この度、お届けする体育心理学専門領域会報第29号（通巻57号）は、事務局のご尽力をいただき、無事に発刊することができました。感謝いたします。

今回、新しく選出された広報委員で話し合い、研究室紹介、学位論文紹介及び海外情報については、事務局から会員みなさまにメールでご案内を差し上げ、執筆者の候補を募り、執筆依頼して、原稿を提出していただきました。その甲斐あって、学位論文紹介は、9名のみなさまに執筆していただくことができました。このように体育心理学専門領域でも、数多くの方が博士の学位を取得され、各方面で活躍されています。この会報で学位論文の紹介をさせていただいた件数は、2013年（第25号）は4件、2014年（第26号）は8件、2015年（第27号）は3件、2016年（第26号）は2件と今年度を含めると過去5年間で、26件になります。今後はさらに多くの方々が学位を取得されていくと思われれます。このような方々の質の高い研究を含め、会員みなさまの研究や研究会、研究室の情報など、この体育心理学専門領域の活動内容がよく分かり、会員にとって有益な会報となるように努力していきたいと思っております。そのためにもメール等で会員みなさまから多くの情報をお寄せいただけるように、配慮をいたします。今後ともよろしく願いいたします。

最後になりましたが、お忙しい中、この会報に原稿を執筆していただいた先生方に深く感謝いたします。

広報委員会委員長 兄井 彰

日本体育学会体育心理学専門領域会報 第29号（通巻第57号）

発行 平成29年7月31日 発行（非売品）
発行責任者 工藤 和俊（代表）
発行所 日本体育学会体育心理学専門領域事務局
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科
TEL：03-5454-6854 FAX：03-5454-4317
E-mail：taiiku_shinri@idaten.c.u-tokyo.ac.jp
URL：http://www.dexterity-lab.c.u-tokyo.ac.jp/
psychology_of_physical_education.html

印刷 株式会社コームラ

